

る。その縁起に就ては江戸名所圖會・東海道名所圖繪・遊歴雜記・平間寺縁起書等皆言ふ所を一にしてゐる。固よりかゝる縁起は純正科學的には信仰をシヤステイファイする爲に潤色を加へられてゐるとしても應用社會學的に見てこれが今日の信仰の基調を爲してゐるとすれば教化上捨て難いものがある。

縁起 昔崇徳天皇の大治年間(1136)源義家の臣で平間兼豊及びその子兼乗が戦功により邑を尾張に賜つた。然るに冤を被つてこの地に流され漁獵で生計を立てゝゐた。その内父は死し、兼乗も四十二歳になつた。或夜の夢に高僧が現れ、その御告に海上光明の處に網を入れば佛像を得べし。汝信仰して懈怠なくんば災難滅却し、當來必ず都率天の淨土へ行くべしと宣うた。高僧は即ち弘法大師で、佛像は彼が大唐にある日、末代有縁の衆生を結縁せしめん大誓願を立てゝ、厄除の自像を刻み、海中に流したものであつた。果して夢の如く彼は佛像を得たので、草庵を結んで朝夕供養を怠らなかつた。會々この里に遊化した高野の尊賢上人が彼に力を合せて堂宇を營むことに骨を折つた。天承元年(1131)四月廿一日それが落成し、寺は平間をそのまゝ平間寺と呼ばれることになつた。

縁起に關して新編武藏風土記稿は異説を採つてゐる。即ち本尊は海から平間氏がお救ひ申したのではなくて平間村の稱名寺の佛像で川に捨てられたのを、下流で拾つたのだとしてゐる。

さて引かへして再び京濱電車に乗り總持寺停留場下車、省線の踏切りを越せば總持寺である。もし川崎からでなければ省線鶴見驛下車。線路に沿つて四五百米西行すれば門前が出る。總持寺の隣は遊園地花月園で、園中には子育觀音(子生山東福寺 新義眞言宗智山派)がある。

總持寺

諸嶽山 曹洞宗 横濱市 鶴見區 鶴見町

大本山、元は能登國鳳至郡樺比村に在つたが、明治三十一年(1898)一山火災に會つて烏有に歸し、時の貫首石川禪師は大英斷を以て北海の邊陲より鶴見の高陵に移轉再建を斷行したのである。遷祖の大禮の行はれたのは明治四十四年十一月五日であつた。

その規模は實に宏大で大本山たる格式は十分具へてゐるが、何分建物も新しく林も若く、禪寺としては稍々宗教味の薄い憾が無いでもない。主な建物は佛殿・放光殿・衆寮・紫雲台・侍鳳館・常照殿・僧堂等で廻廊で連つてゐる。佛殿は勅使門内の正面にあり方十二間入母屋二重屋根の禪寺らしい壯嚴な建築である。本尊の釋尊を中央に、迦葉・阿難の脇士を安置してある。放光殿は十六間に十四間の位牌堂で、その左に僧堂が新しく完成した。鐘樓は總門内左手の丘上にあり、三間に三間半の鎌倉式建築で見るからに遒勁偉大の感を與へる。鐘も一丈の餘も有らうと思はれるが餘り感心しない音だつた。座敷の襖地は當代畫工の手になつたもので華麗を極めたものがある。國寶として唐畫の提婆達多と大法被とがある。後者は元祿美術を紀念するもので七米三に六米四といふ大帷幄である。文字は大乗寺月舟の筆。

寺記に據ると、後醍醐天皇の元亨元年(1321)定賢律師が瑩山禪師の徳に欽慕し、その住山開堂を乞ひ、禪師も之を唯諾して入山せられ、こゝに諸嶽山總持寺が誕生を遂げた。當時天皇は特に紫衣を賜ひ、日域無雙の禪

苑、曹洞出世の道場」たる論旨を下し、總持寺を擧げて官寺と爲し、實祚延長の祈願道場に列せられた。加之、總持寺は瑩山に次いで當時洋行歸りの蛾山を得て寺門益々榮えた。論旨を拜する事五度、門末を開くこと一萬三千、檀信を撮する事百五十餘萬といふ。

又京濱電車に乗り、生麥で下車、舊東海道に出て神奈川宿の方へ眞直ぐ約五六百米行けば、松並木が盡きた所で新國道と出會ふ、横濱市電の生麥終點である。その左側ガードの直ぐ手前に、一段高く記念碑が建つてゐる。

生麥事件の故地

横濱市 鶴見區 生麥町一一番地先

生麥事件の起つたのは生麥宿の西外れで、碑のある所よりずつと手前である。碑面には左の如く記してある。

文久二年壬戌八月廿一日英國人力查遜

殞命于此處乃鶴見人黒川莊三所有之地也

莊三乞余誌其事因爲之歌々曰

君流血兮此海塲我邦變進亦其源強藩起兮

王室振耳目新兮唱民權擾々生死疇知聞萬

國有史君名傳我今作歌勸貞珉君其含笑于

九原

明治十六年十二月 敬字中村正直撰

生麥事件については國史大辭典（一九二六頁）に詳細に出て居るが、先年日本歴史地理學會でこの方面に研究旅行を試み、鶴見の人黒川翁が實地に就いて親しく説明の勞を取つて下さつた。黒川翁は現在鶴見町八三三黒川藥店の御老父で昭和七年八十七歳の高齡であるが、尙鏗鏘として居られ、筆者も最近親しくお目に掛つて、お話を承ることが出来た。尾佐竹猛氏はその研究旅行の際の實地踏査を經とし日頃の研究を緯として、歴史地理（三七ノ二・三・四）に嚴正精密にこの殺害事件を書かれてゐる。殊に第四號（三一頁）に於ては、その大要を掲げられてゐる。

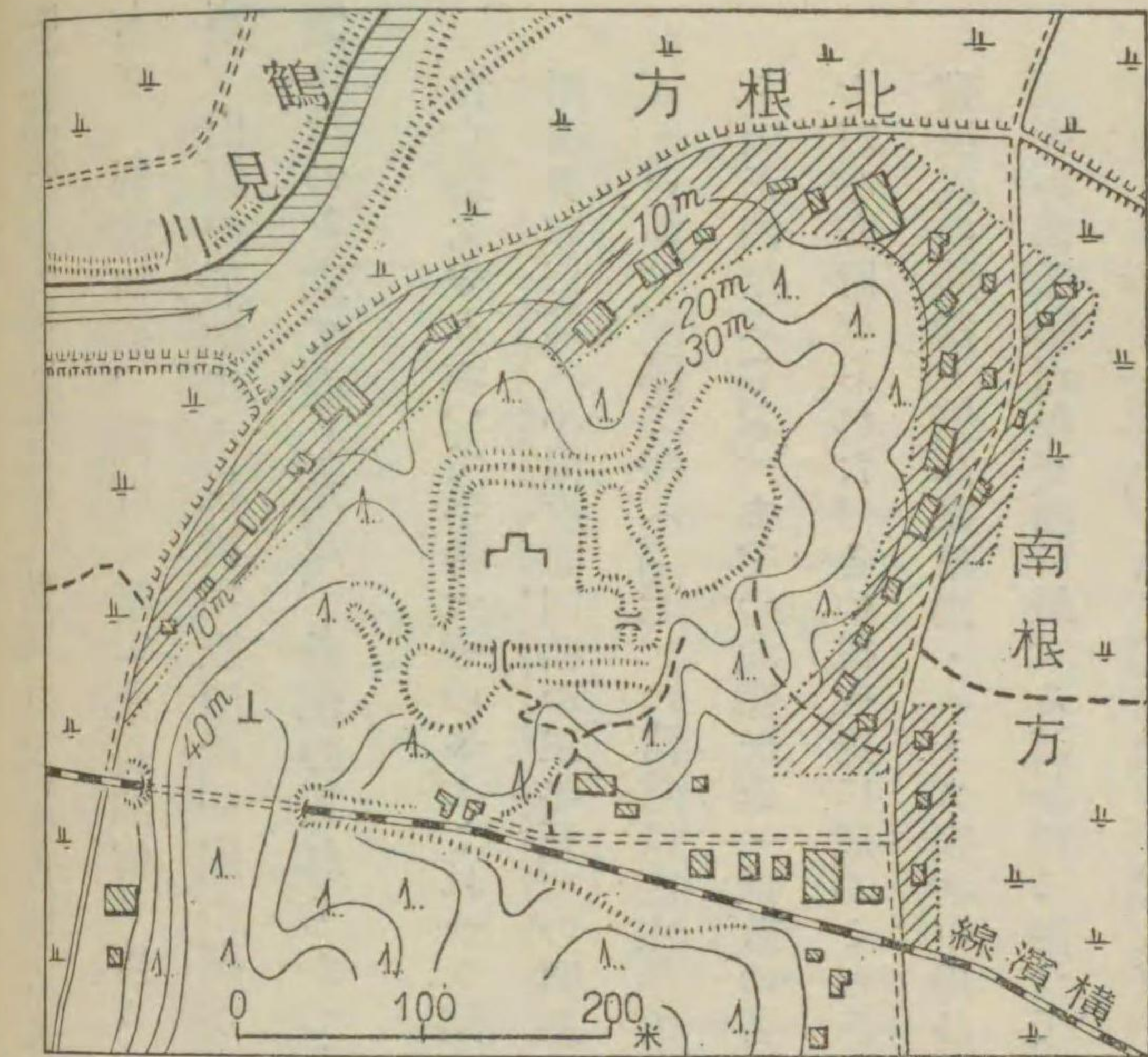
事件は文久二年八月二十一日午後二時半頃（西曆一八六二年九月一四日）の出來事で、幕府の威信全く地を拂ひ、攘夷論はその頂點に達した世相であつた。將軍上京攘夷斷行の勅使大原重徳が島津久光に守護されて遙々東下した。樞事はその歸路に起つた。行列の先頭が勘左衛門方前（今鶴見町字本宮六九八佃煮商司關口常吉）に差し掛つた時、馬上遠乘に出掛けた英國人リチャードソン・マーシャル・クラーク・ボラデルの一行が六藏方前で駕籠に行き會ひ、島津の從士共は將に馬首を轉じて歸らんとする一行に斬りつけ、英人一行は逃れて源四郎方前（今同五四三川端久吉）に至つた時、リチャードソンは傷口より腸部脱落して氣力盡き、約二百米を距る（今字原一一）（碑の附近）甚五郎方附近にて落馬した。追つて來た御供頭海江田（信義子爵）奈良原（繁男爵）等六名が更に畑に引きすり込んで慘殺した。これがその事件の顛末であるが、これが原因となつて遂に薩

川崎・鶴見と生麥・小机

る泉谷寺（淨土宗）へ行くが、少し遠いから時間の都合で割愛する。

小机城址 神奈川區 小机町

城は鶴見川流域の平野に突出した台地の一端を利用したもので、三方は急な崖、南方だけが頂の幅十



小机城址圖

八米程の丘脈で丘陵に連つてゐる。(横濱線は今この下を通る)。主要な郭は東西の二郭で、共に石垣を用ひてないから幾何學的に正確な形ではない、東の郭は地形に沿うて不規則な形をしてゐる。三方は急な崖で、殊に西側と北側とは人工を加へて六七十度の急傾斜をなしてゐる。南北約九十米東西約四十米、土居は大部分壊れて居るが、西南の部分は稍々完全に残つてゐて、この所を鐘撞櫓の址と傳へる。この郭から空堀を一つ越して西に幅九米程の細長い一郭があり、更に空堀が一重あつて、西の郭と土橋で連つて居る。西の郭は東の比較すると、よほど人工が加つてゐる。東南端が

少し突出してゐるが、大體矩形で、土居も四方の空堀も比較的完全に残つてゐる。虎口は東と南とに各一つあり、ともに幅約二米の土橋がある。大さは東西約五十九米、南北約四十米である。猶この郭の防禦の爲、その西に堀が二重あつて、西方の丘脈との連絡を絶つてゐる。

この城の創業者とその年代は明瞭でないが、文明頃(1180)には既にあり、天正十八年迄戦國時代を通じて西南武藏に於ける軍事・政治・經濟上の一中心であつた。この城が史上にあらはれるのは文明頃からである。文明九年(1174)長尾景春の亂の時、矢野兵庫助といふものが當城にあつて、之に應じて上杉氏に反抗し、翌年三月上杉の臣太田道灌の弟資忠に攻圍された。景春はこれを救ふ爲、その本據鉢形城(武藏國大里郡、舊男衾郡)を出て、先づ多摩郡二宮城に入つた。然るに上杉定正は河越城から進出して二宮城を圍んだ爲、景春は成田城に奔り、小机城は陥つてしまつた。(この戦については平塚城・練馬城・石神井城・二宮城等の項参照)、稻付靜勝寺所藏の道灌略譜には道灌この年二月成田某の守る所の小机城を攻むとあると云ふ。以來上杉氏の勢力下に屬してゐたと思はれるが、大永四年(1524)上杉朝興が北條氏綱に江戸を追はれて河越に退き、武藏の南部は北條氏の手歸したので、この頃から笠原越前守、その子能登守等をこの城に置いた。その後天正の末頃には氏政の弟氏堯の屬城で、笠原氏が之を守り、同十八年の役には少數のものが留守して居たので大したことも無く落ちた。

笠原氏 (藤原支流)〔寛政重修諸家譜等〕

川崎・鶴見と生麥・小机

川崎・鶴見と生麥・小机

10

信 爲 越前 北條早雲に屬し、武藏小机城に住す。(死亡年月不明)

康 勝 能登 氏綱に仕ふ。(死亡年月不明)

照 重 平左衛門 氏政に仕ふ。天正十九年十二月十九日伊豆國戸倉に討死。法名全罷。

重政(正) 北條氏に仕へ後天正十九年東照宮に仕へ、都築郡の中二百石たまふ。寛永二年九月七日大阪城に死す。

信 重 爲 次 信 勝 平八郎(墓 牛込長龍寺)

信 定 信 勝 又十郎(墓 牛込天徳院)

信 勝 作右衛門(墓 雲松院)

猶天正十八年小田原の役に、松田憲秀をして叛せしめたその子政堯は笠原新六郎といひ、笠原能登守の養子であつたが、能登守に實子が出来た爲小机城を繼がす、伊豆戸倉に居り、天正八年北條氏に叛し武田氏に通じ、討手に向つた笠原の實子平左衛門を討死せしめたものである。

〔費用 約一圓五十錢〕(古谷・鳥羽・増訂者秋山)

二 榊形・高津方面

廣福寺 榊形城址

小田原急行電鐵(新宿驛發) 稻田登戸下車。北側(遊園地口と反對)へ出る。戸隠不動尊參拜道に沿うて進むこと約五百米、小田原急行電鐵の踏切を過ぎ、左へ行けば廣福寺の門前に入る。

廣福寺

松本山 新義真言宗豊山派 神奈川縣 橋樹郡 生田村 稻ノ目

門を入ると、左に本堂右に鐘樓がある。正面、一段高い所にある堂は觀音堂で、榊形城主、稻毛三郎重成の守護佛、僧行基の作と傳へる觀音の木像が安置してある。本堂は寛政元年(1788)權大僧都寛意の再々建で、阿彌陀如來を本尊とせるも、後五智如來が本尊となつた。新編武藏風土記稿に「稻毛三郎重成の像として雲龍の文なる狩衣を著し金の梨子、打烏帽子著したる坐像あり、丈一尺五寸ばかり。」とあるが、これは本堂にあり、その他、稻毛一族の位牌七基がある。

面には榛谷太郎平重秀法名蓮風、榛谷小次郎重季法名如月、榛谷四郎重朝法名滯悟、森五郎平行重法名玄理、小澤次郎平重政法名眞悟、稻毛三郎重成禪門道全、一室圓如丈禪定尼靈位とある。歿年は重成のには元久二乙丑年六月二十四日、行重のは不詳、最後のは建久六乙卯年七月上四日とあるのは重成の妻であらう。他は元久二乙丑年六月二十三日とある。

榊形・高津方面

11

江戸名所圖會には、この邊ではこの寺と後の城址とが出てゐる許りであるが、新編武藏風土記稿の記述と同様である。しかし後者は重成の木像も近世の作であり、観音が彼の持佛であつた事も疑ひ、五輪の塔も後から持つて来たもので、要するに「此寺の背後に柘形山の古壘跡あるに仍りて、之を稻毛三郎に附會せし事なるべし。」と同情のない斷案を下してゐる。

當寺は承和年中慈覺大師の開創にして、中興の祖を長辨和尚とする。尙、觀音堂は毎午年之を開扉して衆席に參拜せしむと云ふ。

觀音堂の西後に墓地あり。奥まつた所にある石段を登れば、大樹の下に、稻毛重成の墓があるが墓石に刻した文字は全く消えてしまつてゐる。

觀音堂の後方から東へ出て櫻の並木道を登ると二百米許りて、柘形城址の一郭に達する。

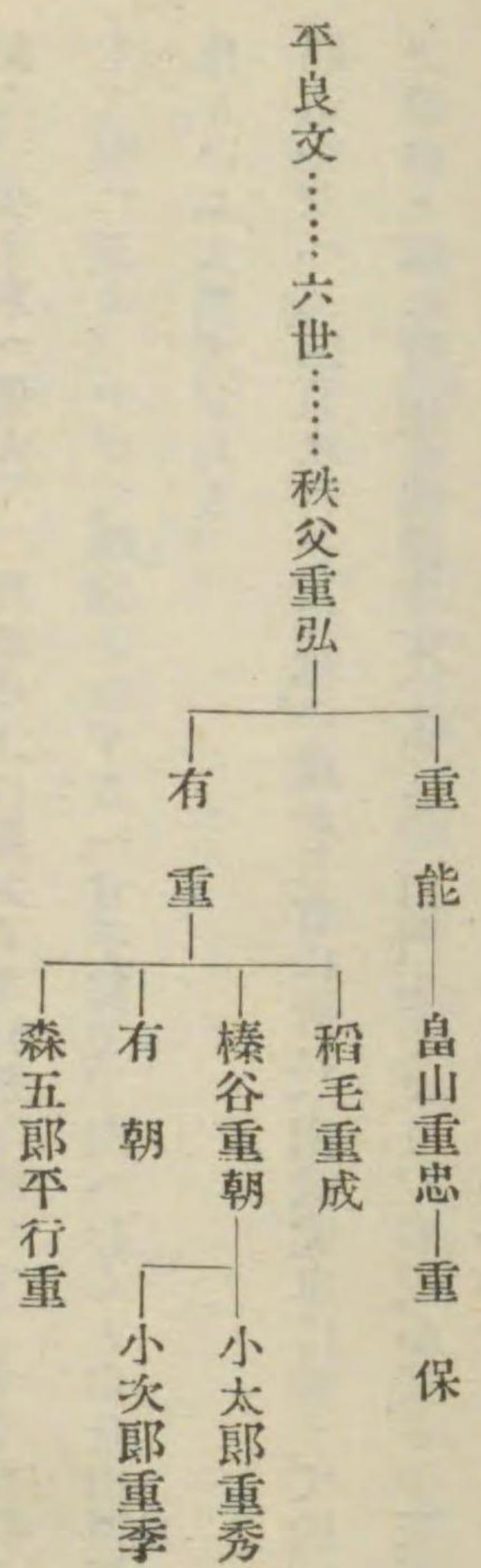
柘形城址 橋樹郡 生田村

出丸の如きも空堀の如きものも見當らない。唯、山上に一郭を残し草が一面生ひ茂つて居り、北隅に一祠あつて稻毛氏一族を祀る。其處の立札に城址面積八反歩とある。東南隅に博覽會の朝鮮館を移したと云ふ休憩所があるが荒れてゐる。

柘形城は、稻毛三郎重成の居城であつた。重成は、北條時政の義子で、畠山重忠、源朝雅も、時政の義子であつたが、時政の後妻、牧の方の出なる娘の夫朝雅及び實子政範を愛し、重忠を惡み、事を構へて之を殺した。

(鶴峯)重成は時政の軍にあつたが、時政は重忠を誅せしは、その罪重成にありとなし、遂に之を攻め滅した。元久二年(1305)六月二十三、四の兩日である。

この経緯は北條九代記・東鑑に出てゐる。



稻毛氏滅亡後小田原北條家の家人横山式部少輔、舊城を取立て、壘を築きその子弘成に至り永祿十二年(1569)武田信玄小田原侵入の際焼拂はれたと云ふ。小田原記に次の一節が出てゐる「六郷に行方彈正居たりける。(中略)稻毛の田島・横山・駒林を引卒し橋を焼き落し、甲州勢を通さす云々。」

尙、この附近の名所としては、向ヶ丘遊園地がある。昭和二年に出来た戸隠不動尊にも參詣者が多い。

柘形山の山上に登つて来たのと反對側に道がある。之を四、五百米も下つて平地に出ると、道の右側の山腹や谷間に多數横穴があつて、飯室長者の穴と稱する。新編武藏風土記稿には、「兩崖に十五六ヶ所」とあるが實は百に近い穴があるとの事である。猶この穴に就ては人類學雜誌第三十六卷第八號以下に富士川滋氏が論じて居られる。それに依ると、「入口の幅約一米、高さ〇・八米、内部は奥行約二米、高さ内部崩落砂礫發掘後

の測定で凡二米、横幅凡三米、地質は砂礫層。」とあるが、もつと大きいのもある様である。

先刻の道を更に進むと、正面に一祠がある。この社は長森稻荷で、榊形城の東北隅、即ち丑寅の方角に方り鬼門除として祭られたものだ云ふ。祭神は稻荷の外星夜明神・海光曜明神といふ。

さてこれで大體この附近を一巡したのであるから、驛へ引返すなり、北に歩いて多摩川の河原へ出るのもよい。しかし時間があれば高津町まで歩いて玉川電車で東京へ歸るのも面白いであらう。約四軒ばかりであるから、散歩にも好適だが、道は極めて單調で、何等史蹟はない。二、三の寺が散在してゐる許りである。

長森稻荷の社殿に向つて、右側にある細い徑を二百餘米行くと右側の高い所に法言山安立寺（日蓮宗）がある。其處で左折して縣道に出るが、これに沿うて稻毛用水が、靜かに流れてゐる。縣道は自動車が行くから、少し東へ進んで、用水の上に架かる本村橋を渡つて、すぐ右折し、東へ東へと行く。一千三四百米にして堰に至る。やがて縣道と合する一寸手前で、左へ行くと白丘山龍巖寺がある。寺寶として、傳教大師の作といふ大黒天がある。

縣道を左へ三四百米行き、杉林の處から右に折れ、南武電車に沿うて約一千百米もすると左に圓福寺がある。青龍山と號し曹洞宗總持寺末である。山門をくゞり、石段を登ると正面に本堂、左に天神祠がある。その前を過ぎて小徑に沿ひ寺の背後の丘に登る。この丘は津田山と呼び、多摩川を登戸、布田方面から世田ヶ谷・馬込迄見晴され非常に景色がよい。玉川電車の遊園地が出来ることになつてゐる。「津田山」と書いた犬養氏の碑の右側を北に下れば、秋興山淨元寺（日蓮宗池上本門寺末、開山日應）がある。門前を過ぎて、丘のす

そに沿ふ様に行くと、興林山宗隆寺（日蓮宗池上本門寺末）がある。

この寺の背後の丘も、眺望開濶で津田山と異つた趣がある。門前の道を右に行き直に左に折れ、眞直ぐに進むと、南武電車・玉川電車の溝の口驛へ達する。尙、季節によつては附近の久地梅林を訪れるのも面白い。

〔費用 新宿・稻田登戸間三十錢、溝ノ口・澁谷間十九錢〕（古谷・増訂者岩見）

三 相模國分寺と鶴ヶ峯古戰場方面

清水寺 湧河寺址 國分尼寺址 國分僧寺址 國分寺 條里の址
 有賀神社 鶴ヶ峯古戰場 白瀧山不動尊

小田原急行電鐵(新宿驛發)海老名國分驛にて下車、驛を出て村社彌生神社(八幡社外三社合祀)と石標の有る所を曲る。神社の後が清水寺である。

清水寺(水堂) 興徳山 臨濟宗建長寺派 神奈川縣 高座郡 海老名村 國分 北原

正面に二王門があり、門前右手に前海老名小學校長にして、この地方の史蹟調査に専心努力せられた中山每吉氏の頌徳碑がある。中にはいると右手に元祿十四年(1701)の銘のある鐘がかゝつてゐる。乃木將軍筆の忠魂碑の下に巨大な石があるのは尼寺址から持つて來た礎石である。本堂は三間四面造古雅である。本尊の千手觀音は木彫立像、高さは二米で奈良時代の作、國寶である。この寺はもと字尼寺の地にあつた湧河寺の後身で、正保三年(1646)改稱せられて國分尼寺の廢址に移り、元祿三年再び今の地に移された。當時寺運隆盛を極めたと傳へられてゐる。本堂右手にある寺は、同宗派で、近時南方から移された龍峯寺である。寺の前は平野を望み甚だ景勝の地である。

本堂の後の道を進み、左に曲つて十字路の所で左する。道の稍々曲る附近の南方の畠の地は、口碑に傳へられた踊場で、國府はその左右に市場を伴ふが普通で、こゝにも南に市場といふ小字があり、北はこの踊場がその舊蹟である。蓋し古の市に集る者は固より物々交換するのが要件ではあつたが、一は男女互に着飾つて群り遊ぶから興つた名であらう。

尙進んで線路を横切り、二つ目の十字路の所に來て左する。この十字路の所を御門口ゴモングチと昔から言ひ傳へられ國分寺の北門址であらうと思はれる。

次いで、廣い道の丁字路に來て右すれば坂がある。坂の上左手は湧河寺の址である。

湧河寺址 漢河寺址 海老名村 國分 尼寺

崖に望んだ所に溝があり、土手が築かれてゐる。昔はこの地一帯土手が築かれてゐたと云ふ。(故老の言)

坂の下には清水があつて絶えず湧出し、下流は天の川(即ち漢河)と言はれてゐる。清水寺・水堂・湧河寺・漢河寺等の名稱はこれに起源する。

この寺は國分寺建立以前早く既に國府に置かれた官寺で、國分寺建立によつて自然圍込されたもので、かの奈良の金鐘寺が東大寺の域内に置かれたのと同例であらう。國分尼寺が貞觀中に於いて早く既に荒廢に及んだ爲、同十五年(873)湧河寺に移された。即ち尼寺に充てられる程大であつた。所が元慶二年(878)九月地震

相模國分寺と鶴ヶ峯古戰場方面

のため、この寺も頽壞したので、尼寺は湧河寺を離れて本の尼寺の地に移った。後頼朝がこの寺を大に修築したためか、縁起は清水寺の開基を頼朝と傳へてゐる。後尼寺の廢址（この頃尼寺は他に移つてゐる。）に移り、元祿三年、今の清水寺の地に移った。

この所を一週して反對側の坂を登り、進んで右し、行手に彌生神社の鳥居が見える頃右に曲り、線路を越えれば尼寺址に出る。

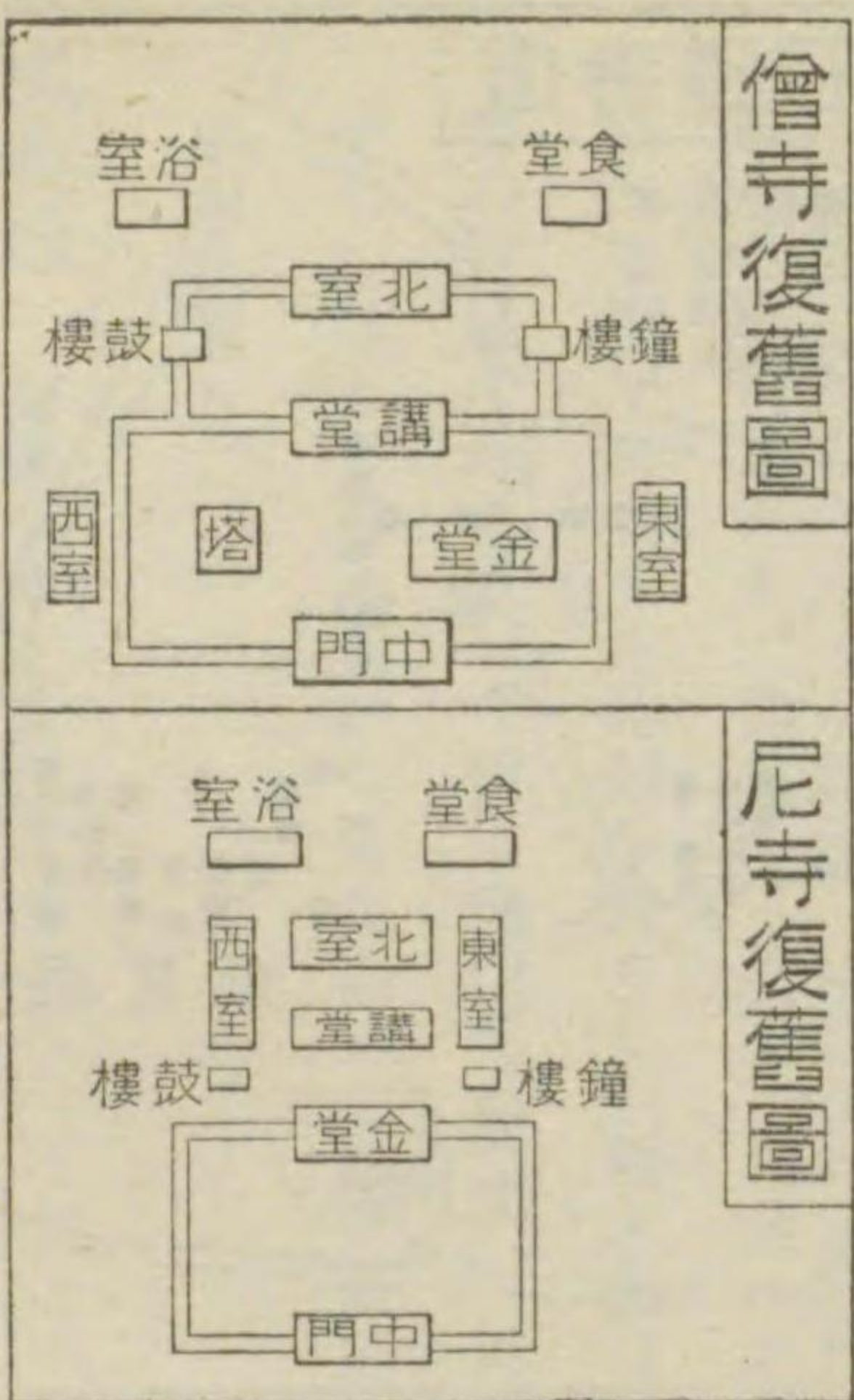
國分尼寺址 海老名村 尼寺

道の二俣に分れる所に礎石が一箇存してゐる。鼓樓の址かと云はれる。直ぐ先に國分尼寺講堂址の標石がある。畠の間十八米の眞南に一段高くなつた土壇があり、金堂址で、上に庚申塔があり、礎石は一つしかわからず、皆土壇の下に埋つてゐる由。この南三十米許りは中門址といはれるが、今何も残つてゐない。

驛の通りに出て南すると普門と書いた水堂入口の碑がある。この邊は國府址かと言はれてゐる。嘗て多くの瓦石及土器類が発掘された。猶、南すれば逆川用水堀がある。大化の時代墾田に伴つて開かれた一大用水路で、道祖神の脇の道な用水堀にそつて行くと道が堀から分れる所は本倉とよばれる。即ち國府所屬の倉庫のあつた所といはれてゐる。國府は後道路の變遷によつて南に移り、國府津の名を残してゐる。南して右に曲ると其處に國分僧寺址がある。

國分僧寺址 海老名村 國分宿

最初にあるのが講堂址の礎石七つ、右手の行先に巨大な碑が立つてゐる。内務省の立てた「史蹟 相模國分寺址」の標石である。こゝは七重塔址で、礎石は十、こゝから東に金堂址の礎石があり、相模國分寺遺蹟の碑がこの南方に中門址がある。



文治年間頼朝大に國分寺の修造を企てた。また豪族國分氏の歸依によつて當寺も一度は其の莊嚴を維持する事が出来たが、後南北朝の亂になり、また顧みる者無く、伽藍は再び荒廢に及んだ。まして永享の亂(1430)その他の戰國の争亂に及んで頽廢しつくしてしまつた。

中門址を眞直行くと村役場があり、その中にこの地方の出土品を藏した温故館がある。村役場を出て右すれば天然紀念物の大樺がある。樹齡千二百年と傳へられ、周圍八米弱、此處を通つて國分寺本堂に詣でる。

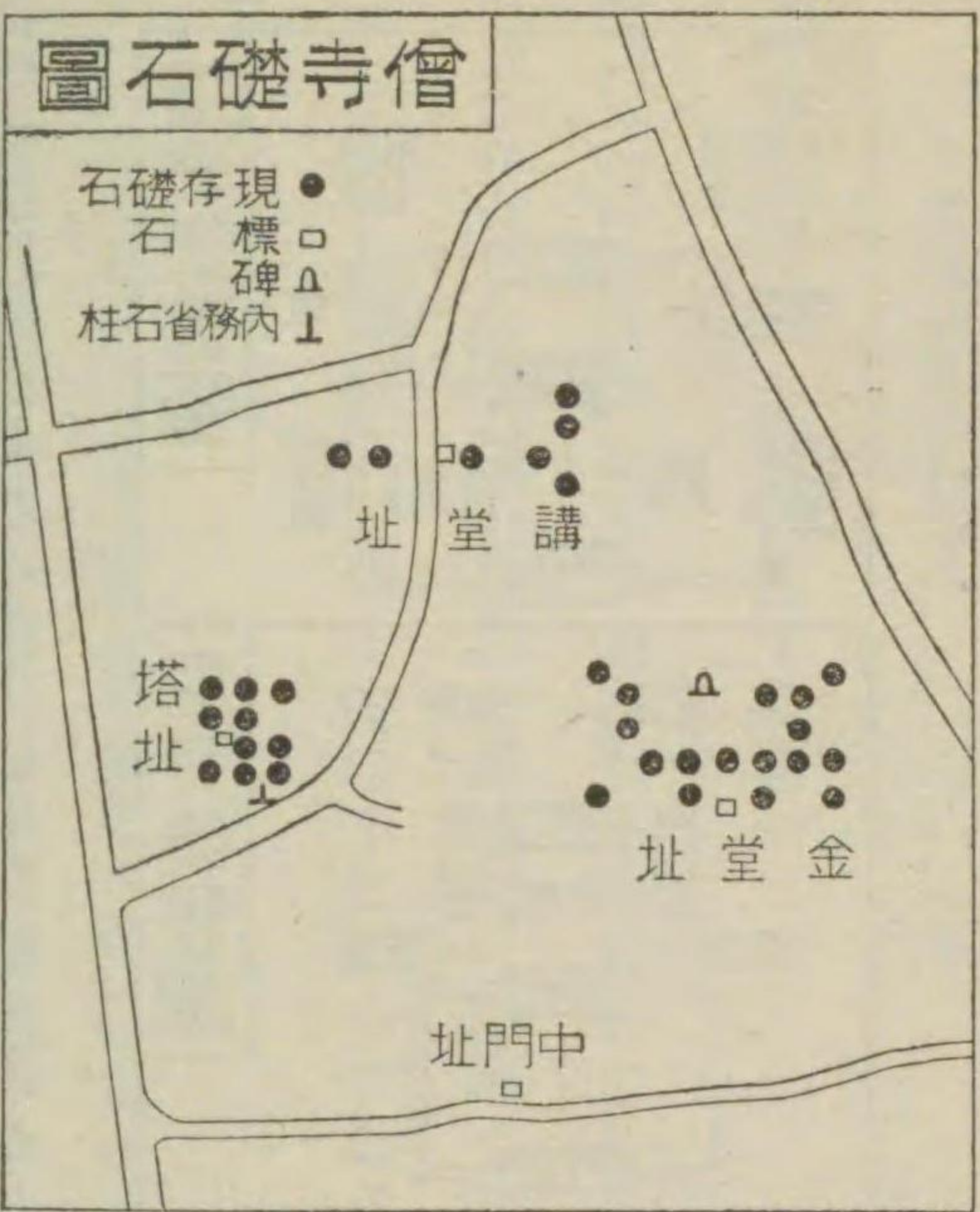
國分寺 東光山醫王院 眞言宗高野派 海老名村 國分宮臺

石段を上ると右手に國寶の正應五年(1292)國分次郎左衛門秀頼献納の、國分尼寺大鐘がふゝつてゐ

相模國分寺と鶴ヶ峯古戰場方面

る。正面が薬師堂左手が國分寺である。薬師堂はこの後の丘にあつたが後移されたもので、明治四十三年焼失した爲に、今は假屋である。本尊は薬師如来で行基の作といはれ、國寶である。

背後の丘に右手より上る。小學校の上の東屋の所に出て真直に行くと薬師堂址とある。道路に礎石が一つ埋



幕末に及んではそれも廢類してしまつた。

今の小學校の地に八幡宮があつた。往時國分寺鎮護として勸請せられた處で、近年迄村社として鎮座あつたが明治四十二年に他社と併合のため、水堂の下に移つて今は彌生神社と言はれてゐる。

小學校の運動場の端の丘に石佛が立つてゐる。そこは國分寺南大門址である。併し薬師堂址からすぐ瓢塚等に行つて、南大門址は歸りに見るがよい。

薬師堂址の道を行き、二俣に分れる所の右手に誰でもすぐわかる前方後圓の瓢塚がある。上に相模國造之墳墓と書いた標石がある。

二俣道で右し、十字路を右し、大道に出て左する。左手の畠の中に市神社の標石がある。昔の市場の址で、交換の場所である。突當つて左し、真直に坂を登つて行けば前方畠の中に塚がある。太鼓塚と言ひ、神社の境内で物々交換する時刻を知らした物と思はれる。塚の背後は大字大谷小字濱田で、この邊に街道のあつた時の驛址であると。今何も残つてゐない。再び小學校にもどる。小學校の上から耕地を望めば、井桁を澤山並べた如く一面に廣がつてゐる。これが條里の址である。小學校に出て南大門址を見、次で縣道に出て厚木の方に進む。

條里の址 海老名村・有馬村

大化改新に際して所謂井田制が施行された。新政は比較的束縛の少ない地に先づ實施してその範を示されたので、案外この地のは古からう。即ち口分田を給ふ事になつて今迄の私有地は統一整理され、田地を均分に區分する必要がある。その區劃は或地點を指定するのに最も簡便な割方を必要とし、また通路としても役立てねばならぬ。そこで縦横に平行する大小數多の阡陌を劃する田制案即ち條里制

が案出された。條は東西に引いた平行線によつて劃された大區劃の名で、里は南北に引いた平行線が平行線と交叉して生ずる所の小區劃の各々に名付けられる。里は更に一町を單位として碁盤の目の如く小分され、その各々を坪と言つてゐる。

縣道を行く事約二百米右に曲ると突當りが有賀神社である。

有賀神社

郷社 海老名村 上郷 河原口 入會地

祭神 大日靈貴命

天智天皇の御代の創建といはれ、三代實錄にもその名見え、孝謙天皇の御代に神殿を再營したといふ延喜式内當國十三座の一に列し、南北朝戰國の争亂で大に衰へたが天正三年(1575)修整、後屢々修築された。神社の裏は相模川を望み、形勝の地である。

縣道から神社に来る道の右方一帯はこの地方の豪族海老名氏の館址であると傳へられてゐる。

元來た道を引返し、縣道に出ない中に右すると海老名氏墳墓入口とある。この地は寶樹寺の廢跡で、永享の亂に足利持氏の本營を置いた海老名道場である。墓碑は寶篋印塔で、表に大章樹公庵主、永享五年八月十三日と刻してある。寶樹阿彌の墓で、則ち海老名備中守持季の法名である。里人之を海老名源八の墓といふが時代がちがふ。源八季定は源平争覇の際に活躍した人である。海老名氏は村上天皇の皇子爲平親王の後裔で康平年間奥州の役に賴義に従つた源四郎親季も有名である。この豪族も永享の亂に及んで没落してしまつた。

墓を出て右し、また左する。材木屋の角を曲ると神中鐵道厚木驛に出る。なほ南に小田原急行電鐵河原口驛がある。

厚木驛から神中鐵道で鶴ヶ峯下車、傍の大道を北西に進む、十字路を右して縣道に出、左すると畠山重忠公靈堂(右側鶴ヶ峯古戰場)と書いた標柱がある。

鶴ヶ峯古戰場

都築郡 都岡村 今宿 鶴ヶ峯

畠山重忠戰死の地である。靈堂の前に畠山勢戰死者各靈と書いた棒杭をさした六つの土饅頭がある。所謂六ツ塚で、重忠及び一族郎従を埋めた處と言ひ傳へられてゐる。

重忠は智仁勇備つた良將で、忠義に厚く、幕府の元老として重きをなした。それは幕府を乗取らんとする北條一族の好まぬ所で、その陰謀が重忠の爲に破るゝ事再三であつた。殊に時政の後妻牧の方の女を妻とする平賀朝雅と、重忠の長子重保が京都で争論を引起すに及び、牧の方の怒り甚だしく、時政にすゝめて重忠を亡さんとし、當時菅谷(埼玉縣比企郡菅谷村)に居た重忠に鎌倉に謀叛人が出たから急ぎ出府すべしと質の使者を使はした。そして先づ出府した重保を謀叛人の名目で由比ヶ濱に襲つて騙し打ちにした。重忠は重保に後れて僅か百三十四人を隨へ鎌倉街道を入間川・府中を経て鶴ヶ峯に達した時、二俣川方面よりの義時・時房の率ゐる三萬餘騎の勢に圍まれた。重忠初めて時政の奸計を覺つたが一步も退かず、花々しく戰つて討死した。時に元久二年(1305)六月二十二日、重忠四十二歳である。天下の人之を大に冤とした。義時さへも重忠の首を見て

涙を流して惜んだと云ふ。爾來この地に長年月日六ツ塚が残るばかりで用ふ者も無かつたが、最近軍人、教育家、宗教家等の斡旋によつて成立した重忠會の力によつて假靈堂が建ち、朝夕の讀經供養も勤められる様になつた。

堂の背後の丘からは富士山、大山も見え頗る景色がよい。
再び縣道に出て元來た道を進み、神中鐵道の驛の方に曲らず行けば駐在所あり、そこを曲れば白瀧山不動尊に至る。

白瀧山不動尊 白根神社 村社 都岡村 下白根

祭神 倭武命

不動尊は小高い所にあつて、下を流るゝ小川には瀧もあり、楓が多く幽邃の地である。
殊に興味のあるのは元、寺であつたものが神社に變化した事である。安置してあつた不動尊は五纏二の座像尊で、前九年の役に源義家がこの尊像を兜に納め戦勝したので源家の信仰が厚かつたと云ふ。
歸りは鳥居の前の道を真直ぐ行けば縣道に出る。乗合自動車により省線横濱驛に至る。

〔費用 約二圓〕（久野）

參考 中山每吉・矢後駒吉兩氏共著 相模國分寺志

栗原勇氏著

富山重忠

四 百草・立川方面

小野宮 關戸古戰場 一の宮 百草園 高幡不動 立川原古戰場

普濟寺

京王電車（新宿發）で府中を經、中河原迄行つて下車し、府道を北にすゝみ、中河原の村のはづれから左に折れて行く事數百米で社側に至る。或は府中で降りて、甲州街道を西すること約一軒字屋敷分の小徑を南へ入り百米程行くと八雲神社がある。社側の路傍の檜の根に抱かれて元應元年（1189）の大きな板碑がある。これを見て南し、市ノ川に沿うて田疇の間を暫く行くと、左手に一叢の村落が見える。小野神社はこの中にある。

小野宮 小野神社 郷社 北多摩郡 西府町 本宿 小野宮

延喜式内の社と稱して居るが、今は農家の間に一叢祠を存するばかりである。社は拜殿と本殿に分れてゐるが、極めてさゝやかなものである。

社記によれば祭神は天下春命・瀬織津比賣命の二座で、人皇三代安寧天皇御代御鎮座とある。事の眞偽は別として古い社であるらしい。江戸名所圖會には、祭神は瀬織津比咩命・下春命・倉稻魂命の三神になつてゐる。後成務天皇の御代、當時の國造の崇敬厚く、この社の祭神を六所宮の相殿に遷された。

今の大國魂神社の客殿は即ちこれである。

小野宮からもとの府道に沿つて南し、多摩川の清流を渡ると、相模丘陵の入口の様な所に關戸の町がある。町に入る少し手前の右側に東京府で建てた關戸古戦場の標示札がある。

關戸古戦場 南多摩郡 多摩村 關戸

多摩の清流の南岸に沿ふた河原地である。元この地は鎌倉と陸奥・上野等を連ぬる鎌倉街道の一驛にあたり、前に多摩川を控へて居たので、戦路上屢々劔戟の巷となつた。

太平記の正慶二年(元弘三年)(1333)合戦の條に「義貞數箇所の戦に打勝ち給ひぬと聞えしかば、東國八箇國の武士共順ひ付く事雲霞の如く、關戸に一日逗留ありて、軍勢の着到をつけられるに、六十萬七千餘騎とぞ注しける」とあるのなどもこの所の事である。即ち元弘三年新田義貞鎌倉攻の時、鎌倉勢は入間川・久米川・分倍河原の戦に敗れて崩れ立ち、大將四郎左近入道は既に關戸の河原に於て討たるべき状態となつた。其時、横溝八郎踏み止つて支へ、敵二十三騎を討取り、主従三人討死したが、大將を逃すを得たとの事である。町に入る前右方の山腹にある時宗の延命寺(關門山地藏院)といふ寺にその墳墓なりと傳へるものが残つてゐる。

又關戸の入口を右へ山道を入れば、右手の小高い所を天守台といひ上に金刀比羅宮がある。此處よりの眺望よく、遠くは常毛の山々を望み、近くは百草・和田の山々あり、多摩の清流を前にして形勝の地である。新編武藏風土記稿に「地形も考ふるに、いかさまのみの槽などをきたらばよき要害なるべし、後世槽の大

なるものを天守といふ故、此所も天守台とよぶなるべし、この邊何人の住せし跡なりといふことを傳へず、又古き書にもいまだみざれば、恐くは昔關ありし比、是に上りてのみなどせし跡ならんか」とある。

天守台の石段を下りて數百米行くと、右手に吉祥院壽徳寺(曹洞宗)の森が見える。この寺は、明徳年間或僧が此地に一字の堂を建立して、吉祥山壽徳寺と言ふ禪院を興したが、後永祿年中佐伯市助道永と言ふ武士が中興開基となり、日舜宗惠大和尚を招いて中興開山としたといふ。

この寺から北へ廣い街道を進むと、行手に一ノ宮を圍む聚落が見える。

一ノ宮 郷社 多摩村 一ノ宮

祭神 天下春命 瀬織津姫命 倉稻魂神

安寧天皇十八年の創立と傳へる。この社も亦小野神社といひ、川の兩岸に小野神社があり、共に延喜式に載せられた武藏四十四座の中小野神社であるとも謂はれ、然らずとも論議されてゐるが、この社は地名に一ノ宮の名を存する點より古社にして且、大社であつた事は推定出来る。同村大字百草松蓮寺所藏の經筒によれば、同寺が當社の別當寺であつた事が知れる。

本社の祭神は大國魂神社客殿の三神である。(大國魂神社祭神表及び祭典の條参照)毎年大國魂神社の祭典の時にはこの一ノ宮の神輿が渡御する例になつてゐる。

今来た道を戻り、丘の中へ入り、字百草を通つて段々眺めのよくなる山の中を行けば、郷社百草八幡神社(も

と別當松蓮寺)の石段の下に出る。

この社は往古源頼義朝臣の康平年中の勸請といひ傳へてゐる。祭神は應神天皇である。社の前を少し北へ行くと百草園の休處がある。

百草園 七生町 百草

江戸名所圖會・調布日記・新編武藏風土記稿等に慈岳山松蓮壽昌禪寺と記され、黄檗宗一方の雄として振つた松蓮寺も神佛混淆廢止の時廢せられて、その財寶堂塔皆散逸して了つた中に、辛くも残されたのが元庫裡であつた此の百草園の今の家である。

眺望甚だよく、武藏野一帯を一望のうちに收めることが出来る。松蓮寺の事については武藏名勝圖會・新編武藏風土記稿等を見られるがよい。

百草園の前の坂を北へ降りると廣い道へ出る。其處の道傍に延文三年(1328)の板碑がある。絶えず多摩川の流を右に控へたこの道を西へ行くこと約三千米で高幡不動の前へ出る。山下の百草停留場から高幡停留場まで京王電車も利用出来る。

高幡不動

高幡山明王院金剛寺 新義真言宗智山派 七生村 高幡

大寶以前の開創で、後弘法・慈覺・平圓相次いで再興し、屢々勅願所となつた。本尊不動明王は弘法大師の作といひ、脇士の制陀迦・拾羯羅二童子は本尊よりも後に化身の人の作つたものと傳へて居る。後

世武家の信仰厚く、本尊も亦種々の靈驗を現し、天下に風水疫癘等の諸災の起る前には佛體に汗を生じたといふ事である。昔は後の山上にあつたが建武二年(1335)の暴風雨の爲に倒壊したので、今の地に再建したものである。不動尊の火焰の後に「康永元年六月廿八日修復功畢」とある。寺寶としては文永年間の鰐口が有名で今不動堂に懸つて居るのがそれである。江戸名所圖會には「徑一尺九寸文字九十四字を刻す。其銘左のごとし。」とある。その文字は次の如くである。

(表)敬白 奉 懸

右尋_ニ當寺_ニ者。慈覺大師建立。清和天皇御願所。第二建立斗圓陽成天皇。

彼時頼義朝臣。自於_ニ登山_ニ奉_ニ崇八幡_ニ。第三建立永意得行窰兩檀。

大檀那美作助眞并記氏一宮田人鍋師源恒有

文永十年关西五月廿日

銀念西守氏 鐵 青蓮

(裏)武州高幡山常住金剛寺虚空院別當法印等海、文安二年二月三日、乘海願主とある。

この鰐口は元八幡社に懸けてあつたのを、八幡社の改築の際に不動堂に懸けたものであるといふ。八幡社は今不動堂の後にある。その他畠山重忠の太刀等を藏してゐる。

境内には附近で戦死した上杉憲顯の墓や、維新の際官軍に抗した近藤勇・土方歳三等の碑も有る。此處でも貞永六年・嘉吉元年等の板碑が出たことがある。中古不動を八幡と崇め、所謂兩部が行はれ此所が修驗道の靈場となつてゐたので、不動堂の方が却つて有名となり、明治維新神佛分離の際までは金剛寺は、その別當たるのみに名を止めてゐたかの觀がある。

不動を辭して高幡橋を渡り、田疇の間を行く事數百米で日野の町に入る。江戸時代の甲州街道の一驛である。日野驛から歸つてもよいが、尙時間があつたら立川へ行つて普濟寺その他を訪ねるのもよい。日野から普濟寺へは、日野の渡を渡つて、多摩川に沿ふた道を西へ行けばよい。渡しの邊は即ち後述の立川原古戦場である。猶高幡から立川へは乗合自動車の便もある。

立川原古戦場 北多摩郡 立川村

立川村の東部から、谷保村青柳に近い邊、即ち日野渡から萬願寺の渡の間の川原である。永正元年(1502)九月、扇谷上杉朝良と山内上杉顯定と戦つた古戦場である。

山内上杉顯定の詭計に陥つて扇谷上杉定正が柱石の臣太田道灌を殺してから、兩家はしきりに争ふ様になつた。定正は河越・江戸・小田原(其麾下大森氏之にあり)等の諸城によつて南武藏と相模とを根據とし、古河公方足利成氏と通じ、顯定は北武藏・上野を根據とし、越後の上杉氏を後援として相對峙し、屢々武相の各處に戦つた。定正の死後嗣子朝良、これを繼ぎ、永正元年(1504)九月、駿河の今川氏親、伊豆の伊勢長氏の援兵を得て、廿

七日この立川原に戦つたのである。始め扇谷方が優勢であつたが、後顯定は越後の上杉房能の援を得たため勢を挽回し、再戦に於て勝利を得、朝良は河越城を引上げた。次いで河越城は圍まれて翌年三月に及び、遂に和睦し、朝良は江戸城に移つた。かくして子朝良が大永四年北條氏綱に逐はれて再び河越へ移るまで江戸が扇谷家の本據となつた。前述の立川原の戦を一回とする説(相州兵亂記等)と二回とする説とがある。猶今一つの戦の記録が武藏名勝圖會・新編武藏風土記稿等に出てゐる。

「享徳二年十二月管領上杉左京亮憲忠を成氏朝臣訪れたまひける處へ、上州白井上杉並長尾等軍を發し、成氏朝臣を可致討とのゆへ有ける故、鎌倉より府中まで出陣し給ふ。上州にて此事を聞きて上州勢二十餘騎にて打立て翌四年四月廿一日立川原へ寄來る。成氏朝臣高安寺より此所へ押寄せ短兵急に取ひしぎ火出る程に戦ひける。上杉中務大輔入道憲顯は先陣の大將にて、後陣は長尾左衛門尉入道景中等終日戦ひ、憲顯は深手負ひければ高旗寺へ入つて自害す。成氏勢勝軍はしたれども、石堂・一色等以下百五十人討死し戦ひ疲れて分倍河原へ引取て陣をなす。又翌廿二日分倍河原にて合戦あり」

普濟寺 立武山 臨濟宗建長寺派 立川村 柴崎

寺は多摩川に面した武藏野臺地の端れにある。南は數十尺の斷崖で、多摩を俯瞰し、仰げば關東山脈の連山をへだて、富士をも望み、武藏野としては風景もすぐれてゐる。南向の本堂を中心にして、境内も廣く、東南に二門を開く。當寺は、文政四年(1821)立川宮内宗恒が建立したもので、建長寺

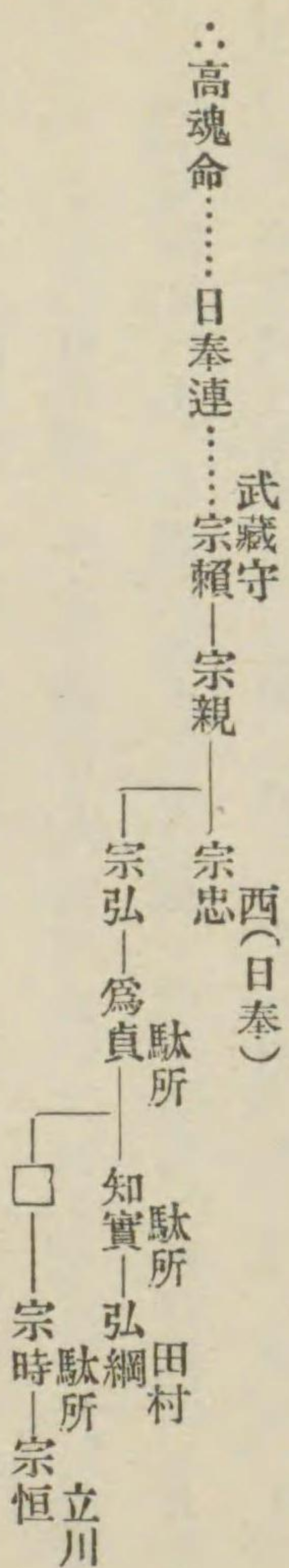
第三十七世物外可什が立川氏の請に應じて開いたものである。現境内は始め立川氏の居城であつたとの事であるから、この城内の一部に寺があつたと考へられる。今寺域九千二百六十平方米、往時の土壘の址掘割の跡も尙存して、城としての規模を偲び得る。立川氏は武藏七黨より出たもので、宗弘の二男立川宮内大夫宗恒始めてこの地に住したと傳へる。天正の頃に至つて斷絶したものゝ如く、その後、その居城址たる此處は寺域となつてゐる。又この寺も門末廿餘ヶ寺、塔中七ヶ院を有する迄隆盛に赴いたが、天正晩年の火災の後振はなくなつたと傳へる。今も猶大檀那立川宮内少輔（法名、寶山道貴大禪定門）の位牌がある。

主な寺寶として物外可什和尚木像及び六面塔がある。何れも國寶に指定されてゐる。前者は本堂内に後者は寺の庭にある。

物外可什の像は和尚の滅後、應安三年（1370）十一月佛師上總法橋朝宗の作で、高さ二尺七寸、拂子を拵し曲録によつた像である。胎内に應安三年十一月の朱漆書の銘がある。六面塔は昔から有名なもので、高さ一米五八、幅零米四二、厚さ約九糎。秩父石（綠泥片岩 Chlorite schist）で六角に組み立て、同質の臺石及笠石がある。前方の二面には金剛・密迹の二王、他の四面には佛法守護の増長・持國・多聞・廣目の四天王の浮彫がある。持國天の像の右下に「延文六年辛丑七月六日施財性了立道圓刊」とある。

境内に首塚と稱し、圓形土塔の上に不揃なる五重石塔をたてたのがある。一に立川宮内墓ともいひ、天正年間立川氏滅亡の際、その首級を埋めたと謂つてゐる。その首塚の附近から掘り出したといふ綠泥片岩の板碑六十六枚がある。板碑は今の塔婆のやうなものであるが、その年號文永・弘安・永仁・正安・嘉元・延慶・應長・正和・文保・元應・元亨・正中・嘉曆・元徳・正慶・建武・曆應・應永に亘つてゐる。綠泥片岩の板碑即ち青石塔婆は由來關東には多く見る所であるが、此處の如く一ヶ所から多くを出し、而もかくの如くまとまつてゐるのは蓋し稀のことである。

立川氏は武藏七黨の一族で、日奉宗忠の弟宗弘が立川に居館を構へて立川氏と稱へたのに起る。



西黨は宗賴が武藏守として下向し、その子孫が土着して、多摩川沿岸の百草・平山・日野・關戸・立川等を本據とし、由比牧・小川牧等の別當となり、一大勢力を得るに至つたものである。日野・平山・長沼・由井・川口・小川・由木・狛江等の諸氏は皆その一族である。

立川氏爾來この地にあつたが、戦國の頃小田原北條氏に屬し、天正十八年（1590）これと運命を共にし子孫は常陸に移つたのである。武藏・相模・下總・上野邊には、これと同じ様な興亡の經歷を有する氏族が少くない。歸路は中央線立川驛から乗車。

〔費用 約一圓〕(太田・鳥羽・増訂者 福島)

参考 福井利吉郎氏普濟寺石幢の形式に就て(藝文五ノ四)

石上生氏 普濟寺の板碑について(考古學雜誌三ノ一)

東京府編 東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第三册第四章及び第五册第七章 北多摩郡立川

町普濟寺

五 井ノ頭と深大寺

井ノ頭 神田上水 井ノ頭辨財天 玉川上水 青渭神社 深大寺

深大寺城址 虎柏神社 布多天神社

中央線吉祥寺驛の西南約五百米、驛を出て西し、踏切を越して南すること百數十米で井ノ頭に至る。

井ノ頭 北多摩郡 武藏野町 吉祥寺・三鷹村 牟禮

大正六年の四月から東京市の公園となり、もと御料地であつたが、大正二年東京市へ御下賜になつたので恩賜公園といふ。公園の廣さ二十七萬一千平方米、池の周圍と其の西の丘とからなり、丘は御殿山といつて方四百米許、楡・松・檜などの林になつて居て萩も多い。御殿山といふのは、江戸時代の初に、徳川將軍が鷹狩などの時に使ふ殿舎があつた爲である。その廢せられて後は、江戸の用水たる神田上水の水源として可なり重要な場所であつたので御林になつて居た。池は西北から東南へ細長いY字形をしてゐて、廣さ四萬六千平方米餘、坪洪積層臺地の一凹地に地下水の湧出したもので、水は數ヶ所から湧き出して居るため、非常に綺麗である。

池の名については種々な傳へがあり、親ノ井〔牟禮村書上〕七井ノ池(七ヶ所から水が湧き出すといふので)

〔御府内上水在絶略記・武藏演路・江戸名所圖會〕神箭ノ水〔新編武藏風土記稿〕などと云はれたといふ。又狛

井ノ頭と深大寺

江郷の名の起つた狛江であらうとも考へられた「武藏名勝圖會」井ノ頭池といはれるのは、神田上水の水源であるからで、徳川將軍の命名したものと云はれてゐる。名付けた將軍は秀忠〔上水記等〕とも家光〔牟禮村書上・新編武藏風土記稿等〕ともいひ、自らこれを池畔の辛夷樹に小柄で刻したと傳へ、その樹皮を大盛寺で藏してゐた。

神田上水

神田上水とはこの池の水を引いた江戸の上水である。天正十八年(1590)徳川家康が關東へ入國すると直ぐ、大久保藤五郎忠行をして調査經營せしめたものと云はれ、後屢々改修を施し、引續いて江戸の用水であつた。

上水は幅上流に於て四米乃至八米、下流に於て十五米乃至二十米、長さは小石川まで二十二軒、高井戸、和田堀内・中野・淀橋・戸塚等を経、善福寺池・妙正寺池等から出る流をも併せて、小石川關口町大洗堰に至る。こゝで二つに分れ、右は江戸川となり、左は上水として關口臺町・關口駒井町・櫻木町・小日向水道町・水道端町を経て水戸藩邸に入った。初め小石川上水とも云つた。江戸時代には水戸家の屋敷から水道橋の東に出て、萬治年間神田川増鑿の時にかけた萬年樋といふ木樋を通じて神田猿樂町に入り、更にこゝから幾つにも分れて、今の神田(内神田)日本橋兩區に普及して居た。神田上水といふ名もこれに基いてゐる。最初上水の設計と工事に當つた大久保忠行は、その功によつて、大正十三年二月十一日從五位を贈られた。井ノ頭略縁起や武藏演路

に寛永六己巳年家光が來、この時から神田御上水となつたといひ、砂川源右衛門記録に寛永年中水門が出来たとあるのも、江戸の發達完備につれて自然の流に次第に手を加へられたことを示してゐる。猶池の邊から石器や土器を發見することがある。

因に吉祥寺といふこの邊の地名は、こゝにさる名の寺があるのでなく、東京駒込の吉祥寺と間接に關係があるのである。新編武藏風土記稿に「當村の開發は萬治二年(1660)の事にして、其頃までは此邊をたゞ札野と稱せし由、開發の時、村民十郎左衛門といふが、江戸駒込吉祥寺に住せし浪人佐藤定右衛門・宮崎甚右衛門と相議し、此地へ來りて田畑を起し、皆此所の農民となり、村落をなせしより、元祿の頃は吉祥寺と呼びしを、今(文化頃)は吉祥寺村と云へり。」とある。即ち當時江戸の郊外としてこの邊が次第に開發せられて行つたことがわかる。

池の西北端の島に辨財天の堂がある。

井ノ頭辨財天 三鷹村 牟禮

大正十二年(1924)四月二十三日に燒失する以前、その堂宇は拜殿三間二面、本殿方一間で、即ち造りは神社建築であつた。兩部神道の盛であつた江戸時代には、辨財天社とか辨財天宮とか云つて、神社の扱ひで、それに別當寺が附いてゐた。今の辨天堂前の丘上にある大盛寺(明靜山圓光院、天台宗深大寺末)が即ちそれである。昭和二年一寸風變りの堂が再建された。

縁起によれば辨天は、延暦七年傳教大師が勅を奉じて彫刻した靈像を、天慶年間に源經基が當國在住の砌、此地に安置して祠を創建したもので、建久八年(1197)源頼朝が安達盛長に命じて堂宇を再建し、又新田義貞が鎌倉を攻めた時、戦勝を祈つたといふ。江戸上水が比較的完備普及した寛永十三年祠を建立したと傳へるが、池靈なりと江戸名所圖會にある様に、上水々源の水の神、即ち水の持主にして保護者であり、且その水を人に與へてくれる神として、社殿なども、水道工事の完備するとともに建て替られたものであらう。しかし、一般辨財天の信仰の變遷——(河の神格化、水に縁ある神、音楽辯才等の神、財寶の神となりその名も辨財天と變つた)——と同じく、後世には、單なる福德の神として信仰せらるゝ様になつたと思はれる。辨天の表門(黒門)の所にある「神田御上水源井頭辨財天」とある標石の臺石に、「江戸講中、神田湯屋組合中、延享二乙丑年十二月吉祥日、天明四甲辰年正月大吉日改建立」などとあるのはよくこの間の消息を語つて居る。又大盛寺前(辨天前の石段上)にある字賀神(人首蛇體で蓮葉に乗つて居る)の石像の臺石に「明靜山圓光院大盛寺住大阿闍梨堅者法印春芳堂本高代、井之頭辨天石鳥居講中、江戸麴町七丁目願主發起人金井傳右衛門、明和四丁亥歲九月吉辰」などとあるのも、或は又その附近の文化七年の石燈籠に「兩國講中」とあり、高麗犬の臺石に「明和八辛卯別當大盛寺本高代」とあるのなども、江戸時代に於けるこの辨天の性質や江戸との關係を示すものとして面白い。

寛永八年の夏、水が潤れたが、天海僧正の加持によつて再び湧き出したので、その後は毎年三月十五日から一ヶ月間水加持をやつた(江戸名所圖會・上水記所引内田茂十郎書上)さうである。辨天に關した諸傳説が何れも、天台宗や源氏關係の、ことの多いのも、天台宗の寺を別當とした關東にある祠として自然的な色彩を持つて居る。

井ノ頭池を一周すれば、その南端の水泳場の下流に神田上水の出口が見られる。

神田上水は今も東京の水道には用ひられてゐないが、しかし池の水は大正十四年の冬から毎年多摩川の水の少い季節には、ポンプで吸上げて、玉川上水へ流し込み、東京の水道を補つてゐる。

江戸時代にはこの逆に、玉川上水の水を、井ノ頭池へ落し込んで、神田上水の水を補つたことがあつたらしい。今でも辨天堂前の家光が井ノ頭とほつたといふ碑のある辛夷樹の後方から、松本訓導の碑の前を経て、玉川上水まで、堀割の跡が残つて居る。これを見ながら、御殿山の林をぬけて、西すれば公園の西南外を流れる玉川上水へ達する。

玉川上水

西多摩郡西多摩村大字羽村字玉川附で多摩川の東北岸に設けた閘門からその水を分流したもの。幅上流は八米乃至十米、下流は四米乃至六米で、西多摩・福生・熊川・砂川の諸村を經、小平村で野火止用水を分ち、小金井・武藏野・三鷹・高井戸・松澤・和田堀内・代々幡等を経て新宿に至る。長さ四萬二千七百三十六米餘(東京府測量)、今東京市の水道に用ひられ、淀橋の淨水池に入る。昔は新宿から、東は四谷・麴町を経て江戸城に入り、又西丸下から丸ノ内附近に、東南は永樂町・八重洲町・有樂町・數寄屋

橋外・茅場町まで、西南は赤坂・西久保愛宕下・金杉を経て海邊に及び、更に一分流は青山通りから六本木を経て永坂の方へも引かれてゐた。

この上水は、承應二年（1653）正月十三日、幕府が多摩川の水を疏導して、江戸の飲料に供するの議を容れ、その費用七千五百兩（承寛襍録・三家記等）（玉川庄右衛門清右衛門書上には六千兩）を支出して完成したものである。幕府は神尾備前守をして、適任者を選ばせたので、芝口の町人（玉川邊の百姓とも傳へる、即ち當時芝に住んで居たのであらう）庄右衛門・清右衛門の二人が選ばれてこれを請負ふことになつた。この奉行は代々關東の郡代をつとめた伊奈氏（半左衛門忠克）が仰付かつた（公儀日記等）。途中で官給の金がつき、兩請負人は私費千兩（玉川庄衛門清右衛門書上には三千兩）を投じて、翌三年六月これを完成した。その年の十一月に新宿の大木戸まで達し、幕府は二人の功を賞して、各二百石を給し、姓を玉川と賜つて佩刀を許し、玉川上水役とした。この兩人は功により明治四十四年に従五位を贈られた。上水はその後屢々改修して今日に及び、今

東京市の水道に用ひられる様になつたのである。
小金井の櫻は、井ノ頭から四軒餘上手の小金井附近の玉川上水の堤に植ゑられたものをいふ。堤上の櫻は、こゝから續いてゐる。木はやゝ小金井附近の方が古いが、大體この邊と似た景である。最初は何時植ゑたか確には知られて居ないが、享保年間に、川崎定右衛門定孝が幕府の命によつて、吉野や常陸櫻川から多數移植したので、花の名所となつた。川崎定孝（元祿七一明和四）は初め多摩村の名主であつたが、植林や武藏野新田の開墾に功があり、後玉川普請奉行等を経て、御勘定吟味役諸國銀山奉行にまで擧げられた人である。當時幕府が

殖産興業に盡力し、道材を登用した様が窺はれる。

井ノ頭から深大寺までは南へ約四軒、御殿山から公園の正門を入つた眞直な道が玉川上水を渡る所に萬助橋がある。その橋によつて南へ出れば、玉川上水を渡つて、三鷹村新川^{シヅカ}までは一千八百米直線の道である。新川までは吉祥寺驛から調布行乗合自動車を利用することが出来る。

新川の大通から先は少し道がわかりにくい。二萬五千分の一圖によれば大體わかる。神代村に入れば、深大寺は、武藏野にはあまり無い程の老松の林が聳えて居るからすぐわかる。林をめざして大字深大寺宇野ヶ谷から、西南へ眞直に六百米程行くと青渭神社の前に出る。

青渭神社

郷社 神代村 深大寺 池ノ谷

祭神 不詳（南多摩郡稻城村の青渭神社は青渭命とす）

國郡類纂には青沼押比賣命とあり國內神名帳には大己貴命とある由。延喜式内社の青渭神社であらうと云はれる。新編武藏風土記稿は、青波天神祠と云ひ、鎮座の年代不明、往古社地に池があつて、青波が立つて社前に至つたから、青波天神と云つたと傳へるが、式内の青渭神社は澤井村のもので、當社ではあるまいと云つてゐる。社前にある槻の大本（目通周圍約六米）は、昔から有名で、この邊から石器が非常に澤山かたまつて出た。

社から南すること百米ばかりで、小學校の南角へ出る。前は谷で、右へ下る坂がある。谷を隔てた前の丘が

深大寺の城址、城の各部の大きさ、丘の高さ等を概観するには最もよい所である。夏は木が茂つてゐて見難いが、冬ならば特によくわかる。

右へ坂を降りた突當りが、深大寺境内の不動堂で、この前を更に少し進めば深大寺の表門に達する。

深大寺

浮岳山昌樂院 天台宗 神代村 深大寺宿

本尊 寶冠阿彌陀如來（傳惠心僧都作）

丘を負うて、中央が本堂、東が庫裡、西の一段高い所が元三大師堂、鐘樓は門内のすぐ右手にある。

鐘は永和二年山城守宗光作。

寺傳によれば、天平五年（733）の草創で開山は滿功上人、當時は法相宗であつたと云ふ。日本年代配合抄と云ふ書に「天平勝寶二年庚寅深大寺建立」とある由。淳仁天皇の御代に勅願所と定められ、貞觀年中惠亮が天台宗に改めた。改宗したのは國司藏宗の叛逆の聞えがあつた時、叡山の惠亮が勅をうけて國分寺に來り調伏の祕法を行ひ、その功によつて當寺を賜はつたのによつてといふ。〔緣起〕元三大師は天曆七年（853）（一説、應和四年（862））大師自刻の像で、正曆二年（891）比叡山解脫谷から惠心僧都が移したものと傳へる。室町の末期に世田ヶ谷の吉良氏によつて、堂宇など再建せられ、寺領若干をも寄附された。江戸時代に入つて正保三年悉く焼失したが、その後も引つゞいて相當な寺（朱印五十石）であつた。

寺寶には左の如きものがある。

金銅釋迦如來倚像（國寶） 深沙大王像（傳滿功上人作） 不動明王畫像（傳智證大師筆） 般若十六善神畫像（傳

惠心僧都筆） 吉良氏寄附刀劍（波平行安作） 當山緣起寫二卷（參議右中將公尹筆） 融通念佛記錄繪卷（堀井宮

堯胤法親王等御筆）

「深大寺假名緣起」（享保七年）と云ふものがある。深沙大王・虎柏明神・福滿童子・吉祥天・滿功上人等を織りなした緣起で、江戸名所圖會など見ると此等の小祠が、境内に畫いてある。今も大體その址がわかる。寺の西方の森の中に、明治四十年に建てた「舊鎮守深沙大王碑」が、もとの深沙大王堂址にある。この邊は大木が繁茂し清泉が湧出して、如何にも大王の鎮座に適はしいやうな所である。地形から考へても山號や青渭神社や城などから考へても、寺の前には大きな池があつたらしい。大字深大寺の小字に、繪堂・御塔坂・仁王塚・堂山・殿分トノブンなど云ふのがある。皆この寺に關係があると云ふ人もあるが如何であらうか。近年まで堂山・殿分邊から、布目瓦の破片が出たと云ふ。

深大寺城址は、深大寺の前の丘の東端にあるから、寺の表門前から農家の間を左の方に登つてもよし、又深沙大王の碑の前から前の丘へ登り、畑の間を左へ行つてもよい。

深大寺城址

神代村 深大寺 宿 城山

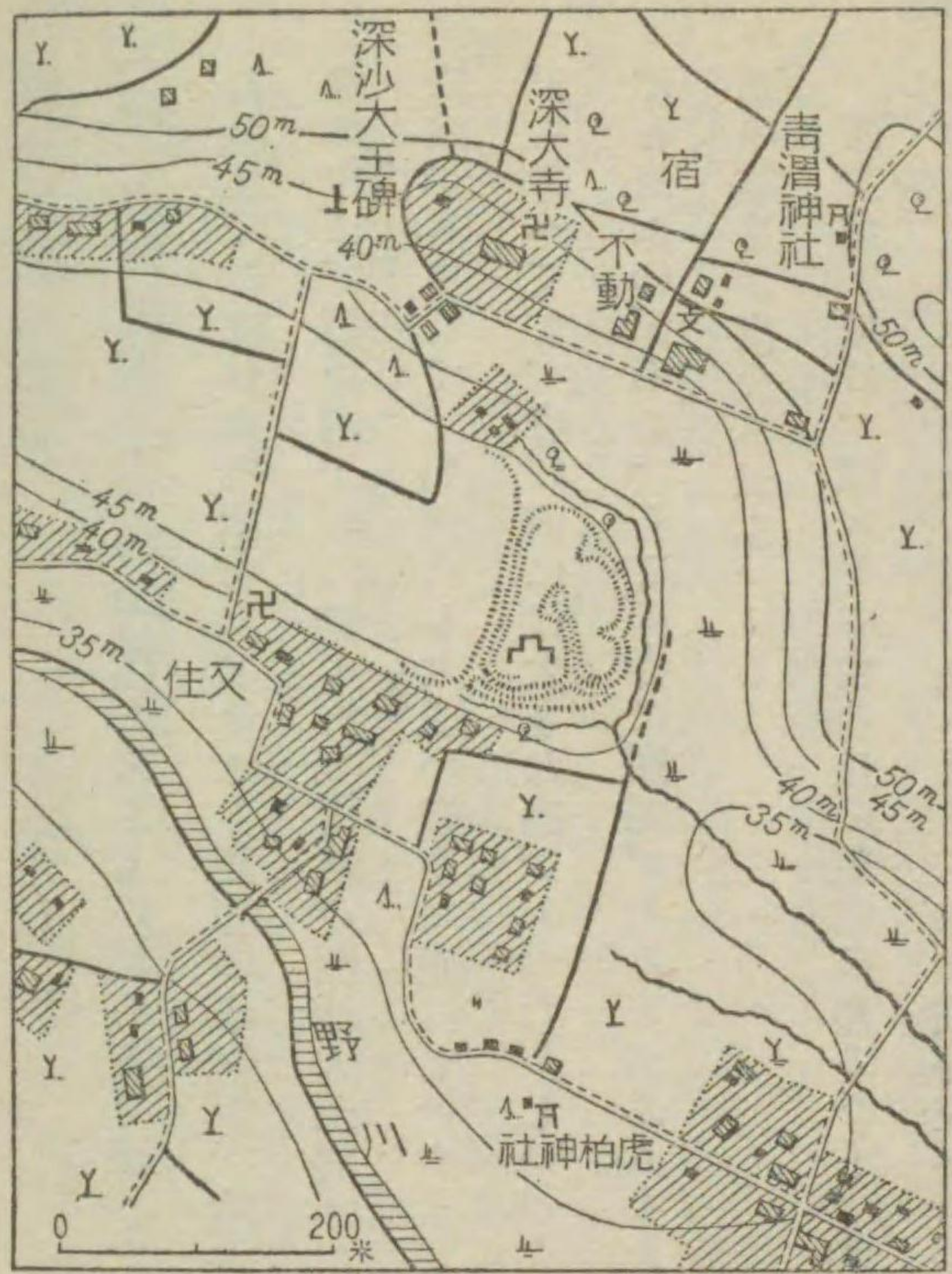
城址は東南へ突出した細長い臺地の先端にあり、三方は崖で、西北の方だけが臺地に連つてゐる。其處

を堀で二重に絶ち切つたものである。内外二郭から成り、内郭は東西約五十米、南北九十米、外郭は東西五十一米、南北百四十米、堀は何れも空堀で幅約九米、深さ五米、土居の高さ今平均二米五、東北の崖下には幅二米程の小川が流れて居るが、この邊の田は當時沼の様になつてゐたであらう。

天文の初頃扇谷上杉氏の屬城であつたが間もなく廢された。

天文六年上杉朝定の修造と云はれるのは北條五代記等に「武州深大寺と云へる古城を再興し、北條氏綱に向ひ弓矢の企專なり。」とあるによるのであるが、それ以前の様子は明かでない。この地は清和天皇の御代に武藏國司職宗が住んだ居館の跡であるといふ深大寺縁起等の説は信するに足らぬ。

大永四年北條氏綱は、上杉朝興を追つて江戸城を取り、次第に北進し、扇谷上杉の壓迫を企て、上野の山内上杉氏に通じ、古河公方と結んで時機を窺つた。上杉朝興は天文六年四月に死し、子朝定が家を嗣いだ。こゝに於いて北條氏の北進勢力に對抗して、南武藏を保つため、當城を築いてこれに據つたのである。この時北條氏の目標は河越であつた。然るにその位置が、江



深大寺城址附近の圖

戸から河越に至る道筋からも十五軒、北條氏の本據相模小田原方面から河越への道筋からも八軒程離れて居たので、兩方へ都合良ささうで、實は何れにも都合悪く、その效力を發揮することが出来なかつたのである。天文六年(1537)七月氏綱は江戸を發して河越に進軍した。朝定は當城を發して、その本據河越城援助のため北進し、西北に向つて進行中の北條勢と河越の西南約二里、入間川の右岸三ツ木原で遭遇した。これが七月十五日の戦で、上杉氏には、その存亡にかかはる重要な戦であつたが、朝定は敗れて難波田忠行の松山城に走り、河越は遂に北條氏の占領する所となつた。

城址の南端から南へ降りて、眞直に南へ三百米行けば虎柏神社である。

虎柏神社

郷社 神代村 佐須 上佐須

祭神 大歳御祖神

延喜式に見える武藏國多摩郡八座の一で、崇峻天皇二年(589)八月始めて祀ると傳へる。祭神については虎の字に附會して、膳臣巴提使・福満童子の母虎〔深大寺假名縁起〕等の雜説がある。

西多摩郡小曾木村にも虎柏神社といふ社があつて、大年御祖神を祀り、式内社だと云つて居るが、當社の方が有力である。

社の東方四百米餘の所に、虎柏山日光院祇園寺(天台宗深大寺末)がある。開山は深大寺と同じく滿功上人で天平寶字二年(750)の創立と傳へる。昔は虎柏神社の別當であつた。それから東へ行つて星林山柴崎院光照寺

井ノ頭と深大寺

(浄土宗)を経て、京王電車柴崎停留所へ出てよい。光照寺には貞治・延文・康永・正元等の板碑がある。或は西へ行つて、布多天神社へ出て、京王電車布田停留場へ向つてもよからう。

布多天神社 郷社 調布町 上布田

祭神 少彦名命 菅原道真

延喜式内社で、もと多摩川沿岸にあつたが、洪水のため危険であつたので、文明年中こゝに移したといふ。天神社といふところから後世菅原道真を配祀した。

舊別當は廣福山榮法寺(新義真言宗豊山派)であつた。大正四年に三榮山不動院・紫雲山寶性寺の二寺と合併して、三榮山大正寺と稱した。

因に江戸時代には、上石原・下石原・上布田・下布田・國領を五宿といつて、毎月六日づつ交代で甲州街道の馬次をとりとめた。

〔費用 約六十錢〕 (鳥羽)

参考

井ノ頭及水道に關しては、東京市史稿水道篇。

六 國分寺と府中

國分寺

大國魂神社

坪宮

宮乃賣神社

國府八幡宮

東照宮

天神山

國府址

善明寺

高安寺

分陪河原古戰場

中央線國分寺驛に下車し二百米程東へ行つて中央線陸橋の下を過り、府中に通ずる道を南すること約六百米ゆるい坂道を下ると、小川があつて石橋が二つ架つて居る。西の橋の前には、大きな松があつて其の下に天保三年の石橋供養塔が建つて居る。國分寺へ行くにはこの西の橋を渡つて行くと近い。或は又東側の橋を渡つて更に本道を三百米程先へ行き、「國分寺」の標示のある所を右へ曲つてもよい。府中から行くときは後者によるべきである。前記の石橋を渡つて西南へ約二百米も行けば、路傍に、國分寺の舊材たる布目瓦の破片が落ちて居るのが目につく。

國分寺

醫王山最勝院 新義真言宗豊山派 北多摩郡 國分寺村 國分寺

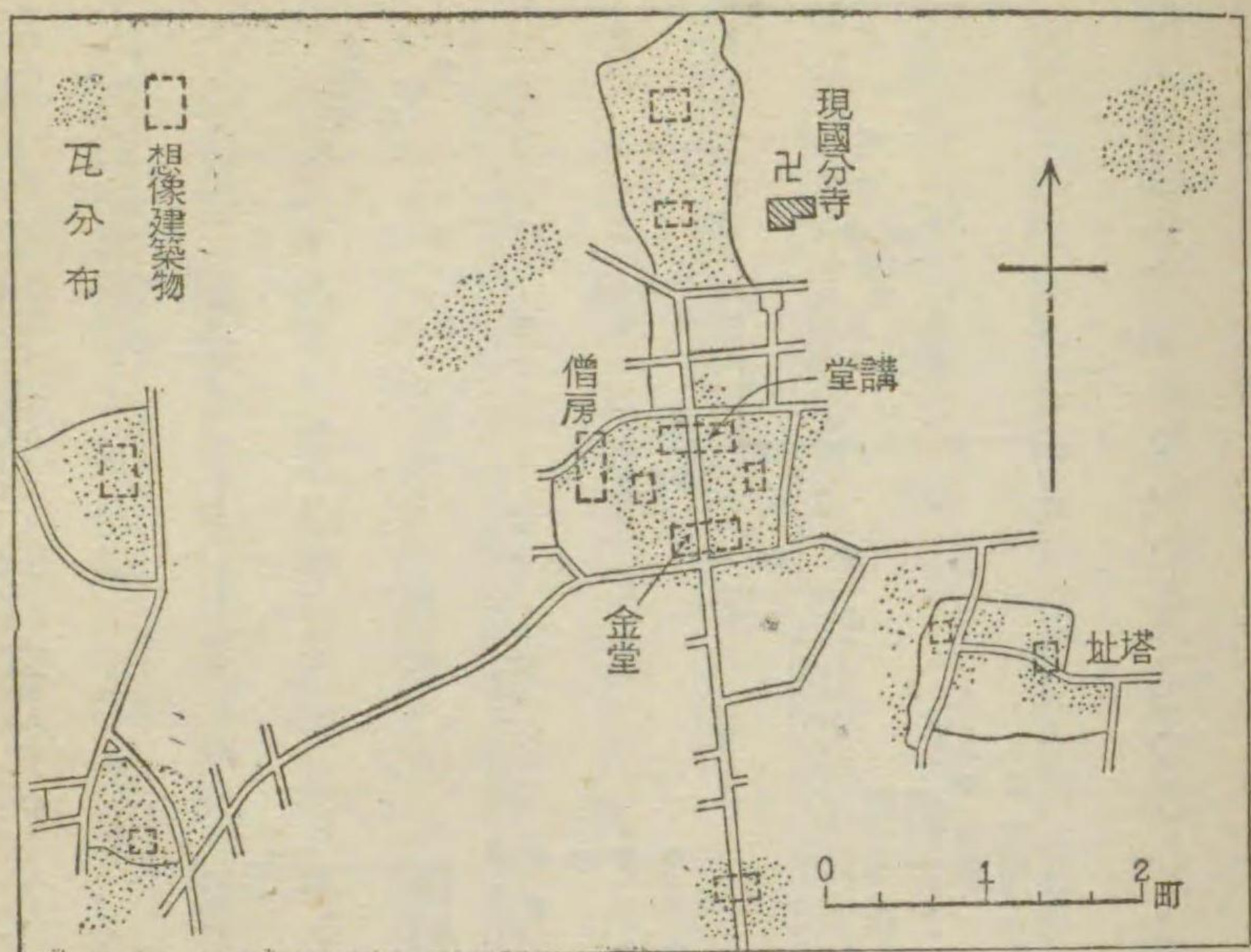
寺は字國分寺の聚落の西端れ、古木のこんもりとした臺地の南端にある。丘上には藥師堂・仁王門、その東南の丘下には、樓門・本坊・庫裡等がある。樓門(明治廿四年建)を入ると、正面に本坊があるこゝに古瓦や磚の完全なものや文字のあるもの、この附近で出土した石棒・石斧等の石器類や板碑(正中三年の彌陀三尊佛來迎の圖像のあるなど著しい)など數十點藏してゐる。仁王門は本坊の西方、

岡の中腹にあり、仁王は傳運慶作、丈二米餘、門は建武二年の造立といふ。礎石には古い石材が用ひてある。

更に石段を上ると正面が薬師堂、約十二米四方で寶曆五年の建造である。これも礎石は舊材を用ひ、正面には金光明四天王護國之寺の額がかゝつてゐる。本尊は薬師瑠璃光如來で、傳行基作、丈一米八八の坐像で國寶、十二神將も行基作と傳へるが、脇士の日月光兩菩薩とともに應永七年僧祖明の勸進修造とみた方がよい様である。堂前に寶曆六年に建てた攝津服雄撰文の國分寺の碑がある。

薬師堂の東北西の三方に大きな石が、コの字形にぐるつと一列にならんでゐて、上には八十八ヶ所の石像がのつてゐる。大體一列に列んで居るので、一見舊伽藍の礎石であるかの如く思はれるが、仔細に觀れば石の列は不正確でその高低大きさが區々で礎石としては不適當なものが多いから礎石そのままでない事は明かである。しかしこれ等は丘上の伽藍の遺材であらう。寺傳では、此等の列石は寶曆年間(1751)に薬師堂再建の時、信者が八十八ヶ所をつくるため一部は丘下からも運び上げて列べたものといふことである。

この薬師堂の東南に八幡社がある。諸國の例にある國分寺八幡宮で、舊神體は今寺に藏するといふ。舊伽藍の主要部分の址が明瞭に残つてゐるのは、薬師堂の前を眞直に下つた突當りの畑である。(四九頁五〇頁兩圖参照、四九頁の圖は同遺跡所掲の圖による)。



國分寺境内の圖

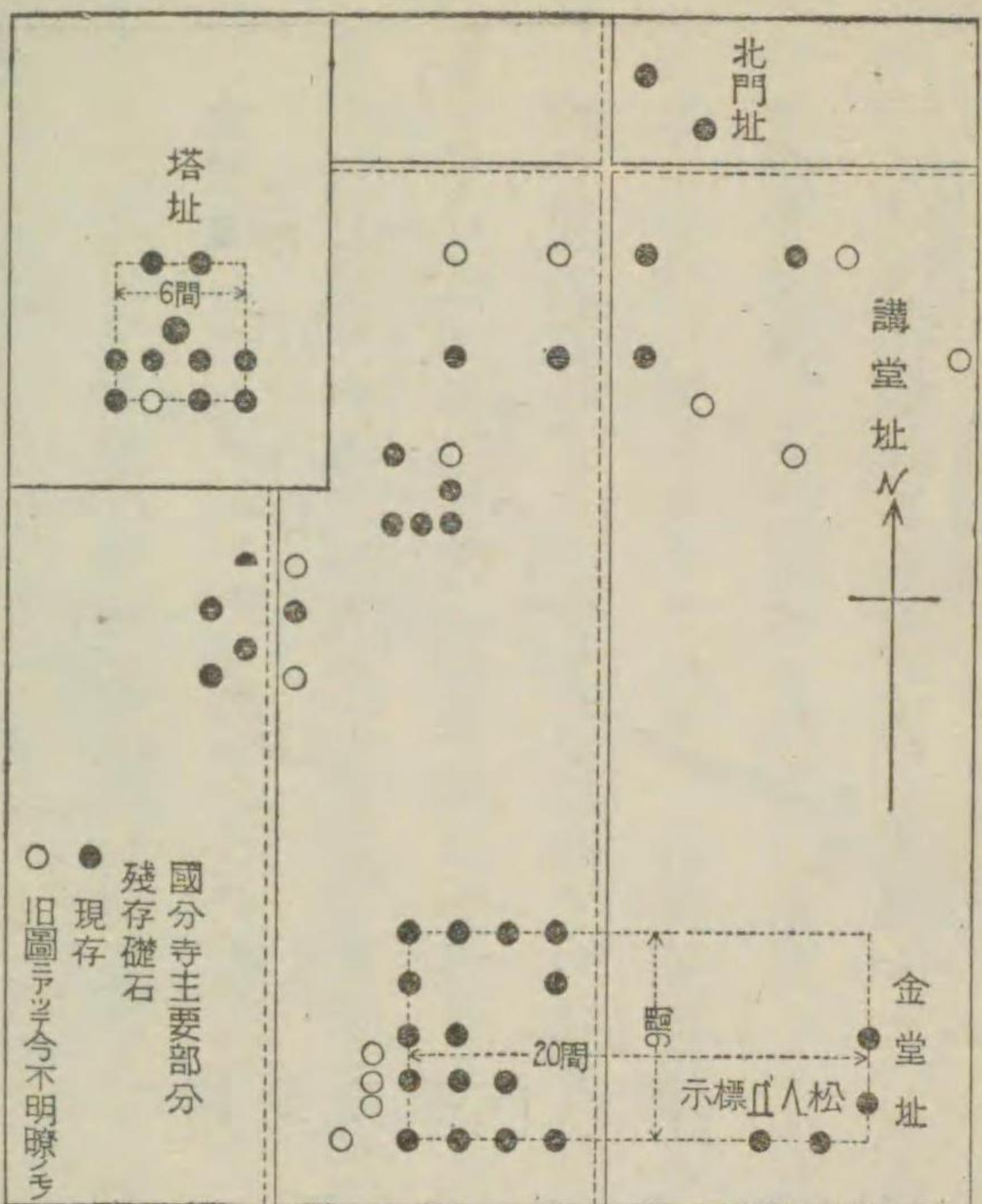
礎石は圖に示す如く、北方に一群、その南に一群、この二群の中間の西方に一群ある。北の方はその數も少く比較的明瞭でないが、南の方は整然と五列残つてゐる。中央の道が昔の正面の通に相違ないから七間四面である。これを奈良朝時代の寺院のプランに考へ併せれば、これは金堂で、その北のは講堂である。この中間西方一群は僧房で、講堂の北方道をへだてた桑畑中の二個は北門、金堂の南方にあるものは南門であらうと云はれる。しかし、此等は推定が困難である。この他に、金堂址の東南方百八十米餘の所に一群ある。畑の間の木の茂つた小高い所がこれで、今一部墓地になつてゐる。礎石は東西に一列に三つ四つあるが草木が茂つてゐて見難い。これは鼓樓であらうと云ふ説もあるが、直ちに賛成は出来ぬ。この東方十八米の所に又一群十個の礎がある。これは塔址で、眞中に

心柱の礎石がある。これは大きき縦二百五十一纏、横百五十一纏、中央に徑七十九纏の心柱の穴が

ある。續日本後紀承和十二年(815)三月己巳の條に、「武藏國言國分寺七層塔一基以去承和二年爲神火所燒于今未構立也前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正之(云)奉爲聖朝欲造彼塔望請言上殊蒙處分

者依請許之」とあるものであらう。沼田頼輔氏は、こゝで男の字の極印ある瓦を多く發見せられたので、その後この塔の事は國史には見えな
いが、確かに建立されたものであらうと云つて
ゐられる。

猶又八幡神社の西方、下河原行貨物線路のすぐ西の丘上に礎石群が發見された。瓦片も澤山散布して居る。最近まで雑木林になつてゐたのであまり注意を惹かなかつた。これを一部の人々は國分寺の西院址と呼んでゐるが、柴田常惠氏



圖石礎寺分國

は尼寺址ではあるまいかと云つて居られる。瓦の破片は此等の礎石のある邊到る處に散布してゐる。何れも所謂布目瓦で、質は非常に硬い。寺に完全なものを數枚藏してゐる。大きさはいろいろあるが、

一例を舉げると、平瓦は縦四十糎九、横三十九糎四、厚さ二十四糎二乃至三、重量九匁三七五、蓮華

の紋様ある瓦當は徑約二十一糎ある。瓦には郡名・郷名・氏名等のあるものがある。郡名のある國分寺瓦は武藏の他下野その他にも若干あるが多くの國々にはないものである。この郡名は豊島以下十七郡にわたつてゐる。その他、荒墓郷・大井・白方等の地名も見え、又、國忍・豊字遲部里栖・戸主字遲部等の文字のあるものもある。此等の瓦は、必ずしも各地方で焼いたものではないらしく、埼玉縣比企郡龜井村大字泉井字新沼から、竈址とともに、豊島・秩父・幡羅等七八郡の名あるものを一所に發見したといふ。又東京府下では南多摩郡稻城村大丸字瓦谷戸と同郡塚村相原字陽田にも國分寺瓦の窯址がある。講堂址などから磚が出る。これは下に敷いたものらしく、煉瓦の様な色で、大きさは一例を舉げると、長二十七糎二、幅十六糎〇六、厚さ六糎である。

國分寺は聖武天皇が天平十三年(741)三月乙巳(二十四日)詔して(これにつき萩野由之氏の論文が史學雜誌三三ノ六にある)、天下の諸國をして、國毎に僧寺・尼寺を造らしめ、僧寺は之を金光明四天王護國之寺、尼寺は法華滅罪之寺と稱せしめられたものである。この時、又金光明最勝王經・妙法蓮華經各十部を寫さしめ、僧寺には七重の塔一區を造り、天皇も亦別に金字の金光明最勝王經を寫され塔毎に一部を安置せしめられた。その趣旨は詔の最先に見ゆる如く、國泰人樂、災除福至にある。その據り所は、金光明最勝王經に、若しこの經を誦し、これを敬ひ、これを流通せしむる國があるならば、四天王は常に來つて擁護し、一切の災障皆消滅し、憂愁疾疫を除いて、人々を常に歡びに満たしめるであらうとあるのによるのである。この信仰はこの頃盛であ

つた。天平から約四十年も前に四天王寺の建てられたのも、この信仰によるものである。かくして、佛教は渡來以來約二百年にして、完全に國家的佛教となり、外來の文化を齎して全國に流布せらるゝに至つたのである。この國毎の僧寺・尼寺には、水田各々十町（僧寺には更に封五十戸）を施され、僧寺には二十僧、尼寺には十尼を置き、毎月八日には必ず最勝王經を轉讀し、月半に至る毎に戒羯磨を誦する規定で、この寺のある國では毎月六齋日には、漁獵殺生を禁ぜられてゐた（續日本紀）。平安朝時代に入つてからも、武藏國分寺は引つゞいて相當に盛大であつたことは、延喜式に「武藏國正稅公廩各四十萬束、國分寺料五萬束」などとあるのによつても想像出来る。鎌倉時代になつてからも、吾妻鏡などにも、屢々現れて來るから國分寺の特に重要視せられたことがわかる。武藏國分寺の衰へたのは、鎌倉幕府滅亡の際に、新田義貞が鎌倉を攻めた時、府中や國分寺の附近が戰場になつて、その兵燹にかゝつたためと傳へる。今藥師堂にある十二神將や日光佛・月光佛等が應永年間の修造といふことであるから、室町時代にも、古の盛時には比すべくもないが可なりの寺であつたと思はれる。江戸時代には慶安元年（1648）國分寺藥師堂料として九石八斗九升の朱印領を附せられ、寶曆年間（1761）に至り、權大僧都法印賢盛の盡力によつて今日の様になつた。

因に武藏の國分尼寺の遺跡は不明である。府中町京所キヤウズから布目瓦の破片を發掘したことがあるので、京所の京は經であつて、尼寺はこの邊であらうとかいふ説もあるが、さして有力な説ではない。

藥師堂から、講堂址・金堂址を貫いた小道は、古の國分寺の正面の道で、これによれば府中の大國魂神社の御旅所の前へ出る。御旅所は甲州街道から鎌倉への街道の曲り角である。従つてこの小道は鎌倉の方即ち上方

から國分寺への正道である。今は畑中の小道になつてゐるから、散策などには、國分寺驛から府中に通ずる大通りよりも餘程面白味がある。けれども大國魂神社への正道はこの大通りであるから、これによる方がよい。國分寺からこの大通りへ出るには、樓門前の道を東へ行つてもよければ、金堂址から前述の正面の小道を三百米ばかり南へ行つて左へ曲つてもよい。この道は、こゝで曲らないと先へ行くと左へ曲る道がない。地圖を開けば直ぐ氣づく様に、この邊は東西に通ずる道が少く、皆府中に向つて扇の骨の様に集つて居る。これによつても府中が古くからこの邊の中心であつたことが知られる。

府中まで道は殆ど眞直で單調である。約千七百米にして大國魂神社の馬場大門の並木に達する。長さは五百二十三尺餘、鎮守府將軍頼義が前九年の役に發向の途上、この社に參詣して賊徒の調伏を祈り、凱旋の時、報賽として櫛の苗木千本を奉納したといふ。この先例にならつて、徳川家康もその寄附した馬場に櫛を植ゑたのが即ちこれである。南端の龍卷の櫛といふ大木は、康平（1105）の昔のものといはれて居る並木は内務大臣指定「天然紀念物」である。

大國魂神社

官幣小社 府中町

舊稱 武藏總社六所宮

祭神 武藏大國魂神

四萬四千二百二十平方メートルの境内は古木がよく繁り、近郊まれにみる立派な境域である。甲州街道に面

した大鳥居を入れれば先づ左側に宮乃賣神社がある。次で神門(隨身門跡)あり、その中の左側に鼓樓、右側に御神輿庫がある。中門を入れれば拜殿(間口十八米一八奥行十五米五四)があり、その後が砂庭をへだて、正殿で、これは三殿一棟の相殿造りである。もと三棟であつたのを、寛文七年將軍家綱造營のときかく改めたものといふ。社殿は北向である。維新前には、拜殿の東方に、護摩堂・阿彌陀堂・本地堂等があつた。拜殿の西には東照宮その他の末社がある。

當社の創建は、景行天皇四十一年五月五日武藏大國魂神の託宣によつてこの地に祀つた「縁起・武藏總社誌」といひ、或は成務天皇の時、天穗日命の裔兄多毛比命を武藏國造に定められたが、この國造が大己貴命を崇信して、事の由を朝廷に奏し、始めて宮社を造營し、その祖素戔嗚尊を配せ祀り、この二柱を國靈大神と崇めて「新撰總社傳記」代々の國造がこれに奉仕して居たともいふ。大化改新の後國府が此處に設置せられてから、國衙の齋場に充てられ、又國司巡拜等の便宜上武藏國內の諸神、殊に、顯著な六社の神を配祀したので、武藏總社六所宮と稱せられる様になつたといふ。創建の二説は兎に角、當國屈指の古社である。「主として縁起による」

當社は又、武藏風土記・延喜式にある大麻止乃豆(智)天神社であるとも、これと小野神社との合祀社とも云はれる。「江戸名所圖會」が、このことは、縁起等にも何等云つて居らず、今は社ではこれは認めて居らぬ。

東國交通の要路にあたり、一國の中心たる國府に鎮座する爲、この社に關した種々の出來事も多かつたに相違ない。前九年の役には鎮守府將軍賴義・義家父子出征の途次參籠して戦勝を祈つたと云ひ、源賴朝は治承四年(1180)房總より再起して武藏に入つた時、當社社頭に近國の軍兵を集めた所、二十八萬餘騎を得たので神恩を謝して神馬を捧げたと傳へられる「源平盛衰記等」。それ以來幕府との關係も淺からず、文治二年・貞永元年・寛喜四年等に社殿を修造せられて、代々の將軍厚くこれを尊崇した「吾妻鏡等」。元弘の兵亂に、分陪河原を始めとしてこの附近が戰場となつたため、社殿は兵燹にかゝり、一時荒廢したが、室町時代になつてからも、鎌倉公方足利氏、又その衰へて後は、小田原北條氏等この地方に最も權勢ある家々の崇敬をうけ、北條氏の頃は四十八貫文の神領があつたといふ。社傳によれば天正十八年(1500)の役にも兵燹にかゝつたといふ。同年徳川氏が關東を領して、家康江戸に入城するや、その國の總社であるといふので崇敬他社に異り、慶長十一年(1605)には社殿を改築した。關原・大阪兩役の後、神恩に報いるため、源賴義の古例にならつて馬場を奉納し、ここに櫓を植ゑた。(これは府中からよい軍馬を多く出したのによるといふ)

江戸時代の狀況は六所大明神記録(天明(1781)以前)新編武藏風土記稿等によつて知られる。

本社(長九間横六間)、幣殿(長三間横三間)、拜殿(長七間横三間)、御神輿藏(長五間横三間)、御神供所(長五間横二間半)、隨身門(長三間半横二間半)、本地堂(長二間横三間)、護摩堂(長二間半横二間半)、東照宮(長二間半横二間)、宮ノ女(長二間横三間)、同拜殿(長二間横三間)、御朱印高五百石、此反別百十町、内二百石ハ惣役人四十三人配分、三百石ハ神主持、社地三町八段二畝十歩、西馬場(長二百六十八間横四間五尺)、東

馬場(二百八十間横六間、末社天神社地(反別二段步)、石塚社地(反別四段五畝二十五步)、八幡社地(反別三段三畝十步)。

神主 猿渡豊後 禰宜 織田大學 長官 鹿島田兵庫 外三人 社僧 想行寺外五ヶ寺 配官役 泉藏寺

明治元年十一月勅祭神社に准ぜられ、後縣社となり、同十八年官幣小社に列せられた。縁起等によれば、總社とならぬ前には、祭神の御名によつて大國魂神社となへたといふが、今大國魂神社と稱せられてゐるのは明治維新後のことである。

祭神について更に詳説すれば、武藏大國魂神及配祀の神々とその神座は現今次の如くである。

西殿 六ノ宮 杉山大神
五ノ宮 金佐奈大神
四ノ宮 秩父大神

中殿 御靈大神
大國魂大神
國內諸神

東殿 一ノ宮 小野大神
二ノ宮 小河大神
三ノ宮 氷川大神

御靈大神は舊記に諸説があつて、素戔嗚尊とも伊弉册尊ともまた大國魂大神の妃神とも云はれる。東西兩殿の六神の配祀年代は詳かでない。或は創建當時とも國造時代ともいふが、總社としての後ならば平安朝時代である。

現今の六宮の本社は、

一ノ宮 小野神社 郷社 南多摩郡多摩村一ノ宮 延喜式内社

祭神 天下春命(秩父國造の祖) 瀬織津姫命 倉稻魂命

二ノ宮 小河神社 村社 西多摩郡東秋留村二ノ宮

祭神 國常立尊

三ノ宮 氷川神社 官幣大社 北足立郡大宮町高鼻

祭神 素戔嗚尊 式内名神大社 武藏一ノ宮(大宮の條参照)

四ノ宮 秩父神社 縣社 秩父郡大宮町

祭神 八意思兼命 知々夫彦命 延喜式内社

五ノ宮 金鑽神社 官幣中社 兒玉郡青柳村二ノ宮

祭神 天照大神 素戔嗚尊 景行天皇四十一年日本武尊の東征の際、東國鎮護の爲伊勢神宮にて倭姫命から

草薙劍とともに賜はつた火鑽金ヒツチカネを御靈代として奉齋したものと云ふ。

六ノ宮 杉山神社

延喜式に武藏國都筑郡杉山神社とあるもので、今郡内に同名の社が二五五六もあつて本社が不明である。續

日本後紀承和五年二月庚戌の條にも見えて居る社。江戸名所圖會は神奈川在下星川の杉山社と推定してゐる。

祭神異説竝に本地佛對照表

古縁起・新撰社傳記 撰武藏總社誌 誌等主神を 大國魂神と す。	猿渡盛道の武藏總社六所宮 縁起(寛永元年)依田貞鎮 の武藏多摩郡小野縣惣社縁 起(享保十年)	新編武藏風土記稿 江戸名所圖會(西 中殿を六所といひ 東殿を客來三所と いふと記す)	武藏總社誌 (江戸末期) 所載の本地 佛、下關諸 宮に對照す	現在 武藏總社誌等
新編武藏風 土記稿所載 六所神の一 異説	服狹雄尊 大宮寶尊 彌勒不動	瓊々杵尊 伊弉册尊 大宮女命	不動……… 彌勒……… 毘沙門………	六宮杉山神社 五宮天照大神 四宮素戔嗚尊 三宮知々夫彦命
大己貴尊 少彦名尊 事代主尊 健甕槌尊 武津彥尊	布留大神 大國魂神 亞宵氣尊 毘沙門	素戔嗚尊 大己貴尊 布留大神	地藏……… 釋迦……… 聖觀音……… (七宮)	中 御靈大神 武藏大國魂神 國內諸神
右 未來册尊	藥師 文珠 十一面觀音	一宮小野神社祭神 東 瀨織津姫命 倉稻魂命	藥師 文珠 十一面觀音	東 一宮(小野神社) 二宮國常立尊 三宮素戔嗚尊

「大國魂神」には、普通名詞的及び固有名詞的の意味があり、前者は(1)天神に對する地祇の意と、(2)他の地方に對して、或特別區域の地方神の意とで、後者は即ち大己貴命をいふ。そこで現在はこれを綜合し、武藏の國の神武藏に功德のあつた神は即ち大己貴命であるとしてゐるのである。

總社とは數社の神々を綜合して祀る社の謂である。國府の總社は平安朝に起つた。本來國司はその國內の定められた主要な社に巡拜し奉幣すべき制度であつたが、平安朝の末地方政治の頽廢とともに、國府附近にそれ等の神々を合祀して、各社ですべき儀式を行ふ略法を用ひる様になつてこれが起つたのである。鎌倉時代には佛教に於ける國分寺に匹敵する様に考へらるゝに至つた。

六所宮とは六社の神を一つ所に祀つてあるのでかくいふ。三所明神(尾張)・四所明神(香取等)・五所明神(水戸)などいふものと類似した意である。總社六所明神とこの大國魂神をいふが、總社と六社とは必ずしも一般的に特別な關係はない。然るに總社六所の六所は録所で、國內諸社の總録であるとか、國司の神拜所であるといふ説があるが、國府の總社が六所宮とか六所神社とかいふのはむしろその例が少い。寛永日記や小田系圖(常陸)などには嵯峨天皇の頃から五月五日諸國の國司をして天神地祇六神をその國府に於て一所に祀らしめられて、總社と號したといふことが見えるが、これはむしろ武藏の總社を六所明神といひ、五月五日に祭をする所から逆に考へたものではあるまいか。下總の總社を六所神社といふのも亦武藏のになつたのではないかと思はれる。

例祭 五月五日 午前神饌幣帛供進使參向、午後十一時本宮及び一ノ宮から六ノ宮までの神輿八基が御旅所(社の西方約三百米、甲州街道の左側にある)に渡御する。一ノ宮小野神社の神輿は、當日南多摩郡多摩村の本社から来る。この神輿渡御の間、町内の燈火を消すので、俗に「くらやみ祭」といはれ、當夜は各町村美しく神燈を掲げるから「提灯祭」とも云はれる。猶此以前四月三十日に、品川海上潔祓式、五月二日神鏡磨

祭、三日に競馬式、四日に御綱掛祭等の祭式が行はれる。「例祭古式次第書による」江戸時代の初めには毎年五月三日の競馬祭の日から、九月の晦日まで馬市があつた。これは八代將軍享保年間に江戸の浅草と麻布とに移つてしまつた。關原・大阪の兩役に用ひた徳川軍の馬は、多くこれに取つたと傳へ、大國魂神社の馬場と大門の並木の寄進も、これと關聯したものと云ふ。この馬市は始め國造時代から附近の牧の馬を集めて、その中の良いものを選んで朝廷に奉り、その後諸國の馬の市をやつた名残であると傳へる。

李子祭 七月二十日 これはもと六月二十日に行はれたが、明治になつて太陽曆の七月にした。六月二十日は頼義・義家が奥州の亂平定後凱旋の時戰勝報賽の祭をした日で、その遺例によつてこの日行ふといふ。この祭は桃が悪鬼を拂ふといふ古代の信仰と關係がある。古例の供饌として、李子粟飯等を奉るので李子祭の稱がある。この日御歳神の傳へられたいなむしを除いて、年穀を豊穰にする方法であると云つて、社で鳥の繪のついた扇を授與し、又社前には鳥の繪の團扇と李子との市がたつ。但し古語拾遺にいふ鳥扇とは、實は植物で學名 *Belamcanda punctata* *moench* といふ。鳥の繪の團扇ではない。

猶祭禮としては、七月十二日に攝社宮乃賣神社に青袖祭といふのがあり、その翌日には杉舞祭といつて、杉の小枝を持つて舞ふ神事があつた。ともに起原は文治の昔、源頼朝が毎年七月、國中の神職を集めて天下泰平の御祈禱をやる様に命じたのにあるといふ。それで、天下泰平の神事といつて、天保の頃までは入間郡北野村の物部天神社、同郡勝呂郷の住吉神社、多摩郡松原村阿岐留神社等の神職が參集して行つたといふ。社藏品は、屢々火災に罹つたりしたので、社の古い割にあまり古いものがない、中世の和鏡刀銀を多く藏して

居る。文書記録類としては、徳川家康以下の神領寄進狀その他數通及び縁起等がある。攝末社の主なるものは次の如くである。

坪 宮 國造神社 府中町 本町

祭神 武藏國造兄多毛比命

本社^の西約四百米の處にある。國造本紀に「无邪志國造、志賀高穴穗朝世、出雲臣祖、名二井之宇迦諸忍元神狹命十世孫、兄多毛比命、定賜國造」とある所のもので、五月五日の大國魂神社の大祭の時、その神輿が御旅所へ到着すると、この社から國造代と稱する使をたて、幣帛を奉る。これは國造が大國魂神社に奉仕した例が傳はつて居るものであると云ふ。例祭は二月十五日。

宮乃賣神社 大國魂神社正門外東側にある攝社

祭神 大宮乃賣命 又天鈿女命とも大國魂神の御母神とも云ふ。

もと宮之姬社などとも書かれてゐる。江戸名所圖會の如きは、須勢理比咩命・奇稻田比咩命・木花開耶比咩命にして本社^の后妃神なりと云つてゐる。創立は本社と同時代と云ふ。本社の大祭に神輿渡御の際は、この社前を通御のとき、俗に「御立寄り」と云つて、神輿を止めて、供奉の神官をして幣帛を奉らるゝ古式がある。七月十二日には、青袖祭といつて、今は大國魂神社の神職のみが、形ばかりやることゝなつたが、昔は國中の神職が集つて、舞樂をやり、天下泰平の祈禱をしたといふ。舞人が青袖の舞衣を着けて舞ふので、青袖祭と稱せら

れた。

國府八幡宮 府中町 八幡宿

祭神 譽田別尊

本社の東九百米甲州街道の南にあり、老樹の茂つた立派な境域である。聖武天皇の御代に諸國國府に建立せられた國府八幡であると傳へる。例祭は八月十五日。境内で布目瓦を得たことがある。

東照宮

祭神 徳川家康公

本社の西にある。元和三年（1617）駿河の久能山から、神靈を日光へ移す途中、府中御殿に宿したので、その遺蹟へ元和四年秀忠の命によつて創建した社、玉垣の中に當時の宮司猿渡信濃守從五位下藤原盛房の建てた享和二年の石燈籠がある。

大國魂神社の社務所前を東へ出れば、この邊を京所と云ひ、國分尼寺の舊址がこの説もある所で、もとは少し注意すれば布目瓦を路傍に發見することが出來た。總社六所宮の宮司猿渡氏の舊邸はこゝにあつた。猿渡氏はその發祥地は橋樹郡小机庄猿渡（現今横濱市神奈川區）で文治の頃目代として國衙の政務をとつた猿渡兼信の後である。兼信は幕府から總社檢校職に補せられ、その子爲信は大宮司となつたといふ。この東にある工場の角を右に曲り又直ぐ左に曲つた突當の高い所が天神山である。

天神山 府中町

丸山或は國造山と稱せられ、武藏國造の墓と云はれる。西端に天神の小祠がある。祠下に國分寺の礎石に似た大石が一枚置いてある。この丘は東西に長く、大體飄形で四方が低くなつてゐるので、一寸所謂前方後圓式古墳の様に見えるが、これは自然のものらしく、斯様な形の上へ丸塚を築いたものであらう。

窪地を隔て東北に見える堂は藥師堂で、これは不明な國分尼寺と關係がありはしまいかといふ説もある。

こゝから再び大國魂神社の境内へもどり、社殿の後の森をぬけて東南に進めば、金刀羅社に出る。この社は江戸名所圖會の繪にある觀音堂の跡らしい。この崖下には本覺山妙光院眞知寺（新義眞言宗豊山派）更に南方小川を隔てた南隣に觀光山安養寺（天台宗）がある。金刀羅社の石段を下り右へ坂を上れば、この左側が國府址である。坂を上り切つた所の茶畑の間を左へ曲る。

國府址 府中町 本町 御殿

桑畑・茶畑・松林などになつてゐる。面積凡そ二ヘクタール許りで、東と北とは臺地に連り、西と南とは高さ十米程の崖となつて居る。下には水田をひかへ、多摩の川原を俯瞰し、前方には多摩對岸の丘陵を望む。即ち國造・國司等の館址と云ふ。國司の制案れて後廢絶したが、天正十八年（1590）徳川氏關東に入つて後、こゝに狩の時に用ふる殿舎を建てた。寛永十一年（1634）焼失し、再建したが、こ

れも正保三年(1690)十月類焼し、その後は建てず、址は享保に至つて、開墾して畑となつた。こゝの樹を伐ると祟るといはれてゐた。

こゝから西北へ南武鐵道府中本町驛前へ下り、稍々北して左に曲れば善明寺である。

善明寺

悲願山圓養院 天台宗 府中町 本町

本尊は丈六の阿彌陀如來、舊記なく開創に關することは不明、中興開山は證海で、依田伊織貞鎮といふ國學者が享保の頃に再興した。この寺の門前の阿彌陀堂に有名な鍍佛がある。もと大國魂神社の境内にあつたが、維新後こゝに移された。胎内佛とともに國寶、高さ約二米の鐵鑄の坐像である。左の襟に左の銘が鑄てある。

大勸進念阿彌陀佛明蓮大工藤原助近右志者爲過去二親行嚴新發意乃至法界衆

生平等利益奉鑄一丈二尺佛身也建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日

胎内佛は立像である。これは「金佛阿彌陀如來の由來」には、畠山庄司重忠が、夙妻太夫と云ふもの菩提の爲に鑄造して、無量山道成寺といふ寺を建て、安置したもので、元久二年(1891)畠山重忠戦死の後は、この寺が廢頽して、さきの佛も雨風にさらさるゝ様になつたので、これを保護するため僧明蓮と藤原助近とが相謀つて、建長五年(1253)に鐵の坐像を鑄て、重忠建立の小像をその胎内に納めたのであると云つてゐる。

善明寺から高安寺までは、表通りを行つても裏を行つてもよい。表通りの方が少し遠いやうかもしれないが、道もよくその方が順序であらう。善明寺前から甲州街道へ出る道は、古の武藏から鎌倉への街道であると云はれて居る。この道が甲州街道へ合する角の丹塗りの柵をめぐらした所は大國魂神社の御旅所で、大祭のとき神輿はこゝに渡御するのである。それから甲州街道を西へ三百米ばかりゆき、國分寺驛から多摩川原へゆく砂利運搬の鐵道線路を越えたと間もなく、左に武野禪林の額のかゝつた黒門がある。こゝが即ち高安寺である。

高安寺

龍門山等持院 曹洞宗 府中町 片町

大門の突當りが東向の觀音堂、その西北に三間三面の樓門(明治五年建築)がある。門下の地藏菩薩と葬頭河婆の木像とは位置から云つて面白い。この門の西北に鐘樓(鐘は安政五年(1858)再鑄)がある。樓門の正面が本堂で、その後方は五十米四方も畑になつてゐるが、昔はこの所に、鎌倉公方が、屢々宿つた立派な建物があつたといふ。

本尊は釋迦如來(傳賢俊法眼の作)、開基は藤原秀郷で、市川山見性寺と云つたと傳へる。その後足利尊氏がこれを中興した。故に等持院と號するので、龍門山高安寺の號もその命名と云ふ。開山は大徹心悟禪師(貞和頃の人)、又海禪寺七世徳光禪師の再興といふ。塔中十院末寺七十五を有し、室町時代に於いて當地最大の寺院であり、又要害もよく、足利氏とは淺からぬ縁があつたから、屢々鎌倉公方

の陣營となつた。即ち、

永徳元年（1381）小山義政を征伐のため、鎌倉管領足利氏満が關東十二ヶ國の兵を率ゐてこゝに陣した。

應永六年（1399）大内義弘の亂の時、足利滿兼こゝに出勤し、

同三十年（1423）常陸の小栗滿重謀反のとき、足利持氏が出征の途上陣し、

永享十年（1438）持氏と上杉憲實との對抗の時、持氏は一時當寺にあつた。

康正元年（1455）足利成氏が上杉氏を討たうとした時もこゝに陣した。

何故かく府中は室町時代に事が多かつたか、これは分陪河原とともに述べよう。

境内の西南隅秀郷稻荷祠の後は西と南とは崖をなし、明かに人工を加へたと認められる。前述の如く屢々鎌倉公方の陣となつたこと考へ併すべきである。江戸名所圖會にも東西南の三方今も堀を構へたる形残りである。

秀郷稻荷は江戸名所圖會などにも「藤原秀郷靈祠今稻荷明神に勧請す」とある如く、一説に秀郷を祀つたものと云ふ。江戸時代には普通に神として祭られて居らぬものを神として祠を建てるのがやかましかつたので、合祀と云ふ形であらうか、大抵何々稻荷と號して祀ることが行はれた様である。こゝに秀郷の祠があるのは、天慶の昔秀郷が武藏守であつた時の邸址と傳へるからである。

この寺及び附近には、辨慶に關する傳説とその舊跡といふものがある。

この寺から西南に見下さるゝ田の中の一聚落は字分梅で、この邊から南方多摩川に至る邊を分陪河原古戦場と稱せられる。

分陪河原古戦場

府中町分梅・多摩村下河原・西下村 中河原附近

多摩川の河道が大分變遷があつたと思はれるが、今この邊は、水田・人家・河原等である。この河原の名稱については、治承四年（1180）十月源頼朝が諸軍をこゝに部署したので軍配河原と稱したのが訛つて分陪又分梅となつたと傳へるが、臆説にすぎぬ。此處に行はれた主なる戦は次の如くである。

1. 元弘三年（1333）五月十五日、新田義貞の鎌倉攻に際し、高時の弟左近大夫將監入道惠性の率ゐる北條軍を撃破した戦、この戦は史上最も重大な戦であるから、これに關することを書いたものは、古くは太平記・梅松論以下澤山ある。

2. 永享十年（1438）八月、鎌倉公方足利持氏と管領上杉憲實と不和であつた時、上杉勢がこの所に陣したことがある。「兵亂記・鎌倉九代後記等」

3. 康正元年（即ち享徳四年）（1455）持氏の子成氏と上杉房顯と戦ひ、房顯等敗走した。「鎌倉大日記・永享後記等」

4. 永祿四年（1561）に、上杉謙信が關東に討入つた時、北條氏の家人中條出羽守の軍を襲つて、その荷物を奪つたのも、この邊である。

猶府中附近での戦では、元亨二年（1322）七月、小山下野守秀朝一族百餘人逆徒相模次郎を討ち、建武二年（1335）五月諏訪三河守等が鎌倉へ赴く途中、澁川刑部大輔等と府中附近に戦ひ、正平六年（北朝觀應三年）（1350）足利尊氏が新田義宗と戦つたのは、府中の少し東の人見原である。又享祿三年（1500）六月上杉朝興と北條氏康との合戦もあつた。〔鎌倉九代後記等〕
 歸路は、大國魂神社の馬場大門の並木の傍から京王電車で新宿へ。
 〔費用 約八十錢〕（鳥羽）

参考

武藏國分寺に關しては、東京府編 東京府史蹟勝地調査報告（第一冊）
 一般國分寺に關しては、辻善之助氏「國分寺考」（日本佛教史研究所收）

七 二宮・瀧山方面

二宮明神 二宮館址 高月城址 瀧山城址

省線立川驛にて五日市鐵道（ガソリンカー）に乗換へ東秋留驛アキルに下車、驛の北口に出で、右へ行けば正面に見える杉の森が二宮明神（小川神社）である。五日市鐵道は比較的回数が少いから、時間の都合では、同じく立川から青梅鐵道（電車）の福生驛フツサで降り、西多摩橋に多摩川を渡つて、二宮に入る方が便利なる。福生驛と西多摩橋との間で玉川上水を渡る。（井ノ頭深大寺の條参照）

二宮明神 小川神社 西多摩郡 東秋留村 二宮

祭神 國常立命

創建の時代は詳でないが、江戸時代には藤原秀郷の勸請した社といつた。〔神主野村氏所傳〕天正十九年以來十五石の朱印を附せられて居た。府中の總社（今の大國魂神社）六所明神の一座はこの社の神である。但し江戸時代には六所の祭神が變つて居たため、（大國魂神社の祭神表参照）この兩者の關係はあまり云はれなかつた。

社は東に面して臺地の一角にあり、社より一段低い所にある御手洗池は盡きざる清い泉の水を湛へ、境内から布目瓦を發掘したこともあるといふ。人類の聚落に不可闕の良水を備へ、多摩の河原より一

際高く、又布目瓦の發掘された點から見て、この地は恐らく原始時代からの地方的中心地であつたことと思はれる。池畔には一祠あり、社宮神社と云ふ。通稱「おしやもじ様」と呼ぶ。

社の前から東南の方、數町を隔てた水田の中に大きい松が數本と小祠（田中稻荷社）とが見える。この邊を小名「おほやしき」といひ、館址はこの附近と推察せられる。此處へは社前から東へ眞直に線路と並行した道を行く、約二百米行つて突き當り右に曲り線路の上に架る陸橋（昭和橋）を越えて、又二百米程で達する。

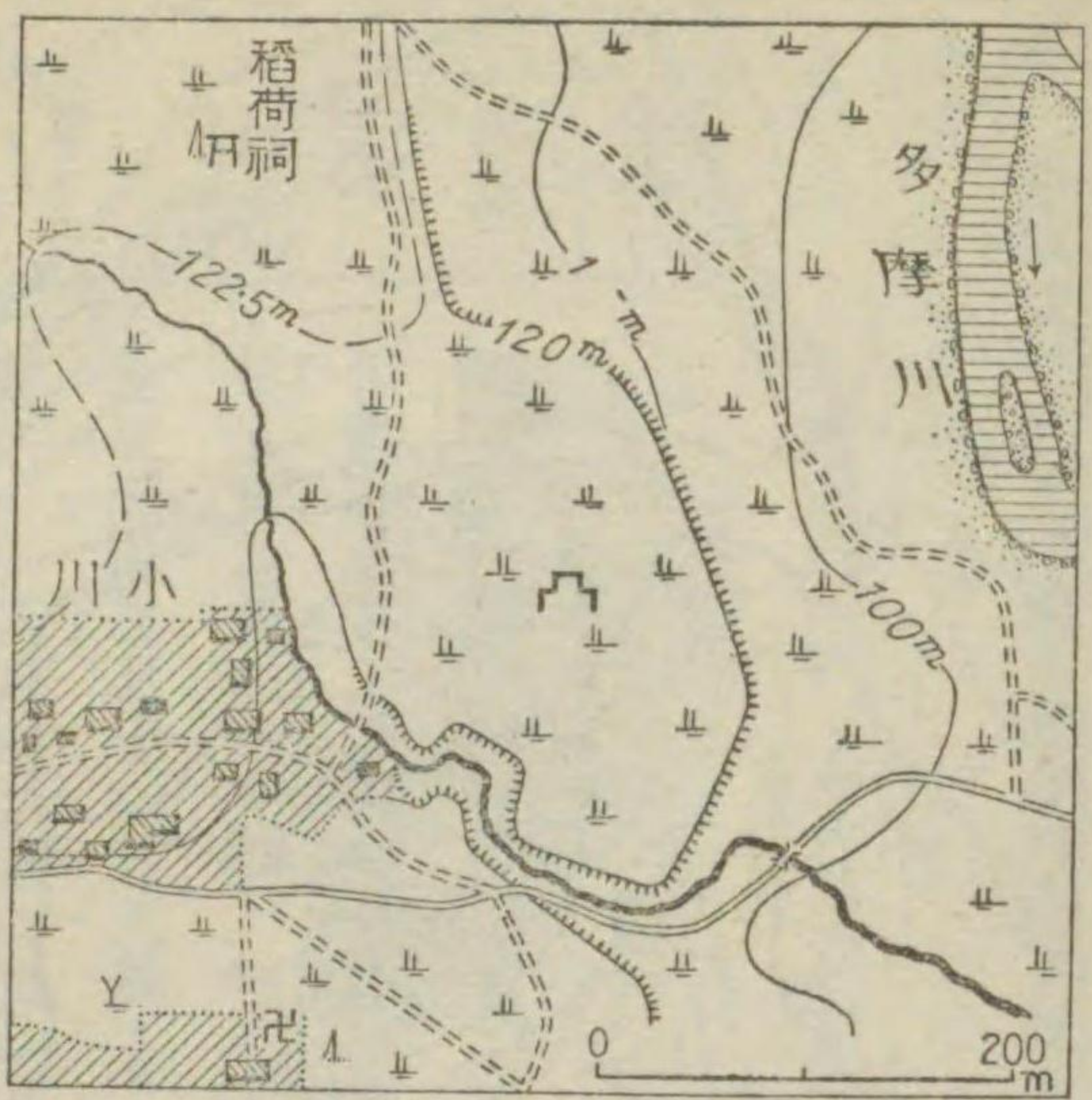
二宮館址 東秋留村 二宮 稻荷前

多摩川原に沿うた低地に突出した臺地で、河面からの高さ約十米、丘上は今全部水田で、土居等は残つて居ないが、たゞ西南部に人工と認め得る堀跡が乙の字形に存して居る。この堀は幅十八米程で、今中央に小川が流れ、一部は水田に利用されて居る。丘の東側と南側とは崖が可なり急傾斜に削られて居て、人工を加へたものと認め得る。西方は水田続きで何等の區劃も見えないが、稻荷の祠と、その前を南北に通ずる道とを何等か境域に關係があるものとすれば、全地域は東西二百米、南北三百米程の大きさとなる。この所は一に「おやしき」とも稱せられた「新編武藏風土記稿」といふ。これ等の地形から見て二宮に館があつたとすれば、こゝををいて外にはない。

こゝは二宮氏の居館址であらうと推定されて居る（渡邊世祐・八代國治兩氏の「武藏武士」が、それより後の大石氏の館址とも考へられないでもない。何れにしても所謂武家時代初中期の地方豪族の居

館址として、即ち當時の地方に於ける社會生活の中心として一見に値する。

二宮氏は武藏七黨の一、西黨の一族である。（立川の條参照）吾妻鏡に見える二宮時光等もその族人であらうと云はれる。



二宮館址の圖

武藏守宗頼—宗親—西宗忠—宗貞—宗綱—上田二郎—小川四郎—久長—二宮太郎
大石氏については次項高月城址の條参照。

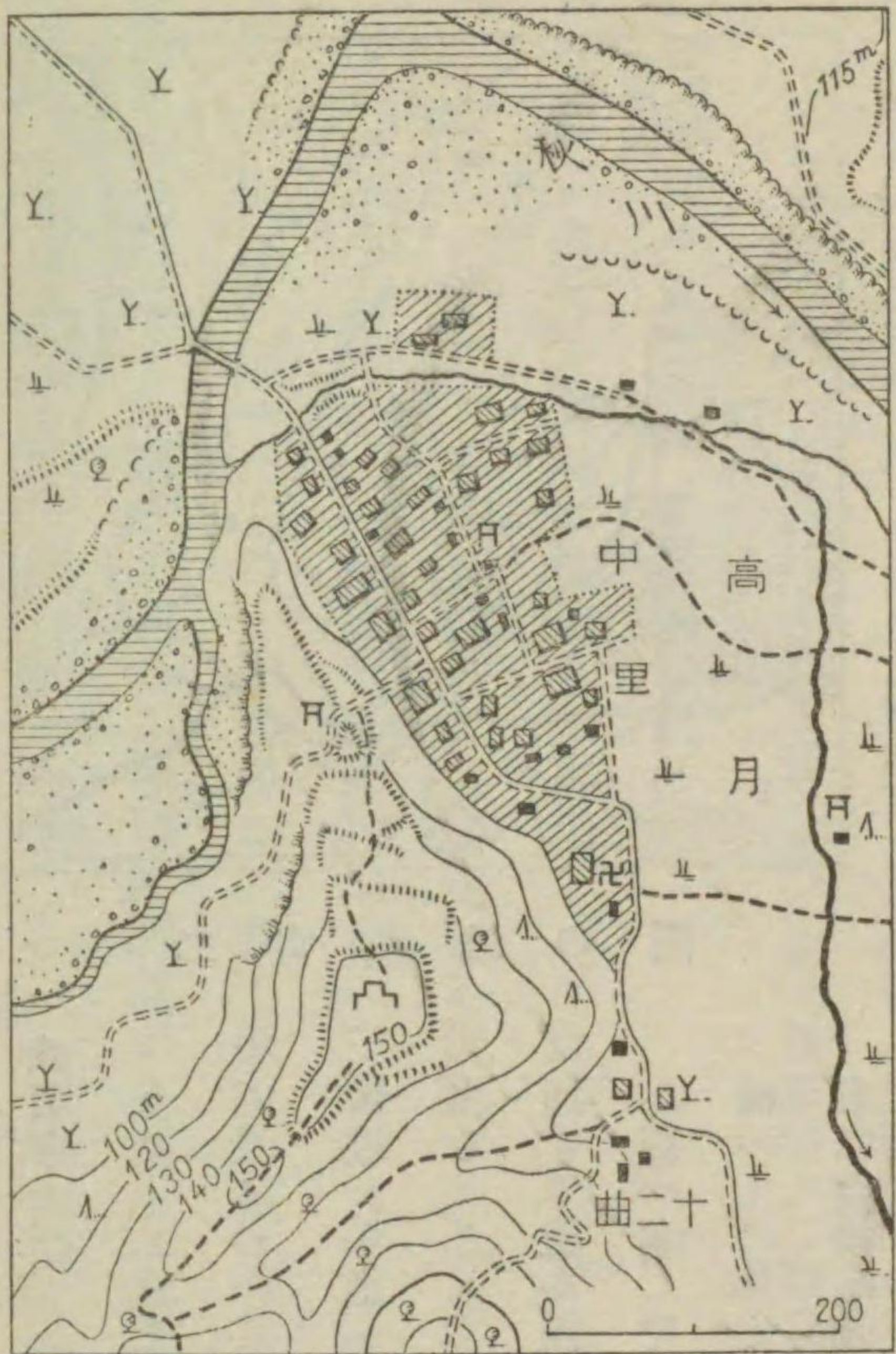
館址から南へ出て、川を渡り、突き當つて左すれば十字路へ出る。こゝで丘の南側の急傾斜が見られる。此處から東西に通ずる道を西すれば、熊野神社の前に出て、こゝで大きい道を南へ進んで、坂を下れば、秋川の川原に出る。川を隔て、橋の上に見える屋根形の山が高月城址である。秋川に架つた東秋留橋を渡れば、高月の聚落に入る。行くこと約百餘米、

右へ曲れば高月城址の登り口である。

高月城址 南多摩郡 加住村 高月 中里

城は多摩川の支流秋川がU字形をした所へ突出した高さ五十餘米の丘陵とその北の尾とを利用したも

のである。南の端は馬の背の様な狭い峯で丘陵の本脈へ連つて居るが、こゝを三重に掘切つて、獨立の丘にしてある。北へ出た山の尾の方は別として、他は何れも急な崖で、殊に西側は斷崖が直ちに秋川の淵に臨んで居る。冬季か早春なら東北西の三方は眺望よく、中武の平原は一望の裡に入るかと思はれるばかりである。郭は山上に一郭(約五十五米四方)あり、これは桑畑になつてゐる。その北の山下に一郭、更に北に續いて次第に低く段をなして一列に二郭ある。此等北部の二郭の東側に幅二米乃至八九米の細長い腰曲輪があり、是ら二郭の間に堀跡が見られる。西側は秋川の爲に次第に侵蝕されたものらしく、山下



高月城址の圖

の郭は何れも極めて細長い。最北端のは幅六米程で長さは四十米程もある。山上の郭へは現在北の郭から登る道があるが別に東南端から登る道が二筋あつた。何れも曲折して登る様に作つたものである。南への峯續きの所は、堀切が三重にしてある。北方の山下、即ち今の高月の中里の聚落がある邊

は當時小規模な城下の聚落があつた所であらう。此城は室町時代の中頃(長祿から永正の頃まで)、大石氏の本據地であつた。鎌倉大草紙長尾景春の亂の條にいふ二宮の城とはこれであらう。

本章の史蹟は大石氏關係のものが多いから、左にこれを略説する。大石氏に關する史料で比較的纏まつたものは、新編武藏風土記稿所載多摩郡下柚木村伊藤傳左衛門所藏の大石系圖である。今主として之によつて要點を記すこととする。

大石氏

木曾

義仲

(七代) 信重

源左衛門尉、遠江守(正慶三、五一應永卅一、二)

信濃佐久郡大石郷の住人、貞和□□九月鎌倉に出仕し、比企郡津下郷三百貫を賜はる。觀應二年十月上州進發の時先陣、三年笛吹の戦に功あり。

延文元年五月十一日入間・多摩兩郡の内十三郷を賜はる。

同年八月中二宮に移住。

至徳元年甲□□月安下に移る(恩方村松嶽淨福寺〔城福寺〕北方の山上に城址あり、八王子の條參照)。

憲重

源左衛門尉、石見守、母藤田氏(貞治四、七一正長二、二〔永享元〕)

永徳元年目代に補せられ、應永廿三年上杉禪秀の亂の時功あり、大任郡八郷を賜はる。

二宮・瀧山方面

二宮・瀧山方面

憲儀

源左衛門尉、母上杉重方女(明德三、正—永享十二、十二)父の死後目代をつぐ、持氏の亡後山内家に属す。

房重

源左衛門尉、母長尾因幡守實景女(應永廿九—享徳四、正)分陪河原の戦(鎌倉九代後記)(成氏と上杉房顯との戦、府中の條参照)に戦死。

永享十一年四月家をつぎ、十二年結城合戦の時上杉兵庫頭に属し、上野守護代として足利の野田城を降す。

顯重

源左衛門尉、信濃守、母上杉持朝女(康正元、正、繼—永正十一、四)長祿二年三月十八日高槻に移住。

定重

源三、源左衛門尉(文正二、六(應仁元)—大永七、十)永正十一年家をつぐ、同十八年二月瀧山に移住。

定久

源左衛門(延徳三、三—天文十八、十)大永七年十二月嗣ぎ、天文七年十月北條氏に属す。十一月三日北條氏の次男油井源三を養子として之に家を譲り、戸倉に蟄居、十二月廿日出家。

定仲

播摩守(天文三、十一—天正十八、正)——直久 天正十八年獅子濱城に戦ふ。天正六年二月關宿城を賜はつて居住した。關宿城は氏照の屬城である。

女

氏照室 太田信濃守資正(岩槻城主)室

女

高月城は、大石系圖によれば信濃守顯重が長祿二年(1458)二月十八日に移住した城である。その前年長祿元年は足利成氏が古河城に據り、またこれに對抗した上杉氏側の江戸・岩槻・川越等の諸城の修營成り、澁川義鏡が關東探題として蕨城を營み、更に足利政知が伊豆堀越に來て關東の主となつた年で、鎌倉府の分散後、中心を失つた關東は地方割據の形勢となり、諸豪その城館を修營した頃である。従つてこの地方を根據とする大石氏もその居城を修築し防備を嚴にしたこと、思はれる。又同系圖に永正十八年二月定重瀧山へ移住したとあるから、この間六十三年間が高月中心の時代と見てよからう。従つて鎌倉大草紙に文明九年十年の長尾景春の亂の條に二宮の城といふのも、梅花無盡藏にいふ大石定重の壘壁も、回國雜記にいふ大石信濃守の館もここであらう。然らば何故に鎌倉大草紙は高月の城と云はず、二宮の城と云つたか。恐らくこれは大石氏の祖信重が最初信濃から關東へ來て武藏に土著したのが二宮であり、従つて武藏の大石といへば二宮の大石で知られて居たこと、また二宮なる地名が高月などよりは世人に知られて居つた爲ではあるまいか。尤も當時も二宮に最初來た時からの比較的簡單な所謂屋敷城的の館もあつたかもしれぬ。この種の例は他にもよくあることである。太田道灌狀には「大石駿河守在城地二宮へ著陣」とある。

二宮城が史上に顯はれる文明九年十年の長尾景春の亂の時のことは、鎌倉大草紙に「(太田道灌等の上杉勢)。同廿五日(文明十年正月)豊島勘解由左衛門が平塚の要害(平塚の條参照)へ押寄せければ其曉没落して敵猶丸子・小机(小机の條参照)に籠る。上杉定正は河越に籠り、長尾景春は吉里宮内左衛門以下相伴ひ、大石駿河守(顯重)が二宮の城へ著陣して、小机の城の後詰せんとす。同三月十日河越の城より二宮へ押寄せければ打負、

二宮・瀧山方面

景春は成氏の御陣成田へ参て千葉新介孝胤相催し、羽生峯に陣取、同十九日小机の陣より太田圖書助資忠引かへし、同二十日羽生に向て定正も出勢せり。孝胤・景春一戦にも及ばず引退、大石駿河守楯籠二宮の城も降参す云々」とある。

梅花無盡藏卷六に

「武藏刺史之幕府、有爪牙之英臣、是曰大石定重。廻木曾源義仲十葉之雲孫也。武之二十餘郡悉屬指呼。忠義貫日終始一節、規勝地於武野、頗設壘壁之備、邇來築亭子。」

といひ、風景の勝れたのを賞して亭を萬秀と號した由見え、回國雜記には「大石信濃守といへる武士の館にゆかり侍りてまかりあそび侍るに、庭前に高閣あり、矢倉などを相かねてはべりけるにや、遠景すぐれて數千里の江山眼の前につきぬとおもほゆ。」などあるのもこゝであらう。

尙、中里へ下る前に一旦城址の西側へ抜けて、秋川の堤の所迄行き、ふり返つて城址を眺めるこ前述の構造が一目に見られる。高月中里から瀧山城址へは、山の根に沿うて東南へ一筋道である。行くこと約千二三百米、瀧の聚落に入り、八王子方面に向ふ聯路によつて丘に入る。主な道は一筋である。

瀧山城址

加住村 中丹木

城は多摩川の南岸に連る丘、所謂「多摩の横山」のうち、地形の複雑な一地點を利用したものである地域も廣く、且複雑な地形に従つて人工を加へたものである爲、純人工的なものとは違つて嚴密に範

圍を限定することが困難である。東西凡五百米南北凡四百米、東南を表とし、北方多摩川を背に於て、南方の谷に城下の聚落を置いたものと見られる。

高月の方から来れば城の背面へ出る。現在の聯路たる登り口は搦手の道であらう。この折曲つた道を二、三百米登ると右側に急な金刀比羅神社の石段がある（これは後世社のために城の崖へつけたもの、それ故急峻である）。この上が本丸址である。こゝはこの城の最高所で中心であつた。南方は僅かに隣接する郭を見得るのみであるが、北方は多摩川秋川の合流點を俯瞰し、中部武藏の平野を一望に收むること高月城にも勝り、多摩川を隔て、狭山の丘など一眼に入る。この郭の北と西とは非常に高い急な崖で、幾分は人工を加へたものと見られる。南部に霞神社があり、その西南が一段低くなつて一郭をなして居て、西南隅に井戸があるが、震災で井戸側が崩れてしまつてゐる。東北隅に五間（約九米）に八間（約十四米）程の大きな枳形がある。甲州流に所謂五八の枳形に符合して居る。こゝから東の郭へは深い空堀に橋が架けてあつたと思はれる。この本丸の東と南との丘上に連つて大小十餘の郭がある。何れも空堀を以て劃されて居るが注意して見ないと分らないものもある。

この城は永正から天正の初まで、大石氏及びこれを繼承した北條氏照の居城であつた。

大石系圖によれば、永正十八年（1531）即ち大永元年定重が高槻からこれに移つたといふ。その子定久の時、天文年中（1535—）北條氏に屬し、氏康の二男を養子として家を譲り、自身は戸倉に引退して出家した。これ

から氏康の子油井源三即ち後の北條氏照の居城となり、天正の初八王子に城を移すまで、西部武藏の中心であった。永祿十二年(1569)の秋、武田信玄が關東に侵入して北條氏を討つた時、この城をも攻めた。小山田信有の率ゆる一支隊は小佛峠を越えて戸取の砦(今の廿里)を破つて西から迫り、信玄の本軍も上野から南下してこの城を攻圍した。武田勢は三ノ曲輪を攻破り、勝頼自ら槍を振つて師岡山城などと奮戦したと傳へる。城兵よく防戦して容易に陥すことが出来なかつたので、圍を解いて小田原に向つた。

本丸の下段の郭の南端から東の道へ下り、東南に行くこと二百米程で、道は左右に分れる。左(東)の道は本丹木・八日市・横山の方へ行く道、右の中丹木・留所の方へ出る道である。従つて城の全規模を見ようとするには、西方を一巡する必要がある。道順としては先づ西の道を山の下まで行き、再び城の舊状を考へつゝ戻つて前記の左の道を行くとよい。

東南に下つて行くところある谷合は、もと水を溜めた堰もあつたやうで、比較的身分の低い侍や城に附屬する工匠などの住宅があつたらしく、鍛冶谷などゝ云ふ地名も残つて居る。南方の木茂つた高い丘は城の鎮守藏王權現の社のある所である。この社ははじめ高月にあつたが、大石氏が城をこゝに移すとともに移されたものといふ。八王子に城が移つてからは、更にそこにもこの社の社が城内に建てられた。

城の東方五百米程の所に、横山・八日市・八幡宿などといふ所がある。これは城下にあつた聚落の名残で、八王子へ城を移す時、ともに移つてかの地にも同様の地名を留め、八王子城が廢されて後、現八王子市の地に移つて、その中心なる八日市宿・八幡宿・横山宿(今は皆町)となつた。これ等は近世都市發達史上の面白い

標本である。八日市に今もある牛頭天王の社(江戸時代に除地百二十坪、村民持)は市の神であつたかもしれぬ。關東地方の城下町の市場にはしばしば天王が祀られた。當時、附近には少林寺(氏照開基)の外に今八王子市にある大善寺や極樂寺、大幡の寶生寺などもあつた。

こゝから南して八王子市に出るには約八軒、八高線小宮驛に出るには約五軒、しかし八高線は極めて回数が少いから、八王子へ出た方が便利である。又は北して多摩川を渡り、五日市鐵道南拜島驛から乗車するも可之は約二軒である。尙、青梅鐵道拜島驛迄は約三軒三ある。(石山・鳥羽・増訂者岩見)

〔費用 新宿―東秋留六十五錢、小宮―新宿六十八錢、八王子―新宿六十錢〕

八 八王子附近

- 多摩陵 十里ヶ原古戦場 八幡神社 宗關寺 八王子城址 淨福寺
- 新城址 西蓮寺 相即寺 子安神社 大義寺 八幡八雲神社 妙藥寺
- 極樂寺 大善寺 宗徳寺 信松院 廣園寺

中央線淺川驛で下車し、甲州街道を東へ七八百米行けば、左側の丘陵が「武藏陵墓地」で、大正天皇の多摩の御陵はこの境域にある。猶淺川驛より乗合自動車の便があり、御陵前に至る。

多摩陵 南多摩郡横山村 下長房龍ヶ谷戸

大正十五年(1926)十二月二十五日、大正天皇崩御あらせられ、尋いで昭和二年一月三日宮内省告示第一號として、陵墓地の名稱所在地域が定められ、武藏陵墓地を南多摩郡横山村・淺川村及び元八王子村所在御料地内に設けられ、新御陵地は横山村下長房龍ヶ谷戸に定められた。越えて二月八日御斂葬の儀を行はせられ、御陵名を多摩陵と申上げる事になった。

御陵から又淺川驛前へ戻り、元八王子村に至る道を御陵墓地の西縁に沿うて丘へ登つてゆく。この丘へ登り切つた邊一帯が十里ヶ原古戦場である。

十里ヶ原古戦場 横山村 下長房 廿里

鳥取又は戸取とも書く。今の帝室林野局の林業試験場附近にあたり、村の西南に位する。可なり凸凹ある丘陵で、今も元八王子の谷へ入る最初の大きな道がこゝを通つてゐる。この地は頗る要害の所であるから、甲州口のかためとした所と思はれる。

永祿十二年(1569)武田信玄が北條氏を攻めようとして碓氷峠より出馬した際、郡内の小山田兵衛手勢二百騎雜兵ども九百許の人数で、小佛峠を越えて瀧山城に向つた。北條方は氏照の家人、布施出羽・横地監物等が當所へ出張して防禦した。北條氏照の侍金指平左衛門・野村源兵衛等の采配を許された一騎當千の者が討死したのは此處である。今その跡は昔と大に變つてゐるであらうが、土人の傳へに氏照領地の頃は、かねて枳殼樹など植ゑまはして、要害の設があつたといふ。

前述の道を行くと、なだらかな坂を下つて元八王子の谷に至る。前面に八幡の森がある。

八幡神社 郷社 元八王子村 元八王子 八幡宿

天正十九年(1591)十一月社領十石の御朱印を賜はる、いま村内の鎮守である。傳によると、鎌倉時代梶原平三景時がこの邊を領した頃、鶴岡八幡をこゝに勧請したと云ふ。今にその時の棟札を存してゐる。社殿にも梶原の紋をつけ、神職も梶原といふ。鳥居の所より拜殿までは左右に杉の古木が茂つてゐる。梶原杉は二つある。社の脇にあるものは已に枯れてゐる。今一株は表にある。この木の邊に

縄紋土器の破片が散布してゐる。境内にもと末社で牛頭天王があつた。寶物として傳弘法大師筆一軸がある。

この社の鳥居の前を西へ行くと五百米で宗關寺につく。

宗關寺 朝遊山 曹洞宗 元八王子村 元八王子 中宿

下恩方村心源院末、朱印寺領十石、開山は隨喜舞悅禪師、文祿元年(1592)北條氏照の爲に建立した。昔は今の所より三百米ばかり東にあつた。その來由は、昔此處に神護寺といふ古刹があり、これは華嚴菩薩の開闢で朱雀院の勅願所であつたといふが、年を経て衰頽した。北條氏照この地に在城の頃、かゝる古刹の頽廢することを嘆いて之を再興し、佛國普照禪師を開山とし、牛頭山寺と號した。これも天正十八年(1590)慈根寺没落の後再び廢寺となつたので、その跡にたてられたのがこれであるといふ。この寛永年中に隨翁の書いた記録は史實に稍、正確を缺いてゐるやうである。本尊の釋迦は木の坐像で、臺座ともに長さ約四十六糎、安阿彌の作である。本堂には宗關寺の三大字を扁し、これは唐僧心越の篆書である。抑、朝遊山といふのは、もとこの地に朝遊軒といふ氏照の禪室があつたのにより、寺號宗關は氏照の法諱によつたといはれてゐる。この寺の左手の山上に觀音堂がある。約二米七二四方で正觀音(木の立像の長さ約二十一糎)を安置してある。傳惠心僧都の作。

宗關寺の西南四百米西の山間に、北條氏照・中山勘解由・狩野一菴等の墓がある。又宗關寺には、これ等の位牌がある。

宗關寺から西南に聳えて見える山が城山で、城はこの山上と山下の谷とに互つて設けられてゐた。城址を一巡するには、先づ宗關寺から西へ少し行つた所で小川の流れ出る城山南下の谷を六百米程入つてその奥を極め、引返して八王子神社の詣道を登るとよい。又淺川驛より自動車(距離三軒五、賃金一圓)を備へば直通でこの詣道の入口に達する。

山下の谷には貯水池跡・千疊敷又は御主殿といはる、館址・大鼓郭などあり、景信山及び頂に物見址ある城の西方の峯など仰ぎ見ることが出来る。山上では主要各部・山上の井戸・穀倉跡・八王子神社等が見られる。

八王子城址 元八王子村 元八王子

淺川驛の西北方約四軒、元八王子村大字元八王子と恩方村大字下恩方との境にある。城山と呼んでゐる。四面山壑を繞らし、東方稍、豁け城山川の走るあり、且西に小佛の險を扼した要害の山城である。比較的規模が大きく、枳形があつたと云ふ所から山頂まで直線距離で一軒餘、高低の差二百五十米程もある。山嶺に城の中心を置き、中腹に居館、山麓に諸士の邸宅・倉庫を設け、附近の高地には更に物見臺を配置してあつた。

宗關寺から少し西して廻る石橋の左に數十年前迄枳形が残つてゐたといふ。これから中には中山勘解

月城・瀧山城の附近にも大石氏が祀つた神で、城の移ると共に此處へも祀られたのである。一番高い郭の背後に一段低く猶一郭あつて、此處へは城址碑裏下の井戸の脇から行かれる。この部分は林になつてゐて、はつきり道がついてゐない。この西端れが掘切になつてゐて、馬冷しと言はれる石で周圍を疊んだ溜池がある。この山の西北側に細長い削平地がある。これを馬場跡といふ。馬冷しの掘切から西は幅の狭い峯つゞきで、その四百米程西の高い所に物見址がある。四角形に石垣で築いた所が二段残つて居る。大さ各々二百平方米ほど、此處は兩側は斷崖、西は非常に深い堀で、僅に東から急な細道を登り得る極めて要害の所である。此處からは景信山の物見も見え、内郷村の城ヶ峯を中介に、高尾の山彙をめぐつて津久井城に連絡を取つたものであらう。

この城の築營の年月は詳かでない。元龜年中(1570—72)なりとも言ひ、或は天正三年の頃なりとも言ふ。新編武藏風土記稿には「天正の初北條陸奥守氏照が築く所なり。」とある。何れ永祿の末に計畫され、天正六年頃に大體出来上つたと思はれる。それまで氏照は郡中瀧山城に在城したが、瀧には落ると言ふ縁語がある故、之を忌んでこの城を築いて移つたといふ。然し、想ふにその頃は甲州より屢々侵略されたから、甲州に押への爲に移つたものであらう。八王子権現を城の鎮守としたので、八王子城と號したと傳へる。又地名を神宮寺村とも、權現別當の山號の字を以て慈根寺村とも言つたから、神宮寺の城とも慈根寺の城とも言つた。かくして西武の中心たること十餘年、天正十八年六月廿三日、豊臣秀吉の軍(前田利家・上杉景勝の勢)に攻落されて建物は焼け、後氏照自盡するに及んで廢城となつた。氏照の瀧山城に居る様になつた天文の末頃は、次第に地方的統一集中の傾向が盛になつた時期で、彼地に於いて既に附近に多くの武人を住ましめ、社寺を新建移集し、鍛冶その他の工匠を集め、市場を備ふる等、漸次後の城下町風の状況になりつゝあつたが、この八王子に移るに及んで、彌々完成した。現八王子市は、城の廢された後、その遺物たる城下町が甲州街道筋へ移り、時代と地方との一般的状況に育まれて、生長發達したものである。(八王子・瀧山の條参照)

天正十八年八王子城攻撃戦の状況を、参考の爲簡単に記す。當時城主北條氏照は、相模小田原城にあり、留守として横地監物吉信は本丸を、中山勘解由家範は中ノ丸を、狩野一菴は三ノ丸を、金子家重は金子丸を、近藤出羽守は山下曲輪に籠つてゐた。兵數凡そ三四千人。上方勢(豊臣秀吉の軍)は、六月二十三日の早朝濃霧に乗じて横山方面から町口を破つて攻入り、さきに豊臣氏に降つた松山・川越方面の諸兵は山下曲輪を攻め、上杉は東方大手から前田は北方搦手から攻めた。城兵よく防戦したが、城の一部に火を放たれたので約半日にして遂に陥つた。

城山を參詣道に沿つて降り八合目の一寸下手に立札があつて乗合自動車松竹停留所に至る道が分れる。この道に沿つて山を下る。立札には約九町とあるが實は二軒ある。松竹の停留所より恩方の終點の方へ少し行くと右手の山が新城址で、その麓に淨福寺がある。入口に次の如き立札がある。「新城址。大石源左衛門定久の城址にして大永四年十二月鎌倉管領上杉憲政の來攻せる古戦場なり。中腹に千手觀音を安置し、後方山上に城跡を存せり。」

淨福寺

千手山普門院 新義真言宗智山派 恩方村下恩方松嶽

横見郡御所村息障院の末である。境内三萬四千七百七十三平方米といふ。開山は廣惠大師。本尊大日如来木の坐像約四十五糎、寺の由來記によると、昔は千手觀音を本尊としたとある。當寺由來記はこゝには略する。(武藏名勝圖會・新編武藏風土記稿について見られたい。)本堂に向て左の方に鐘樓あり、鐘の直徑七十糎、長さ百九糎、寛保四年(1744)鑄造、銘略す。

觀音堂。この堂は境内西の方山上へ登つた所にある。三間半四方の堂で、千手觀音長さ七十糎餘のものを安置してある。傳行基菩薩の作木像で彩色を用ゐず、非常に古色を帯びてゐる。即ち昔の本尊であらう。今寺に觀音堂の古い棟札を傳へてゐる。その文は略すが新編武藏風土記稿・武藏名勝圖會等で見られたい。又古い繪馬が二枚ある。何れも長さ約六十一糎、幅約四十糎、天文二十五年(1566)の奉納である。

又當寺には境内小社として本堂の向つて左に白山社・天神社がある。

本堂の左手の方から小道を登れば觀音堂を過ぎ城山にかゝる。道が相當けはしい。

新城址

恩方村下恩方松嶽

松嶽を土人は今は松竹と書いてゐる。この城は大石源左衛門が構へたもので、天文(1532—54)迄は大石氏代々高槻に居城し、新に城を築き新城と言つたのが、唱へ残つて今に土人はかく新城址とい

つてゐる。(高月の條参照)

さてこの城山は淨福寺より登ること四百米許で、山上に達すると、凡そ六十米四方程の地がある。その途中の山中に掘切又は土居の跡がある。北の方へ一段降りて又僅の平地がある。八王子城より北にあたり、山續ではないが、八王子城の後方でその間凡そ五六百米、この城山は境界狭く、又高くはないが險阻であつて、川をひかへ、全く孤立した要害である。

城山を下つて自動車道に沿つて下一分方に行くと、凡そ二軒で西蓮寺の山門に至る。又乗合自動車を利用してもよい。

西蓮寺

華川山不動院 新義真言宗智山派 元八王子村下一分方四ツ谷

朱印寺領十一石二斗餘、寺方村寶生寺末、開山開基は未詳であるが、中興開山祐眞法印寛正二年(1476)二月朔日寂すとあるから、これより舊く造立されたことは知られる。弘治三年(1527)の北條氏文書一通を藏してゐる。本尊は不動明王の木坐像五十一糎程で弘法大師の作といふ。又辨天堂(傳弘法大師作)は大門を入り百米程の所の池の中の島にある。又境内鎮守として山王社の小祠がある。

西蓮寺より東北へ二三百米小道を行けば相即寺に至る。

相即寺

元東原山 淨土宗 元八王子村下一分方四ツ谷

瀧山大善寺の末、朱印寺領十石一斗餘、天文十五年(1546)八月十五日に草創した。開山を忍譽(天

文廿一年寂。本堂八間四方、木尊彌陀坐像三尺、當寺の舊過去帳は開闢のときよりのものであつて、北條氏の家臣を多く載せ、且天正十八年(1590)八王子城に於て討死した人々の法諡を記してあつたといふ。門を入つて左に落城の際の戦死者千二百八十三人の菩提の爲に建てられたといふ地藏堂があり、石地藏を安置してある。この外本堂の正面に銅の彌陀がある。坐像で、寶曆四年(1754)の鑄造、高さ五尺許、目方五十貫といふ。濡佛である。本堂位牌壇に二代熊澤土佐守並に土佐守次男熊澤善助。天正十八年六月二十三日八王子城に於て戦死の位牌がある。但し今あるのは、その裏面の文字によれば明治二十三年(1889)にこの寺で三百回忌法會執行の爲に、熊澤氏の子孫が寄附したものである。表には紋章の下に、「圓月淨感大居士、淨念宗信居士」と二行に記され、各の下に二行宛に「二代熊澤土佐天正十八年六月廿三日八王子城ニ於テ戦死」。「土佐次男熊澤善助右同時戦死」とある。この二人の名は新編武藏風土記稿にも檀林大善寺志にも見えてゐる。

相即寺より西蓮寺の前の通に戻る。此處より八王子市は近い。又乗合自動車もある。但し時間の關係で恐らくこれ位で歸らねばならぬだらう。八王子を同時に見る人の爲に道を示す。西蓮寺前の道に沿つて水無瀬橋に出て、淺川を渡り、町並を行くこと約三四百米で道は甲州街道に合する。此處を追分といひ、こゝから電車の傾がある。引續いて八王子市内を見る人は追分より東數町の宗徳寺より始めて、信松院・廣園寺・本立寺・子安神社といった順で廻るとよい。便宜上八王子驛よりの道順で書くことにするが、八王子を見る人は

是非八王子市全圖(八王子市横山町文華堂發行)を使用されたい。

八王子驛で下車し電車道に沿ひ、北に進み、横山町の停留所で右に曲り、暫く行くと子安神社に達する。この間六百三十六米である。又京王電車の東八王子のすぐ側である。

子安神社

村社 八王子市明神町

祭神 木花咲耶姬命 相殿 奇稻田姬命 合祀 天照大神 素戔鳴尊 大山咋命

天平寶字三年(756)橘某勅を奉じて、皇后御安産祈願の爲創立したと傳へられ、朱印社領六石餘、寶永元年(1704)火災に罹り、古記録寶物等悉く烏有に歸した。

今同社に懸佛と、板碑十數面を有してゐる。懸佛は十一面觀音の像を鑄出したもので、直径六寸五分、銘は武州多西郡横山庄之内子安大明神天文廿二(1553)癸丑十一月造立願主權大僧都清榮敬白と刻してある。當時郡名を多西郡と言つた事を知り得る。又板碑には康永三年(1354)同四年、同六年、貞和三年(1354)同五年、同十一年、貞治四年(1363)等のものがあり、この年號が孰れも北朝の年號であつて、當地方に北朝勢力が盛であつた事を示してゐる。又康永は三年まで、貞和は五年迄であるのに、それより後の年號があるのは、一考を要する點で、これは、當時の交通通信設備の不完全によるので、中央政府の政令が普く田舎に及ばず、都に遠い地方では改元になつた事を知らず、その年號に依り年數を増して行き、改元後二年も三年も、遂には五六年も、かゝる事態を續けた向もあつたので、かゝる事實を、これは立證してゐるのである。子安神社の森を俗に船森といふ。八幡太郎義家陸奥征討の時武運長久を祈り、十八本の櫻を船形に植ゑたのでかう呼ぶのだと傳へ

られた。又横山黨の祖先が之を植ゑたと傳へてゐる。櫛の大きさも府中の大國魂神社の櫛並木のそれに遜色がないものであつたが、八王子大火の折火災にかゝり、焼けたが殘株により推定すれば目通二丈を超えたものがあつたらしい。

子安神社より道を戻り、右に折れ更に左に曲ると大義寺に達する。この間六百七十米。

大義寺

龍華山 新義真言宗智山派 元横山町

もと鎮守八幡・八雲兩社の別當寺で古くは大元寺と稱し、新編武藏風土記稿に「近郷寺方村寶生寺の末寺、開基不詳、境内に清辨法印と刻せし石塔あり。この人應永二年（1395）五月八日寂すと云ふ。若し開山の僧にやありけん。」とある。境内に女流俳人星布の墓がある。星布は享保十七年（1732）に生れ、幼くして俳諧を好み、風雅を愛し、白井鳥醉に師事し、松原庵の號を傳へ得て、六十一歳で尼となり、八十三歳で歿した。墓碑には辭世の名句「咲く花も散れるも阿字の自在かな」が刻まれてゐる。

大義寺より前の道を西へ行き、左へ折れると八幡八雲神社に至る。この間二百米。

八幡八雲神社

郷社 元横山町

創立の年代は詳かでないが、小野篁の後裔武介義隆が横山の庄に住するに際し、館の南方の地に勧請し、守護神としたものであると傳へられてゐる。今表參道は東に向いて走つてゐるが、古は北へ向ひ横山氏の館址であつたと傳へらるゝ妙薬寺に及んでゐたとの事である。又足利將軍義植は當社に祈願

し、劍・繪巻物を奉獻し、爾來足利氏より年々代參の使が來たといふ。相殿に鎮座の八雲大神は、慶長二年（1598）六月洪水の折、その御神體が横山郷宇板屋淵に漂着したのを、八幡神社の相殿に奉祀したものである。文政年間火災に罹り、社殿寶物悉く焼失したが、嘉永二年（1849）改築した。明治元年（1868）に八幡八雲神社と改稱し、郷社に列せられた。尙明治三十年の大火に社殿悉く烏有に歸して、現在の社殿はその後の建物である。九月十五日に八幡の例大祭が行はれる。

八幡神社を去り、北へ二百米歩めば妙薬寺に達する。

妙薬寺

醫王山 新義真言宗智山派 元横山町

寺傳によれば、正平十年（1355）清遍律師が境内東方の薬師堂を創立し、元中八年（1391）清承法印が本堂を建立したもので、その際、河内國延命寺から不動明王並に歡喜天の像を受けて安置し、醫王山聖天院妙薬寺と稱するに至つたといふ。當寺域は最初横山氏の館であつた所であるとも傳へてゐる境内に「横山様の碑」といふ寶篋印塔がある。山門に入つた左側に苔生びてゐるのがそれである。現在は何なる理由かこれが咳の神様として里人から信仰されてゐる。

妙薬寺より南に戻り、大通りを西し、大横町の角を右に曲つて暫らく行くと、左に大善寺、右に極楽寺がある。極楽寺まで六百米である。

極楽寺

寶樹山 淨土宗 大横町

北は浅川に臨み、青梅街道に沿ふ。寺傳によれば、永正元年(1502)鎮譽上人の開いたもので大善寺同様、元瀧山にあつたのである。時の城主は寺領十石を附與した。後、瀧山城を元八王子城に移すにあつては當寺も、同所の梶原谷に移つたが、落城と共に兵燹に罹つた。時の住職乗譽上人は玉田院の導師であり、八王子の代官大久保石見守とは前から檀契であり、歸依されてゐたので、八王子を元八王子から現地に移すに當り、現在の場所に再建されるに至つたのである。徳川氏も朱印十石を附したが、承應三年(1654)及び寛文八年(1668)に炎上し、現在の堂宇は享保十三年(1728)の再建に係る。本尊の阿彌陀如來は安阿彌の作であるといひ、三尺餘の立像である。唇を開き齒を見せ、齒吹如來といふ變つた佛像である。境内に長田作左衛門の墓、儒者鹽野適齋の墓、及び浮世繪師歌川國道の墓等がある。寺實に金蘭戸帳、徳川家康軍扇半面の軸、前田利家墨附寫等を藏してゐる。

長田作左衛門の墓は參道に面して立つてゐる。傍に大正十五年十月一日、市制施行十周年紀念に、その功を頌へて建てた碑がある。墓石には「遍照院光譽清教淨春居士、元和三丁巳四月、長田作左衛門元重」とある。作左衛門はその伯父川島右近の推舉により伯父の主前田利家の御家人となり、川島と改姓し、許を得て、離散した商人を今の八王子の地に集め、市、起した人である。市の許可狀はその後焼失し、川島某の手記といふのが、その寫しとして新編武藏風土記稿(卷三十二)や八王子根元記などに見える。之によれば、利家の許可を得たのは天正十八年七月五日となつてゐる。根元記によると、最初は横山が四日・十四日・二十四日、八日市が

八日・十八日・二十八日であつたが、次第に亂れて諸所に立ち、更に一月の中、上十日横山、中十日八日市、下十日八幡宿などと改められたこともあつたやうである。商品は初めは紙・日用の雜貨が主なものであつたが、その後この地方の生絲絹織物の發達につれて、それ等が主なものとなつた。市は變遷しながらも今日まで傳り、數年前に四九の日と變つて間を等しくし、再び火金と變更されたが、絲の市はやはり四九の日の定めを維持してゐるとの事である。

鹽野適齋は八王子市千人町に生まれ、享和年間(1801-03)幕府の命により蝦夷開拓に奔走した後「新篇武藏風土記稿」の編纂に前後七年を費した。又適齋文稿十卷詩集十冊、築井縣行紀詩二冊、日光客中漫筆七冊、桑都日記正續五十卷の著書あり、殊に桑都日記は郷土史料として重んぜられてゐる。彼は弘化四年(1844)に生れ、七十三歳で歿した。

極樂寺より南に居ること一町で大善寺に至る。

大善寺 觀池山往生院 淨土宗 大横町

寺は八王子には相應しい機守神社といふ小祠と池とを前に控へて、道路より入り込んでゐる。開山は讚譽牛秀、北條氏照を開基とし、永祿年間(1558-69)瀧山城下に建てられた。群臣も盡く檀家であつたので、城が移ると共に元八王子へ移り、天正十八年(1590)落城の際兵火に罹り、氏照は死んだが、寺は慶長五年(1600)町の移ると共に今の地に移されたのである(檀林瀧山大善寺志)。淨土宗關

東十八檀林の一として、寺領五十石の朱印を附せられ、堂宇諸建物多く偉觀を呈して居つたが、數度火災にかゝり、今は山門を除く他悉く近年の建物となつてゐる。境内護念殿には、吞龍上人の自作と傳へる像を安置してある。上人は當寺第三世の住職であつたが、後幕府の命により上野國新田郡太田町大光院の開山に請ぜられた高僧で、又子育の上人として里人に尊敬されてゐる。本堂裏手の墓地に豪族津戸三郎の墓がある。又當時には寛永三年(1656)鑄造の洪鐘があり、相當の作と認められてゐる。銘があるがこゝには略する。

この寺にも八王子城の戦歿者中、檀家二百八十三名中の重なものであるといふ位牌があり、それには顯現院門譽道善休劍居士、清向院本譽淨念息劍居士、馨雲院源譽道香焼劍居士といふ戒名が記されてある。

大善寺志(淨土宗全書所載)には二百八十名の戒名が記され、その中にこれ等の戒名も見えてゐる。之によれば顯現院は鈴木渡守、清向院は鈴木彦八、馨雲院は同庄三となつてゐる。

因に淨土宗關東十八檀林とは左の寺々で、攝門上人の檀林巡路記(文政四序、刊)といふ案内記がある。

- 鎌倉 天照山 蓮華院 光明寺 鴻巣 天照山 良忠院 勝願寺 瓜連 草池山 蓮華院 常福寺
- 芝 三線山 廣度院 増上寺 飯沼 壽龜山 天樹院 弘經寺 小金 佛法山 一乘院 東漸寺
- 生實 龍澤山 支忠院 大巖寺 川越 孤峯山 寶池院 蓮馨寺 八王子 觀池山 往生院 大善寺

- 岩槻 佛眼山 英隆院 淨園寺 江戸崎 正定山 智光院 大念寺 館林 終南山 見性院 善導寺
- 結城 壽龜山 松樹院 弘經寺 本所 常在山 二尊教院 靈山寺 下谷 神田山 幡隨意院 新知恩寺
- 小石川 無量山 傳通院 壽經寺 新田 義重山 大光院 新田寺 深川 道本山 東海院 靈巖寺

大善寺の前の通りを南に戻り電車通に出で、西に進み八木町に入れば右に宗徳寺がある。この間約六百米。

宗徳寺 蟠龍山 曹洞宗 八木町

瀧山少林寺の末寺である。昔八木源左衛門僧となり、當所に草庵をつくり福聚寺と言つたが、彼の死後庵室が残つたのを、寛永十六年少林寺の第四世を開山とし一寺となつた。本尊は釋迦の像である。同地墓地に植田孟進の墓がある。碑面には「雲夢齋植田孟縉之墓」とある。

孟縉は、寶曆七年(1757)十二月八日熊本に生れ、文化年間(1804-17)幕府の命により、鹽野適齋等と共に新編武藏風土記編纂に従事した。著す所、日光名所考十卷、同追加二卷、淺草寺舊蹟考二卷、鎌倉名勝圖會千卷、鎌倉攬勝考十卷、日光山誌五卷等で、殊にこの地方の地誌として權威ある武藏名勝圖會十二卷は彼の手になるものである。天保十四年(1843)十二月十四日歿した。享年八十七。

宗徳寺を出で、少し電車通を東に戻り十字路を南に行けば、小門町を過ぎて、臺町の信松院に至る。この間六百五十四米である。

信松院 武田山 曹洞宗 臺町

初は金龍山と稱し今は武田山と改めてゐる。下恩方心源院の末寺である。武田信玄の六女松姫の開基にかゝり、卜山舜悦の開創したものである。松姫の史實は當寺保存の正徳四年(1714)仁科資眞の草した信松院殿百回會場記(新編武藏風土記稿參照)に詳かである。仁科資眞は信松院尼の兄仁科信盛の子孫で、尼公百回忌をなすと共に先祖から傳つた軍船模型を寺に寄進した。軍艦模型は大小二個あつて、大船は長さ九十六糎九(三尺二寸)、中央幅三十七糎九(一尺二寸五分)、高さ二十五糎七(八寸五分)、小船は長さ八十四糎七(二尺八寸)、中央幅二十五糎七(八寸五分)、高さ十九糎七(六寸五分)である。檜材作の精巧な物である。當寺には資眞の「軍船の記」といふ書付を傳へ、それにはこの軍艦の模型は、資眞の先祖が小早川隆景について船戰の法を學び、且軍船の模型を作つたもので「朝鮮を征する軍船二艘の木形を寫さしめて家に傳ふ」とあるから豊臣秀吉の朝鮮征伐の時に造つた軍艦の模型と確定される。旗は武田の一家であるから、その旗印をつけたのであらう。その他寺寶として信玄、松姫の手蹟、家康、秀康、水戸中納言書翰、家康寄進の狗犬等がある。又松姫手植の松といつて、今寺庭に幡屈し、老幹四方に延び二十數米に及ぶものがある。

百回會場記により松姫の概略を述べれば、松姫は織田信長の嫡子信忠と婚約があつたが、三方ヶ原の戰に信長が家康を助けたので信玄は破談の使を出した、信玄が卒して兄仁科信盛に頼り、衆の勸告を固辭し、年十八で薙髮し、武田氏が滅んで信盛も戰死したので、妹姪を具し、三遷して横山村に至り、侍女と機を織つて暮した。

家康はこれをきき、その貞節を嘉して月俵を給したといふ。彼女は常に心源院六世卜山舜悦に參じて法を聞いてゐたが、その草庵を寺となして元和二年(1616)四月十六日歿した。信松院はこの寺で遺骸も此處に葬つたのである。今本堂の西、丘陵の中腹の墓地、やゝ小高い所に松を貢つて松姫のさゝやかな墓石が建てられてゐる。

信松院から南し、大正殿招魂社の傍を通り山田道に出で廣園寺に行く。この間約一軒七。廣園寺は八王子の史蹟をさぐる者の逸すべからざる重要な所である。

廣園寺

兜率山傳法院 臨濟宗南禪寺派 横山村 山田

別格本山である。大江廣元の後裔大江師親が、康應元年(1388)八幡の靈夢により開基したと傳へ、開山は俊翁令山(後小松天皇勅諡圓融禪師)で、何れも木像を存する。その後鎌倉公方足利滿兼大檀越となり、武藏の内にて三百町の地を寄進し、當時堂塔宏壯となつたが、天正十八年八王子城攻の時、兵火に罹り、開山堂と勅使門を除く他、記録・寶物烏有に歸した。猶徳川の世となり寺領十五石の朱印を授けられた。古は塔頭四十九院、末寺百ヶ寺あつたといふ。現代の堂宇は近代再建したもので、最古の建物としては勅使門と稱する山門のみである。境内は樹木茂り、地域靜寂、頗る幽邃である。我が國で禪家の寶典なる「無門關」を出したのは實に最初この寺であつた。開基は法號を「廣園寺殿大海道廣大禪定門」と言ひ、應永九年(1408)壬申七月二十九日入滅した。

猶時間の餘裕があれば、道を戻り、青梅街道を北に進み、上野町に入り本立寺と金剛院を見るのもよい。
 本立寺は長光山と號し、永祿九年(1566)四月原大隅守刑部胤從の開基にかゝり、大僧都本立院日建上人を開山とする。新編武藏風土記稿の監修者原胤敦の墓がある。又境内の延壽櫻は日本百櫻の一といはれる。
 金剛院は、慈高山と號し、眞言宗高野派、寛永八年(1631)建立眞清大徳を追崇して開山とした。寺寶に湛慶作不動明王像一體、天台宗三井寺開山智證大師不動明王畫一幅、菅原道眞筆と傳ふる無量壽經等を藏する。
 こゝから八王子驛に出るには、道を東して寺町を横斷し、陸橋を渡つて右に下れば驛前に至る。この間七、八百米。

〔費用 約二圓〕(鳥羽・長澤・増訂者福島)

九 東村山・山口方面

正福寺 徳藏寺 山口觀音 中氷川神社 山口城址 勝樂寺

北野神社 小手指原古戰場

西武電車(高田馬場驛發)東村山驛で下りて、驛前の大通りを(この通りを東村山・村山貯水池間のバスが通つてゐる)眞直ぐ西に二百米程進み、右に折れると百米程で正福寺にいたる。

正福寺 金剛山 臨濟宗建長寺派 北多摩郡 東村山村 野口

正福寺は、寺傳縁起に依れば、北條時宗の命名なるが如く信ぜられてゐるが、草創以後、再度火災に罹り、舊記文書等は殆んど烏有に歸してゐるので、その由緒は定かでない。しかし乍ら、已に寺内に鎌倉時代の佛殿があり、寺紋も北條の三鱗を用ひ、且つ北條の姓が用ひられてゐる。即ち、佛殿とは俗に千體地藏堂、又は單に地藏堂と稱へてゐるもの、本寺草創の時、即ち弘安頃の建築で、昭和三年特別保護建造物に指定せられたものである。

建築は、方五間、重層、入母屋造、上層茅葺、下層板葺で、その細部は、鎌倉時代の純粹な唐様の手法に成つてゐる。内部は土間となり、内陣の奥に來迎柱を建て、須彌壇を設けて千體地藏尊を安置してゐる。建築の構造様式は、圓覺寺舍利殿と殆んど一致し、鎌倉期禪宗建築の代表的遺構とする。

東村山・山口方面

この地藏堂々内に、長さ三米に餘る大板碑がある。東村山村野口經文橋より發掘したもので、

〔貞和五年巳卯〕月八日 歸源 逆修

の文字と、その上に、大日の種子、蓮花文及び梵字の光明眞言とが刻まれてゐる。

寺門を出て、東北に桑畑の徑を行くと、六百五十米程で地藏寺に達することが出来るが、この徑は、なかなかわかり難い徑であるから、寧ろ本通りを驛前まで戻り、電車線路に沿ふ道を左に折れた方がよい。西武鐵道川越線の踏切りは切らず、小學校前をすぎ、貯水池行の西武鐵道村山線（單線）の踏切りを渡り、突當つて左折すると右側に地藏寺がある。（驛から北約五百五十米）

地藏寺

福壽山 臨濟宗大徳寺派 北多摩郡 東村山村 野口

國寶に指定された元弘三年（1333）の板碑で知られてゐる。板碑は本堂の内に安置せられてゐる。上部が破損してはゐるが、梵字の光明眞言でその下には次の如くに記されてゐる。

飽間齋藤三郎藤原盛貞生年六
於武州府中五月十五日令打死

勸進玖阿彌陀佛

元弘三季 癸酉五月十五日 敬白

同孫七家行廿三同死飽間孫三郎
定長卅五於相州村岡十八日討死

執筆遍阿彌陀佛

玖阿彌陀佛の「阿彌」の部分は石面が破損してゐる。飽間孫三郎の次の一字は諸書の讀方が一致して

ゐない。今暫く新編武藏風土記稿等に從つて「定」としておく。或は宗がよいかも知れぬ。

即ち義貞の鎌倉攻に際して戦死した新田方の飽間齋藤三士の供養塔で、太平記にも載つてゐない新田軍の行動の日時を證することの出来る、板碑としては珍しく史的價値を有するものである。

この板碑は最初寺の西北の將軍塚附近にあつたのであるが、後境内に運ばれ、更に本堂の内に移された。この眞偽についても議論があつたが、板碑としての形式にもまづ適ひ、姓氏の重記も他に例があり、他宗の僧が光明眞言を書く事もあるといふ理由などで、沼田頼輔氏の説が認められたのである。

鎌倉時代から室町時代にかけて、この地方の道は、入間から小手指原を過ぎ、狭山の東麓を経て府中に向つてゐた。それで上野や北部武藏から鎌倉を襲ふには必ずこの道を行かねばならなかつた。而して鎌倉の防禦線は武藏野の河筋であつた。即ち第一は入間川、第二は多摩川である。入間川・小手指原・人見原・府中の戦が何回もあつた所以はこれに外ならぬ。

元弘三年（1333）五月義貞が上野に興起して鎌倉街道を南下し、途上北條勢を破つた久米川古戰場は第一、第二の中間である久米川（地藏寺の北を流れる川）附近である。

寺門を出て西へ向ひ、すぐ橋を渡つて、道を右にとつて西北方に進み、又橋を渡つて、道が右折するところを眞直に小松林の間を登りつめると、路右の林中に義貞に附會した傳説の將軍塚がある。（この將軍塚は丁度東京・埼玉の境界線に當る）。古くから眺望のよいといはれてゐる八國山はこのつゞきの山である。北へ下つ

て田間の路を西行すると、やがて北方の丘麓に、王禪山佛眼寺といふ新義真言宗豊山派の寺院の屋根が見える。堂側と墓地とに板碑があり、その一に平信能・平能行の名のあるものは稍々注意すべきものであらう。上部が缺けて年號は實は定かでない。その側がこの上部であつたらこの上もないが、再考を要する。寺背に水天宮と八幡宮とがあるが、後者は義貞が武運を祈つた社といはれ(一名、鳩峯八幡)、矢張り義貞に附會した傳説の「冑かけ松」がある。

徳藏寺から將軍塚を過ぎて水天宮まで約千百米の道程。更に水天宮から荒幡富士を通つて村山貯水池にぬけるまで千二三百米。

水天宮の背後の小徑を西へ西へと行くと切通に出る。一度下つて又西へ上つて進むと、西北に異様な築山風のものが見える、これが荒幡の新富士、頂上から武藏野の眺望は遮る樹木がないだけによい。久米川の古戦場や古の鎌倉街道などを想像しつつ俯瞰するのも面白い。

新富士から一寸戻つて丘の嶺をどこまでも西行すると新しい自動車道に出る。村山の下の貯水池の北に當る。左手に貯水池の風光を賞でつゝこの新道を小半道行く。丁度貯水池が上下にわかれるところから西北約百米のところは山口の観音があり、貯水池のこの附近は大狹山公園で、武藏野鐵道支線の終點として村山公園驛がすぐ北にある。

山口観音

吾庵山金乘院眞光寺 新義真言宗豊山派 埼玉縣 入間郡 山口村 上山口
本尊は行基の作と傳へられた千手観音。弘法大師草創の靈場と稱せられて參詣の客が多い。詳しい縁

起は江戸名所圖會にある。今も元弘三年五月十五日附新田義貞の願文といふものを藏してゐる。

観音の表參道に出る。武藏野鐵道の線路を右にし、左手に新山口貯水池の堰堤を眺めながら、この參道を五百米程行くと所澤街道と出會ふ。街道を所澤の方向(即ち參道を右折する)に進むと三百數十米で郷社中氷川神社に達する。街道を所澤とは反對の方向に進んだところは、今度新貯水池の敷地に編入せられた土地、山口村勝樂寺の方面である。勝樂寺の、敷地に指定せられた部分に、寺院勝樂寺、郷社七社神社があつたが、兩寺社とも、勝樂寺は昭和五年山口村山口に移轉(後項記載)、七社權現は昭和四年前記中氷川神社に合祀せられた。

中氷川神社

郷社 入間郡 山口村 大字山口 舊中氷川鎮座

中氷川神社は延喜式内の社。武州三氷川の中氷川である。即ち他の二氷川とは、官幣大社大宮氷川神社、奥多摩の氷川神社がそれである。この中氷川神社創祀の年月は詳でないが、國造が府中に在つて武藏の國政を執つてゐた關係から、この狹山丘陵の淨地に奉祀したのではないかと見られる。以下、中氷川神社司山口文治氏の説に従ふところが多い。

鎌倉時代に山口領の廣さは入間多摩郡、九十二箇村に及び、當時この社は山口領の總社として重きをなした。當時の舊社殿は正平年中(1346—60)に兵燹に罹つてゐる。即ち、信越に兵を擧げ給ふた宗良親王と相應じて山口氏にも興起の企があつたが、事前に企が鎌倉に聞え、押し寄せた鎌倉勢のために山口氏は滅ばされ、中氷

川の社も炎上した。その後、足利の中期に又立派な社殿が營まれたが、その末期に再度の炎上があり、下つて元祿二年（1689）出雲松江の人松田吉兵衛を統領として、本殿が再建されたが、その造りは大社づくりをくづしたもので、それが現在に及んでゐる。昭和四年七社神社を合祀した結果、社殿全部を改築することとなり、その構造は總べて大社づくりの模してゐるので、關東では非常に珍らしい結構を示してゐる。尙、注目に價することは、境内に奈良朝末期と推定される布目瓦の焼き跡のあることであらう。尙ほまた、風がはりな寶物殿の建物があり、寶物として、有栖川熾仁親王の御親筆をはじめ、豊臣秀吉の禁制一通、月山定一・同定勝の刀、その他、山口村の各地より發掘せられた土器・石器・布目瓦の類を藏してゐる。七社神社は、山口村勝樂寺にあつたもの。創立の年代は未詳であるが、雄略天皇乃至敏達天皇の頃朝鮮の歸化人が多く勝樂寺地方に住し、七社神社は古の國謂地祇の神社であらうとの説がある。しかし現今明かになつてゐるところでは、山王七社（近江の日吉山王）の分祀なりといふ。この社は佛藏院勝樂寺が代々その別當に當つてゐたものである。

尙、山口村をとり圍む三條の山脈には、數多の古墳が點在し、現に數へられてゐるもので七十八基に及んでゐる。その大なるものは周圍四十八米餘、高さ三米弱、場所によつて集團してゐるものは、三基乃至二十基に及び、その發掘は未だ一切なされてゐない。しかも、この古墳は、大字勝樂寺の方面には殆んど皆無であり、その多くが大字山口、上山口の方面にあるのは、注目すべきことではなからうか。
中氷川神社とは、街道の反對側一帯は、山口城址である。

山口城址 山口村 山口

この山口城は、昔の館跡と見られ、幾變遷の後城址となつたものらしい。鎌倉時代、村山黨の一族、山口家繼によつて創められ、その後城下の繁榮を見たが、前記の如く、正平中、山口高治の勤王の催は失敗に終り、山口氏の滅亡を見たといふ。城の遺跡は、こゝかしこに土壘、濠、池或ひは、城内の天神・金刀比羅の小祠として、残つてゐる。

街道を西所澤に向つて東へ行く。約三四百米行くと、道の左に來迎寺・勝光寺の二寺院がある。來迎寺は藤原秀衡の守本尊であつたと傳へる。「車還し」三尊彌陀佛を本尊としてゐる。又來迎寺の境内には建長年間の板碑がある。勝光寺から約百米で道の右に下山口驛があり、更に五百五十米程のところ、左側に、移轉した勝樂寺がある。

勝樂寺

王辰爾山佛藏院 新義眞言宗豊山派 入間郡 山口村 山口 岩崎

勝樂寺即ち王辰爾大坊である。寺傳緣起によれば、王仁の五世の孫に當る王辰爾の子孫が辰爾の菩提をとむらうため建立したものと傳へる。さきにも一言した通り、先年まで勝樂寺・七社神社の残つてゐた、勝樂寺といふ土地は朝鮮の歸化人が多數住居したところである。その事は現在の字名によつても覗かれる。そして敏達朝から始まつて天喜治暦の頃に及ぶまで、勝樂寺が繁榮を極めてゐたことは、當時、この地の寺院の數が三十六に及んでゐたことによつて知ることが出来るといふ。それらの寺院のうちの總寺であつたところから大坊の名が出た

のではあるまいか。大坊を中心に坊の出来たといふことは、現今、大坊の向した向坊（リキボウ）大坊の東に東坊などのあることによつて覗かれる。鎌倉時代に入つても、大坊は代々鎌倉の祈願所であつたが、文永年間執權を呪詛した祈願を七社権現になしたことが鎌倉に聞こえて、神社も寺院も悉く焼き拂はれた。寺院の境内も文永三年の板碑があり、この役に殉じた人々をとむらつたものである。他に、境内に開山塔といふ五輪塔がある。

なほまた、今の過去帳は天正以後のものらしく、現在の宗旨は眞言であるが、その時天台より改宗したものと見られてゐる。改宗は、戦國以後にこの土地を支配した粕谷氏の宗旨に従つて行はれたものか、或ひは、徳川時代に入つてから、住職の任意に改宗が行はれたものか、孰れにもせよ、眞言となる以前には天台であつたことは事實なりと見られてゐる。寺寶として牛玉の版を傳へる。

街道を東へ更に五百十米程行くと左手に瑞岩寺がある。瑞岩寺は山口城主山口氏の菩提寺で、その墓がある瑞岩寺から更に七百六十米程で西所澤に達する。西所澤驛から青梅行の乗合で七分、歩いて千二三百米のところ（北野神社の前に着く）北野神社は丁度中氷川神社の略々眞北に當る。中氷川神社の北の丘を越えてここへ來ることが出来る。）

北野神社 縣社 小手指村 北野

祭神 櫛玉饒速日命 八千矛命 相殿 菅原道眞 合祀 天穗日命 加屋野姫命 出雲祝神
小手指明神 應神天皇 日本武尊

式内物部天神社は是であらうといふ。社傳に依れば、日本武尊御東征の際、物部天神・國淵地祇二社と祀られ、欽明天皇の時小手指明神・日本武尊を合祀し、更に一條天皇長徳元年（805）菅公五世の孫武藏國守菅原修成が勅許を得て北野天満宮を勧請し、代々武將の信仰篤く、江戸時代の御朱印は五十石であつた。

この神社についても新編武藏風土記稿・武藏野話・江戸名所圖會などに詳しく載つてゐるが、その古文書類は今も猶古くからの神職栗原氏によつて保管されてゐる。併し、末社の數は大いに減つて、諸神宮・文子天神・石宮・八雲稻荷等の諸社が残つてゐる。

神社の北方が小手指原古戰場、白旗塚・誓詞ヶ橋などといふ傳説地がある。

小手指原古戰場 小手指村

第一回は元弘三年（1333）五月、義貞が北條方の櫻田貞國・長崎高重等の勢に衝突した戦で、ついで久米川の戦となつた。第二回は建武二年（1335）七月、北條の餘類時行が足利の軍を女影・小手指原・府中原で破つた。第三回は正平七年（1335）閏二月、宗良親王・新田義宗の一軍が尊氏に敗れた戦である。

なほ東村山貯水池は東京府北多摩郡村山村・大和村・東村山村にあり。天然の地形を利用して上下に各堰堤を築き二個の大貯水池を設けたもので、大正五年（1916）工を起し、經費八百餘萬圓を投じて大正十五年に竣工した。

満水有効容積は 上貯水池約 三百六十一萬立方米

下貯水池約 一千三十六萬立方米

満水面積 約 一萬四千アール

その全長 四軒 周圍 十二軒

水源は多摩川で、羽村の取入口から分岐し、一旦この貯水池に源き、更に毎秒五十乃至五十六立方米を境浄水場に送り、後東京市内に供給する。貯水池附近は眺望にとみ、上下貯水池の間には、落差十三米五を利用して一大噴水がある。村山貯水池の西北方に現在更に山口新貯水池が建設せられてゐる。新貯水池は、面積に於て舊貯水池の約一・五倍に當る。

右記の道順を全く逆にすることも可能である。

〔費用 約一圓三十錢、高田馬場・村山貯水池前・西所澤・池袋間五十五錢、西所澤・北野神社間乗合自動車片道十錢〕（長澤・増訂者幾志）

参考

藤田明氏 久米川古戦場と元弘の板碑（歴史地理八ノ七）

沼田頼輔氏武藏東村山村元弘板碑考（歴史地理二二ノ二）

同 氏 東村山村元弘三年板碑考（考古學雜誌一〇ノ一二）

110 野火止附近

柳瀬の城址 平林寺

東武鐵道東上線志木驛で下車。西南方大和田の町に出で、川越街道を少し下つて、柳瀬川を渡つた所で、西南坂の下を経て城に行く。

柳瀬の城址 埼玉縣 入間郡 柳瀬村 城

城は柳瀬川流域の窪地帯に臨む高さ三十七米位の臺地の一端に設けられ、内郭は南方にあり、三方崖で大體正方形に近く外郭はその北方を圍つてゐる。内郭は四方に土居あり、穴堀を以て外郭と界し、外郭も亦壘壕の備がある。今内郭は八幡神社の境内に、外郭は畑と林となつて居る。

この城の沿革は明瞭でないが大石信濃守或は、北條氏照の一屬城であつたと云ふ。

城を下つて再び柳瀬川を渡つて東南方へ行けば平林寺はこの附近で最大の寺院で大きな森の中にあるから容易に判る。

平林寺 金鳳山 臨濟宗派 北足立郡 大和田町 野火止

大門は總門から千數百米も離れた川越街道にあり、「金鳳山平林禪寺」とある昔ながらの石標が立つてゐる。江戸名所圖會の挿畫の通りに、總門・山門・佛殿・中門・本堂・客殿と立並び、その北に庫裡がある

野火止附近

が慶應三年の回祿の後、多少縮小されて、塔中・聚寮等は全くなく、經藏の位置も山門に近くなつてゐる。鐘樓は舊位置にある。山門の向つて左には戴溪堂や半僧坊があり、前者には明の獨立禪師の木像と遺物とを藏め、後者は明治四十年の建立である。總門・山門等の額は石川丈山の筆である。

この寺は天授元年(1375)の草創と傳へ、石室善玖が開山、當時は岩槻在の平林寺村にあつたが、天正年間兵燹に罹り、その後荒廢してゐたので寛文三年(1663)川越城主松平甲斐守輝綱がこの地に移したと云ふ。舊寺領五十石松平家の菩提所であつた。新編武藏風土記稿に載つてゐる古文書もやけて今はない。

本堂に向つて左の石疊の道の左方に増田長盛の墓があり、墓碑面には「増田右衛門尉長盛之墓、元和元乙卯年五月二十七日」とあるが、後にこの墓石を建てたものらしい。なほ燈籠の盡いた處に松平伊豆守信綱以下の墓がある。

境内は老樹が鬱蒼として靜寂、且梅櫻紅葉の景物の多い上に、一條の清い用水が庭園の背から流込み築山を落ち、庭を貫き、書院の下を潜り、庫裡を抜け、浴室を通つて門を出で、櫻並木に沿うて川越街道へと流れて行く。古人が「朝な夕な心身の穢惡の垢迄も清めすゞらんと思はる」(遊歷雜記初編上)と云つた昔と變はらない。これは現在耕地の状態からでもわかる様に、古來この地が武藏野の中心で水に乏しい處であつたから、信綱が承應年間に家臣安松金右衛門に命じて、はるく多摩郡小川村から多摩川の水を引いて來た野火止用水の分流である。用水は今も住民に多大の便宜を與へてゐる。

平林寺の背後は傾斜をなし、登つて行くと左に九十九塚、更に行くとも松林の中に業平塚がある。

歸路は東武鐵道東上線志木驛に出るのが最も近い。また時間があれば南行して片山村法臺寺に新編武藏風土記稿所載の板碑を尋ねたり、満行寺に野寺の址を訪ねたりして武藏野鐵道保谷驛から歸るのもよからう。

〔費用 約八十錢〕(長澤・増訂者林)

一一川 越

東照宮 喜多院 三芳野神社 川越城址 氷川神社 養壽院 蓮馨寺

東武鐵道東上線（池袋驛發）川越西町驛（池袋より五十分弱、賃金六十一錢）下車、驛前を東に眞直に通町通へ出て、左に曲り工業學校の少し先を右に折れると、突當りの森が中院の境内で、その左手のこんもりとした森の中に喜多院と東照宮とがある。中院の堂側を通りぬけ、突當つて左へ曲ると東照宮の前になる。東照宮の石段の前から溝を越して北方喜多院の境内へ抜けられる。

東照宮 川越市 小仙波町

祭神 徳川家康

中院と喜多院の間の森に囲まれた小高い所にあつて規模はさして大きくないが相當に手のこんだ建物と物靜かな老樹にかこまれて落着いた気分を出してゐる。拜殿に岩佐又兵衛筆三十六歌仙の額（國寶）がある。元社領二百石、久能山から日光へ改葬の途中、棺を數日喜多院に返めて法要を行つたので、寛永十年（1633）境内に起工したものである。

喜多院 星野山無量壽寺 天台宗 川越市 小仙波町

境内は茶店等あり相當俗化してゐるが、後庭は稍々幽邃と云へよう。當市最大の寺院で、本堂庫裡客

殿經藏開山堂など備つて、客殿には徳川三代將軍家光誕生の間といふのがあり、開山堂には天海僧正の像が安置されてゐる。狩野吉信筆職人繪畫屏風・橋友成作太刀（徳川家光寄附）正安二年三月の銘ある鐘の三點の國寶の外什器物も多い。縁起に據れば開山慈覺大師永仁中尊海僧正の再興、天正末年慈眼大師天海が來住するに及んで大いに興り、その關係で江戸時代には寺領五百石を有し、甚だ榮えた。境内の凹凸は古墳群であると見られる。開山堂も之を利用したものであるといふ人がある。

喜多院を北へ出て、數町うねくと行くと中學校がある。中學校の手前から右に入ると左手に御嶽山がある。その次の一郭に三芳野神社がある。

三芳野神社 縣社 川越市 郭町

祭神 素戔鳴命 稻田姫命 合祀菅原道眞

元三芳野天神社といつた。武藏一の宮大宮の氷川神社を勸請したものといふ。天神社といつたので後に菅公を合祀したものらしく境内に梅樹が稍々多いのもこの爲である。

中學校から三芳野神社へかけて一帯の地が川越城址である。

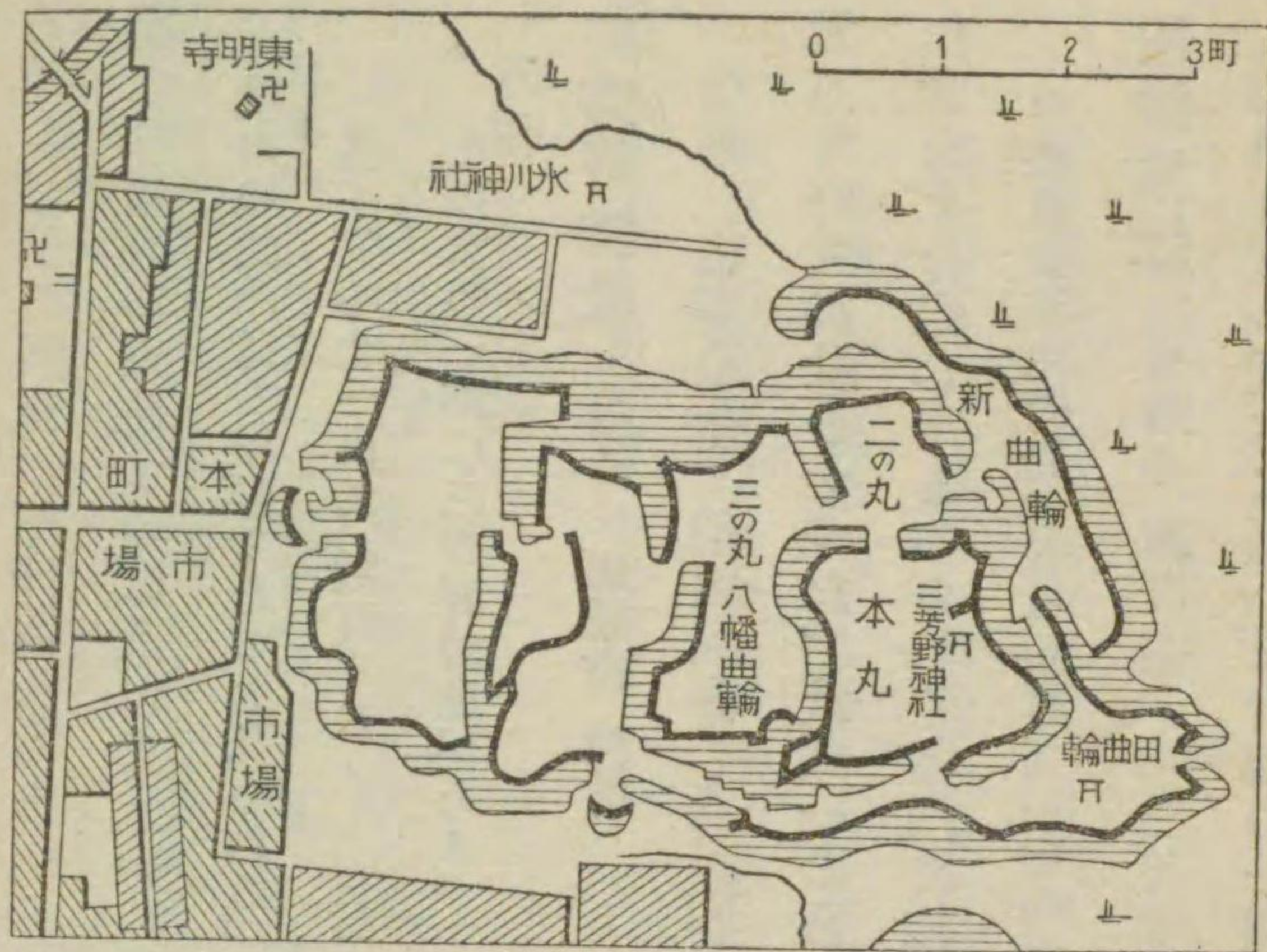
川越城址 川越市 郭町

入間川流域の低地に面した台地の一端に位し、江戸時代の規模は東西約五百米、南北約四百米、台地につゞいた西方を正面とし、東北の低地に對した方を背面としてゐる。本丸・二丸・三丸外曲輪・田曲

輪等七郭から成り、東端の二郭が徳川氏入國以後の増築であることは附近の小城塞が廢滅して統一的

傾向の著しくなつて來た時期に於る増築の一例として注意すべきものである。石に乏しい地方であるから石垣はないが、土居・堀等の構造は相當に大規模のものである。今は大部分破壊された。

城は長祿元年(1457)扇谷上杉氏の臣太田氏(道灌父子)の築く所である。康正元年(1455)鎌倉府亡び、成氏は出奔して下總古河に據り、關東諸地分裂割據の形成に移らうとした時成氏の古河城及び之に與する關東東部の諸氏に對抗して、上杉氏が江戸、岩槻等と殆んど同時に修築したもので、關東の中世末期近世初期に於て最も注目すべき城である。其後引つゞき扇谷上杉氏の本據として武藏乃至關東西部の中心地となり、上杉氏の失脚後北條



川越城舊狀圖

氏に屬してからも一要地であつた。終始江戸とは密接な關係にあつて、江戸時代に於ても幕府の要路に立つ重要な大名が之に封ぜられた。

川越は地形上から見ても武藏中部の最も開け易い地方で、しかも交通の要衝に當るので、古くから開けてゐた。らしく、城と町とのある丘陵にも古墳と認められるものが澤山残つてゐる。中世の初期には江戸、豊島等と同族の秩父平氏の一族河越氏がこの地に居り、この附近では重要な河越庄が成立した。尤もその頃の中心地は今町の町から三十町も西の上戸邊であつたらしい。室町時代の中頃、上杉氏がこの附近に據るに及んで、要害ではあり交通上でも重要な現在の地點に本據を構へ、遂に川越城が出来た。これが地方の形勢により、度々の争奪によつて轉々したとはいへ、常に武藏乃至關東に重きをなすものゝ所有の地であつた爲、遂に城下町を形成して江戸時代に入り、こゝに城下町として愈々發展して今日に及んだものである。従つてこの城の争奪領有に關する沿革も相當注意すべきものである。最初扇谷上杉氏に屬し、兩上杉が争ふに及んで永正二年(1505)山内顯定の圍む所となり、扇谷朝良江戸に退いて和し、その後朝興が大永四年(1524)北條氏に江戸城を逐はれてこゝに戻り、天文六年(1537)北條氏の略取する所となり、その後上杉氏はこれが回復を企てたが成らず、天正十八年(1590)迄北條氏麾下の城として福島・大道寺兩氏等が住した、天正十八年以降徳川氏幕下の諸將が此處に封ぜられて明治に及んだのである。江戸時代の此處の諸侯の祿高は大抵六七萬石乃至十萬石位であつた。城内の三芳野神社(前掲)を裏へ出て、城の要部を西北に過つて城外に出ると、上尾に至る通がある。これを西進すれば、右側に氷川神社がある。

氷川神社 郷社 川越市宮下町

祭神 素戔鳴尊 配祀 櫛名田姫命 足名稚命 手名稚命

この社は川越總鎮守と號する。川越の城と町とのある台地の北端に位し、北方を望めば眼前に展開した入間川の流域の低地、一帯の水田如何にも「河肥」の土地の肥かさと、濕地で圍まれたこの台地の要害さが、この城とこの町とを此處に生んだ理由を肯かしむる。

社前を西へ行き突當ると、西北松山方面へ通する大通がある。即ち此附近が江戸時代には城下の北の出口、臺地から低地へ下る要地に位してゐたが、戰國時代に於ても要路に當り、天文十五年(1546)の戰に難波田彈正は東明寺口の井戸に落ちたといひ、その稻荷山稱名院東明寺(時宗)はこの角の東北に在る。

東明寺前から南へ真直に通する大通は喜多町・南町・鍛冶町通で、城下町の起源をなした市の立つた所である。このあたりにも當世風の商店が年々増加して來た。十字路から少し南の西側に養壽院がある。この附近には寺が多い。

養壽院 青龍山 曹洞宗 川越市南町

本尊 寶冠釋迦如來

寛元十一年(1246)河肥遠江守平朝臣經重が開基となり、天文四年(1535)扇叟守慶禪師の襲續により禪院へ轉宗し、かくて同禪師は禪院開山第一祖となつた。本堂に文應元年十一月二十二日在銘の古鐘がある。鑄師は丹治久友・大江眞重(鎌倉大佛の鑄造者)の二名工である。本堂の西南に河肥太郎重頼の墓といふ標がある。

南して志義町に突當つて少し左へよけて又南下すると右側に入り込んで蓮馨寺がある。

蓮馨寺 孤峯山寶池院 淨土宗 川越市連雀町

江戸時代に數度回祿の災に罹つたが、明治中葉に更に灰燼に歸する迄はなほかなりの構であつたらしい。今でもそこの寺よりは大きい何となく趣がない。關東十八檀林第十六番、開山は感譽存貞川越城主大道寺氏の草創と傳へる。悉しい事は舊記が焼けて判らない。

寺前を數町南下し、右折して西武鐵道川越驛から所澤經由で歸京しても、又は西南高等女學校の東南を経て東上線川越驛へ出てよい。賃金は高田の馬場迄、池袋迄、各々六十一錢であるが、前者は約二十分多くかかる。(長澤・鳥羽・増訂者枋内)

〔費用 約一圓三十錢〕

參考

川越は此地方の中心である城下町であつた爲に特に此地中心の地誌類が少くない。其中有名なものを二三舉げておく。

關修齡氏(故人) 「武藏國」三芳野名所舊蹟一卷(寫本)

著者未詳川越素麵一卷(寫本、大正六年川越圖書館刊川越叢書本)

中島孝昌氏 「武藏」三芳野名勝圖會三卷(寫本、大正六年川越圖書館刊川越叢書本)

著書未詳、川越年代記一卷(寫本、大正五年川越圖書館刊川越叢書本)

同 三芳野砂子一卷(寫本大正五年川越圖書館刊川越年代記合刻本)

同 仙波川越由來見聞記一卷(寫本)

松本瑞源、河越城記一卷(寫本)

一寸まとまつたものとして「武藏野」の川越號(大正十年九月、附圖添附)がある。

一一一 大宮と岩槻

氷川神社 潮田城址 彌勒寺 岩槻城址

東北本線大宮驛で降りて、驛前の路を東へ行き突當つて左に曲る。この廣い道は即ち中山道である。行くこと二三百米右に氷川神社の石標がある。こゝを右折して進めばやがて鳥居の前に達する。驛から約千二三百米、大宮から岩槻への街道筋に當つて居る。(大宮驛から氷川行のバスもある。)

氷川神社 官幣大社 埼玉縣 北足立郡 大宮町 高鼻

武藏一ノ宮

祭神 素戔鳴尊 稻田姫命 大己貴命

大鳥居の前に立てば南に一條の美しい並木道が走つて居る。鬱蒼たる並木は延々二千米、中山道に達して居る、即ち神社の參詣路である。三ノ鳥居をくゞつて行けば、池に架けた神橋を渡つて正面に本殿がある。建物はさまざま古くはないが、大きな杉木立や境内の静寂さは人をして坐るに莊嚴の感を起し、往年を偲ばせる。大鳥居から神橋まで左右に茶店が多く、四時の遊覽客參詣人の多いのを思はせる。路傍に何町と記した石標の立つてゐるのは並木道の端からの距離である。社の東方、池畔一帯約十五萬平方米の地は、明治十七年來、所謂大宮公園の名で知られ、櫻によく、又梅によい、又町の名、

大宮と岩槻

大宮もこの社があるから起つたのである。

この社の創建については古來色々な説があるが、此社に「孝明帝の御代勅願として出雲國簸の川上に鎮座せる杵築の大社をうつし祀りし故氷川神社の神號を賜れり」とある（武藏風土記に「足立郡氷川神社鎮田百束十字田四圍觀松彦香殖稻天皇御宇三年戊辰所祭素戔嗚尊大己貴命稻田比咩合三座也」とあるのはこれである。しかし日本書紀に「天穗日命此出雲臣武藏國造土師連等遠祖也」とあつて、武藏の國造と出雲の國造とは同族であり、又天穗日命が出雲大社に仕へ、其に孫の出雲國造が後世までも大社に仕へた事などから考へて、武藏國造がやはり出雲の神を崇めて祖先の神を祭つたものであらう。ともかく武藏屈指の古社であつて一の尊崇を集めて居た事は色々のことで分る。社記にも崇神天皇の御代當社を大社に定め、武淳川別命を勅使として官幣を賜り、又日本武尊が御東征の時こゝに祈願して夷敵が平定したので益々尊崇せられた事等がある。天平神護二年（766）七月に神封三戸寄進せられた事以下神階の事等屢々三代實祿等に見えてゐる。鎌倉時代には治承四年（1130）源頼朝の祈願によつて土肥實平をして社頭を再建させ社領三千貫をよせたと云ふ。

戰國時代にも小田原の北條氏その他から相當の保護を受け、徳川氏關東入國後は先規に依て社領百石を加増して合計三百石となつた（今新編武藏風土記稿によつて其配分を見ると百廿五石社頭修膳料、七十五石神主三人、百石社僧五ヶ寺、一觀音寺・常樂院・大聖院・寶積院・愛染院）。明治元年明治天皇が御東幸になつて、祭政一致の御思召で、當社は武藏の鎮守であると云ふ所から勅祭の社と定められて行幸御親祭あらせられた。祭神に就ては前に示した様に素戔嗚尊を主神として大己貴命・稻田姫を配祀してゐるが、この祭神の事について

元祿の頃神主間に争が起つた。今は社は一社であるが、當時は男體・女體・簸王子の三宮に分れて居り、岩井及び角井兩家の三家が各これに奉仕して居た。此の三家で各社の輕重を争つたのである。

男體社 祭神 素戔嗚尊 相殿 伊弉諾尊・日本武尊

神主岩井伊豫

女體社 祭神 奇稻田姫命 相殿 天照大神・伊弉册尊・三穗津姫橋姫命

神主角井駿河

簸王子社 祭神 大己貴命又は軻遇突智命

神主角井監物

三宮あつた故に一に三宮火河大明神と稱した。この争は、杵築の大社をうつして氷川の社號を賜つたのであるから、主な祭神は大己貴命で、素戔嗚尊及奇稻田姫命は父母の神が配祀せられたので、いはゞ攝末社の格であると云ふものと、素戔嗚尊が本體であつて、簸王子は火の御子即ち軻遇突智命であるから、簸王子社と女體社とは攝社であると云ふ二論の争であつたが結局公訴となり、元祿十二年（1699）寺社奉行の戸田能登守・永井伊賀守・井上大和守等が裁判の結果、明證がないので何れとも決し兼ね、社は三社同格とし、神主の次第は家督の新古で定めることとして落着した。この種の問題は縁起作成の流行した鎌倉時代あたりからよく起つた問題で、又一方かくして縁起が作られたのである。彼の伊勢でも内宮に對して外宮の地位を上げようとする企もあつた様だが、こゝでも前述の大己貴命勅願勸請説や、氷川神社號下賜説はこの類かも知れぬとも云ふ。維新前本地堂は池の北にあつて觀音を本尊とし、新義真言宗江戸護持院末の前記五院の社僧が之に奉仕して居た（江戸名所圖會）。攝末社の重なるものは宗僧社・五山祇社等であつた。祭日は官國幣社一覽によると八月一日であるが、昔は十二月十日であつた。

一ノ宮とはその一國中の第一位の神社と云ふ意味で、その起原は平安朝末期に國司奉幣の際の順序によつて出來たものといはれてゐるが、それ等の社には延喜式の大社が多い所から考へても、單に以上の如き理由ではあるまい。大體式の社格や奉幣の順序や一般の崇敬等の種々の條件の下に、神社に等級をつける様なことの行はれた平安朝時代に自然に出來上り、これがやがて公の制度となつたものであらう。従て國中の神社の代表的な位置にたち非常に上下の崇敬優遇をうけ、武家時代になつては一層この様になつたのである。

大宮公園は遊園地等の設備があつて好箇の遠足地。園中往々土器・石器を發見する。氷川神社の池畔から東して北すれば道の左が潮田城址である。又傳説地として附近の一名所黒塚も神社の東四百米許りにある。

潮田城址 大宮町 壽能

城址として何も遺つては居らぬ。唯極めて深い叢の中に潮田出羽守資忠の墓がある。城はその周圍四、五百米四方の岡の上にあつて、東西南北は沼に向つてゐたので、當時可成要害が良かつたらしい。小豪族村落住居の遺風と軍事上の必要からこの種の小城塞が當時猶存在した一例である。

岩槻城主太田三樂齋資正の第四子で母姓を嗣いだ潮田出羽守資忠が北條氏に屬し、天正の頃(1573—)ハハに住した。潮田氏は大宮・木崎・浦和の地方一帯を領してゐたが、秀吉の小田原征伐に亡びたのである。

大宮から岩槻までは、總武鐵道(電車)がある。又氷川神社三ノ鳥居前又は大宮停留場前から乗合自動車の便もある。これによつて東に向つて驅れば約三十分で岩槻町に達する。町の略々中央で大宮から岩槻に至る街道から右に入り、約百米すれば彌勒寺に達する。

彌勒寺

光岩山釋迦院 眞言宗 南埼玉郡 岩槻町 岩槻 市宿

寺としては別に注意することもないが、その所藏の鐘が問題なのである。その鐘は、高さ約一米直徑〇米四五程の比較的小さなもので、今本堂の天井に懸つてゐる。その鐘銘に「南閻浮提大日本國關東道」武州埼玉郡簗輪郷岩付」光岩山釋迦院彌勒寺」願主法印宗典時代鑄之」施主北條相模守平朝臣重時」爲善根寄進目慈功力此鐘「一度撞則出離三界之苦成就正覺」維時寛元四年^{丙午}夷則上澣」鎌倉御鑄物師」椎名伊豫守藤原吉次(下略)」とある。この銘が問題の元になるのである。

この銘に従へばこの鐘は明かに北條重時の寄進したもので、即ち鎌倉時代のものであつて、國寶ともなるべきものであるが、その眞偽については斯界に問題となつて色々研究論難され、結局沼田頼輔・喜田貞吉・關係之助等諸氏の研究により不可とせられたもので、一時は何れに決するか興味あることであつた。今は兎も角問題であつた鐘としてこゝに擧げておく、因に考古學雜誌(二ノ一二)にこの鐘について沼田頼輔氏の論文がある。その要領を一寸記すことにする。

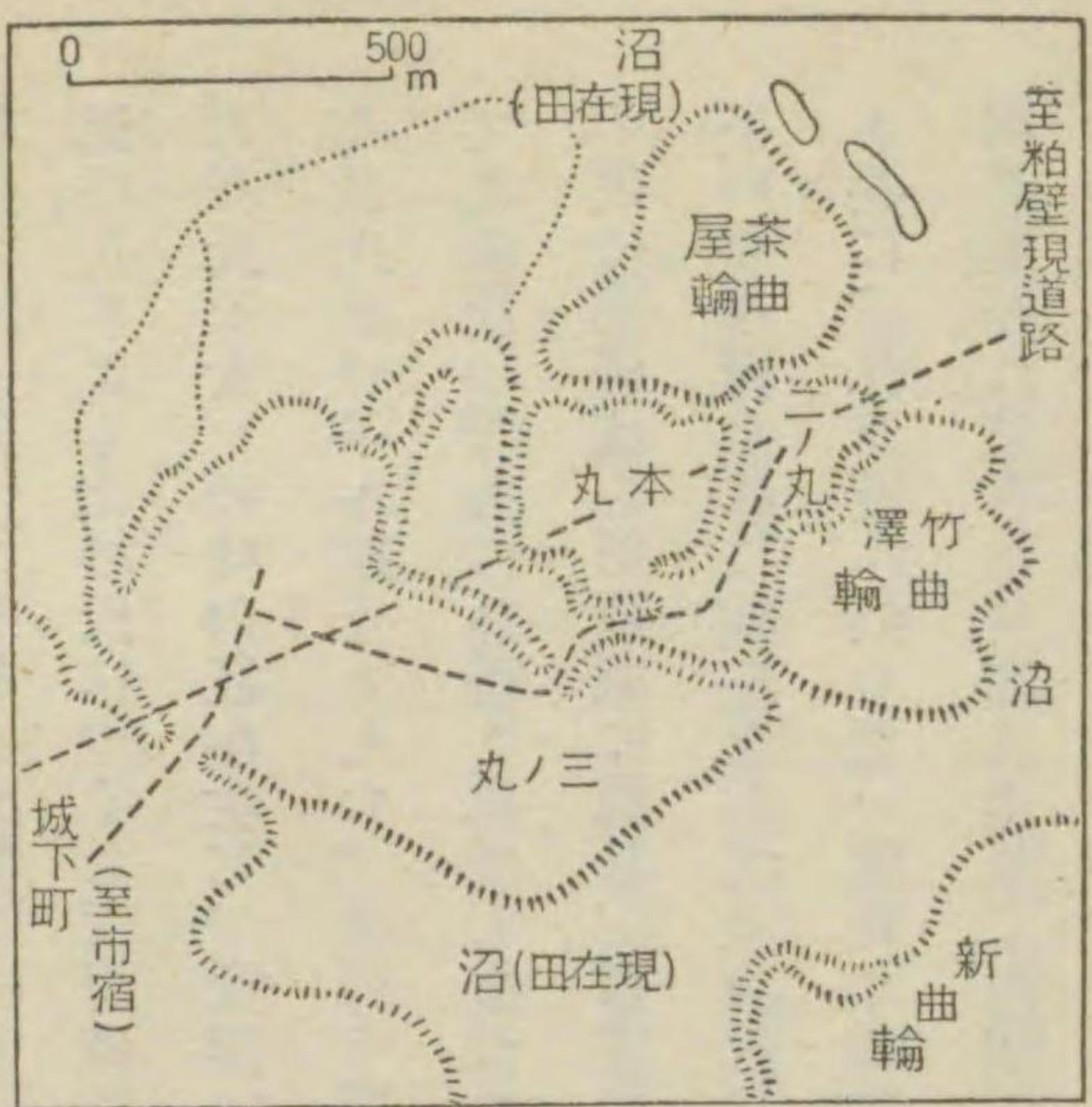
「この銘には疑點が多いが、先づ年號と干支の書方がいけない。鎌倉時代のものならば普通干支が寛元四年(1154)の下に來なければならぬのに、これは四と年との間に挿んである。次に鐘銘などに御鑄物師と御の字を冠らすこと、施主の字をかゝる時に用ひること、官職の上に苗字を冠らすこと等は當時に例のないことである。又鑄物師や鍛冶で國守の受領を有することは南北朝以前にはない。又當時の武藏邊の鑄物師には、椎名伊豫守と稱するものはなく、かへつて椎名伊豫吉次の名は寛永頃に見える。」

彌勒寺から岩槻城址に至る町並は、昔の市宿で、その一直線なこと、比較的道幅の広いことなど注意すべきである。こゝは江戸時代には日光道中五筋の中の一筋にあたり、人馬の繼立をする宿驛であるとともに、市場でもあつた。軍事的意義の濃厚な城下の宿に、戦國時代から市が立てられて發展したもので、城に附屬して成生した近世都市のよい例である。今も可成の町ではあるが、城下町の面影は殆ど残つて居らぬ。

岩槻城址 岩槻町 岩槻 太田

城は元荒川に沿うた低濕地に臨んで、小高い平地に設けられて居る。三方は沼(今は水田)で圍まれ西南の一方のみが僅かに同じ高さの平地に續いて居る。こゝを堀で絶縁し、門を設けて大手とし、續きの平地に城下町を置いた。石垣を用ひず、自然の地形に従つて居るので、郭の形や配置はあまり規則正しい方ではないが、本丸を中心に東北に茶屋曲輪、その外に天神曲輪、東に二ノ丸・竹澤曲輪、西に細長い一郭を隔て、三ノ丸がある。又三ノ丸の東南に沼を隔て、新曲輪がある。猶又此等の諸郭と城下町とを圍んで更に周圍八軒に互る惣構の土居をめぐらしてあつた。江戸時代には本丸・二ノ丸は穴地竹藪となし、三ノ丸に藩主の館と重臣の邸宅とがあつて、此等に七つの城門と二つの櫓とがあつた。また惣構には五つの門があつた。維新後各所の土居を崩して堀を埋めたので、元來不規則な繩張は彌々變な形になり、林藪と民家とがこの間に散在し、新道も出來て、甚しく要領を得難いものになつた。

今大宮から岩槻を経て粕壁に至る縣道は城の要部を貫いて居る。この道によつて町を出ると、間もなく水田になつてゐる堀跡と高さ三米七程の土居とを過る。この中が三ノ丸で今大部分畑になつて居る。



岩槻城主要部舊狀圖

直ぐ右側に西南に向つて入る道があるが、この道を少し行くと土居を過り、土橋になつてゐる所へ出る。こゝが大口の跡である。この土橋の東には堀が少し續いて先は廣い田になつて居るが、この田はもと沼で堀に代用されて居たのである。こゝから引返して、さきの粕壁に至る街道へ出これを東して堀跡を二度過ると、その邊が本丸跡である。圖と比較しつゝこの邊の南部を巡れば、大體二ノ丸・竹澤曲輪等の圓狀を髣髴とせしめることが出来る。

粕壁に至る縣道を更に東し、元荒川橋の裾から荒川の堤の上を南すること二百米許で巨松老杉などある高地に至る。今岩槻公園となつて居るが、こゝが新曲輪といふ出丸の址である。東は川、北西はもと沼であつた。西南の側には大規模な土居と堀とがある。

この城の邊はもと澁江の郷といつた。武藏七黨の一で、平忠常の子なる千葉胤宗の子基宗から出た野與黨の一族がこゝに土著し、澁江氏と稱して居た。その後何時か同氏は領地を失つたらしい。

城は長祿元年太田道灌が築いたもので、上杉氏が江戸・川越等と連絡して古河公方成氏に對抗する爲に設けたのは今更云ふまでもないことである。その後天正十八年(1590)に小田原北條氏が滅亡して徳川氏が關東に入るまで太田氏累代の居城であつた。美濃守資頼の時、家人澁江三郎が北條氏綱に内應した爲め、大永五年(1525)二月落成し、資頼は石戸城へ退いたが、享祿四年これを奪還し、天文二年(1553)に子の信濃守資時に譲り、資時間もなく死して資頼の弟資正が嗣いだ。當時江戸・川越を初として南武藏の諸城相次で北條氏に屬したが、資正ひとりよく上杉氏につくして岩槻のみは北條氏に屬さなかつた。然るにその子大膳亮氏資(後資房母は瀧山大石氏の女)の時内訌を生じ、資房に黨するものが北條氏に通じて、その女を娶り、次で其死後子なきを以て北條氏政の子を嗣子とした。太田十郎氏房がそれで、瀧山の太石氏、鉢形の藤田氏と同じく、繼嗣關係に依つて北條氏の勢力に合併されてしまつた。従つて天正十八年北條氏の滅亡とともにこの家は亡んだのである。この役に氏房は小田原城に籠り、留守の家臣伊達・妹尾等よく豊臣軍に抵抗したが、衆寡敵せずして遂に降り、寄手の將淺野長政に城を渡して太田氏はこの城と離れてしまつた。道灌以來百三十餘年、江戸時代には、川越城と共に、江戸城に最も近い重要な城であつたから、小祿の譜代大名が置かれ、且屢々替つた。天正十八年から明治廢藩に至る迄、高力・青山・阿部・板倉・戸田・松平・小笠原・永井・大岡の諸氏が交々こゝに封ぜられてゐた。

太田氏

資康(江戸太田氏祖)

資清—資長(持資道灌)—資家—資頼—資正—資房—氏房

岩槻から粕壁まで四軒餘、乗合自動車及び西武電鐵の便がある。粕壁は江戸時代の奥州路の一驛で、東京の吾妻橋驛から出る東武鐵道が通つてゐる。又岩槻から東北本線蓮田驛まで輕便鐵道がある。大宮へ戻つてもよい。

〔費用 汽車賃往復一圓餘、自動車賃片道五十錢位〕(迫水・増訂者林)

参考

喜田貞吉氏 岩槻在彌勒寺鐘銘(歴史地理二〇ノ二)

沼田頼輔氏 埼玉縣岩槻町彌勒寺槌鐘考(考古學雜誌二ノ一二)

同 氏 武相の古鐘(歴史地理二〇ノ一)

一三 松山附近

箭弓稻荷神社

吉見百穴

松山城址

吉見観音

東武鐵道東上線（池袋驛發）武州松山驛で下車（時間約一時間半）驛の北側の踏切を越えて西へ進むこと約百米、分れ道へ來たら右へ行くと直ぐ社が見える。これは箭弓稻荷の末社箭弓御魂社で俗に穴宮といふ。その隣の大きな社が箭弓稻荷神社である。

箭弓稻荷神社

縣社 松山町 松山 箭弓

祭神 保食命

平忠常が謀叛し勢猖獗を極めてゐた時に甲斐守源頼信が加護を蒙つて平定する事が出來たので、その神徳に感じ社殿を再建した。その後武將の尊信が厚かつたといふ。幣殿は文化八年（1811）に拜殿は天保六年（1835）に造營された。幣殿の後方に反対側（北側）に向つて小さな稻荷社がある。小さいが精巧な建築で元祿年間のものだといふ。

境内は約三萬平方米に近く樹木鬱蒼として一段と神域の風致を増してゐる。松杉等の常磐樹の間に櫻楓等を介植し、四季それらの趣がある。又相當廣い牡丹園もある。その他各地から移植した珍しい植物が多い。尙各宮殿下の御手植の松及び榎がある。

この神社は關東隨一の稻荷で、商賣繁昌、とりわけ相場吉兆の傳説がある。例祭は九月二十日であるが、三月の初午大祭には近縣から參詣人雲集し非常な雑踏を極めるといふ。（新編武藏風土記稿によると享保年間から急に増したといふ。）

この社の縁起を尋ねて見ると、後一條天皇の長元元年（1098）に平忠常が下總に謀叛し勢猖獗を極めてゐたとき、甲斐守源頼信が勅命を受けて討伐に向つた。松山で忠常と遭遇したとき露營の傍に物古りたる社を見た。里人に問ふた所が野久稻荷社といふ。そこで野久は箭弓と國音が同じであり武士に縁がある社號であるとしてその夜朝敵征服の祈願をした。黎明に及び、皇軍の將士の眼に白羽の箭の如き曉雲現れ、一陣の風颯と起り敵陣に向つて飛行した。そこで攻撃して勝利を得た。頼信は深く神徳に感激して社殿を建立し以後箭弓稻荷大明神と稱するに至つたといふ。現在源頼信奉納と傳ふる太刀を藏してゐる。その後衰微したが太田道灌が之を復興し、文明年間迄は代々太田氏が祭祀を執行してゐたといふ。又松山城主上田氏も代々尊敬してゐたが、度々の戦亂で荒廢に歸した所へ、天正十年（1582）兵燹に罹り社殿灰燼と化した。ところが天正十八年松平内膳正家廣川越城主となるや、神社の衰滅を慨歎し將軍家にはかり、川越喜多院の天海僧正を別當とし、元和二年（1616）に社殿を再建し、その後領主松平大和守も深く尊崇したといふ。

明治二十九年郷社に列せられ、爾後設備略々完成したので大正十二年五月縣社に昇格した。現在境内には昇格記念に關する碑が幾つもある。

ふたゝび驛前へ引返し、驛前の通りを進んで突當つて、左すれば松山の町へ入る。十字路（角に武州銀行の

建物あり。)に來たならば右へ(東へ)進み、街道を約一軒も行くとし市川に架した橋を渡る、直ぐ左へ入り吉見の名物、親子三代かゝつて掘つてあるといふ所謂岩窟ホテルの前を通り過ぎてゆくと向ふに百穴が見える。

吉見百穴^{ヒヤクアナ} 比企郡 西吉見村 南吉見

砂岸質の丘陵の半腹に蜂の巢の如く幾段にも亘つて無數の穴が開いてゐる。考古學上研究の好資料である。今は内務大臣指定「史蹟」となつてゐる。

この穴の最初の発見は既に明治三年で降雨の際鐵瓶大の古穴が露出したのを辿つて數十個をえたといふ。明治六年には和蘭人のシーボルト氏が來てこの穴から矢の根、小刀等を発見した。つゞいて明治二十年坪井正五郎氏が大々的の開鑿を試み二百三十七の穴を発見してから吉見の百穴として世間に有名になつた。

穴の中の廣さは大きいのは三・五米四方、高さ二米位、小さいのになると一立方米位だが、概して小さいもの方が多い。穴の内部からは祝部土器・金鏝・銀鏝及遺骨等を発見し、附近から埴輪をも發掘された。刀劍類も出て來た中に反身になつてゐる日本刀もあるが、それは松山落城の時寶刀を隠したのだらうといはれてゐる。尙神代文字らしいものの刻みつけてある穴もあるが、果して然るかどうかは不明である。穴の中は大抵、右か左かもしくは兩方が一段高くなつてゐる。

上述の穴の構造位置及發掘物から推論して、穴居の跡とも稱せられ(坪井博士はこの説である)。或は埋葬の穴とも稱せられ、或は倉庫とも稱されてゐるが、埋葬の穴といふ説が普通行はれてゐる。その理由は住居としては餘りに狭く且互の連絡が不便であり、又人骨の出て來た事等である。日常生活の器具が出て來たのは、未開人の間では日常使用してゐた器具を死體に添へて埋葬する習慣があるからであらう。

百穴から出て左手に見える丘が城址である。この道が大通りと合する所(東部)から登り始める。

松山城址 西吉見村 南吉見

丘陵の突角の一段高いところを利用したもの、市ノ川が彎曲して取り巻いてゐるから一層要害堅固である。

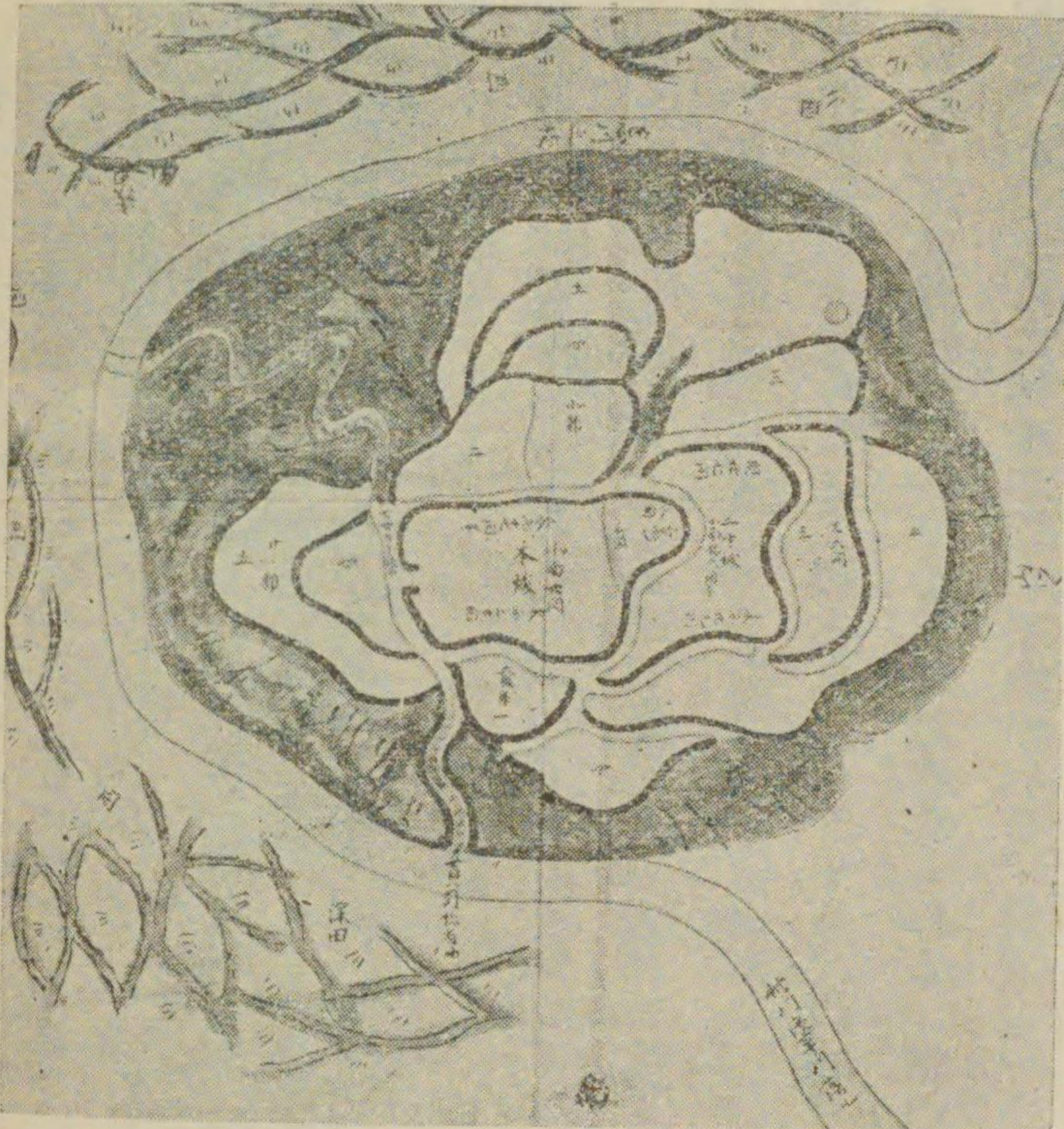
今尙郭の跡は歴然としてゐる。太田資正の築城法によつて一の丸、二の丸、三の丸と區劃してある。その間には深い凹みがあるが昔は前後を埋め貯水をし、溝濠としたのだといふ。全部で面積は約二ヘクタール位である。

西南端から登り始めると先づ本丸跡に達する。現在日蓮宗の堂が建つてゐる。又供養塔が幾つも立つてゐる。廣い武藏野が一望の下に瞰取せられる。堂の裏に稍々小高い所がある。之は物見櫓の跡だといふ。その北東に二十坪位の平地がある。倉敷といひ昔兵糧藏のあつた所だといふ。今でも焦米が地中から出てくるが、これは兵火の名残だといふ。

この城の創立年代は數説あつて決定し難い。近江三郡の領主であつた、淳和天皇の第二皇子信清が武藏に移り、足立三十六ヶ村、秩父十七ヶ村の二郡を領した時、この地に築城したのを始めとして、彼の子孫が代々城主で

あつたが、八代の孫長澤若狹守平信勝が長元十年(1098)七月死ぬと、九代平勝繁は兵庫頭に轉じ一時廢城となつた。

それ以降天文六年(1537)には扇谷上杉の持城であつた事は、鎌倉管領九代記・北條五代記・甲陽軍鑑・關侍傳記の松山合戦の條で明だが、しかし何時誰からその持城となつたか詳でない。新田義貞が鎌倉攻の途中城を構へたといふ説もあるが根據不明である。武藏志稿に上田左衛門尉(扇谷上杉の家老)この地に來り城を改築し秩父郡三堂村より移り久しく居住したと傳ふ。その大略の年代については鎌倉大草紙應永二十五年(1491)十月六日六本松合戦の條に、扇谷上杉氏定の臣松山城主上田上野介戦死すとある故それ以前に違ひない。寛正二年(1461)には成氏が松山を攻めた記事があるし「北條五代記」越えて長享二年(1488)には兩上杉が此處で争つた、と



(藏所也矩規澤長)圖古址城山松

がある。その後天文六年(1537)七月には川越城主上杉朝定が北條氏康と戦ひ、敗北して城をすて、松山城へ

逃げて來た。當時上田氏に續いて松山城主となつてゐたのは難波田であつたので、朝定は難波田彈正父子に救はれた。「關侍傳記・川越記・鎌倉管領九代記・北條五代記」

川越回復は更に同十二年十月から古河公方晴氏を加へて大々的に行はれた。その時も松山は根據地であつた。併し北條氏康が同十五年四月出馬するに及び、二十日の夜軍に朝定も難波田彈正父子も戦死した。城中には上田又次郎政廣が留守してゐたが、北條氏は之を追つて堀和刑部少輔を城代として松山は北條氏の支配に歸した時に太田資時は岩槻の城主であつたが、政廣が足戸岩に蟄居してゐるのを誘つて、同年八月二日夜再び松山を取返し、政廣は二の丸に住む事になつた。資時が歿すると上田は北條氏に内應して松山は再び北條氏の持城となつた。

ところが永祿四年(1561)太田資正は當時關東に雄視した上杉謙信と通じ、松山を又攻めとつて管領上杉憲政の末子憲勝を城主とした。冬になり謙信が雪に降りこめられてゐる間に、北條氏康が攻めて來た。憲勝は城兵を督勵して防いだが武田信玄の援兵が到着し、城の運命も危殆に瀕した。又一方謙信が再び武藏を窺ひ、北條氏も和を欲したので寛大な條件で講和し、上田又次郎を城代として引揚げた。「互相記・川越松山之記・新編武藏風土記稿・相州兵亂記」

天正十八年(1590)豊臣秀吉が小田原を攻めた際に關東諸城を陥れ、松山城をも包圍させた。時に城主上田父子は小田原城にあり、留守は難波田・木呂子・金子・苦林・山田の部城が守つてゐたが敵し難きを知つて速に開城した。「關八州古戦録」

同年八月徳川家康入國し、關八州は家康の治下に入り、松山城は松平内膳正家廣に賜はつた(所領一萬石)。しかし慶長六年(1601)家廣が濱松に移されてからは廢城となつて今日に至つてゐる。

二の丸三の丸跡を通つて降りてゆくと根小屋へ出る。文字の示す如く武士の家族の住んでゐた所であらう。東へ約三百米進み、それから北へ約二軒二進むと吉見觀音へ達する。

吉見觀音

岩殿山安樂寺 新義真言宗智山派 比企郡西吉見村御所

普通吉見觀音として世に知られてゐる。坂東札所十一番の靈場。行基菩薩の開創で、本尊は觀世音菩薩(高さ四十五纏)である。

仁王門をくぐり露坐の大佛の側を通つてゆくと觀音堂に達する。その右背に三重の塔が立つてゐる。

寺の縁起を尋ねると、行基が諸國巡歴中、こゝで觀世音菩薩の像を彫刻し岩窟に納めておいた。延暦十四年(795)五月坂上田村麿が奥州賊徒討伐の爲東國に發向し、當地に來て石扇を排して觀音像を拜した所光輝赫灼としてゐた。田村麿は勇躍して東國を平定し、大同元年(806)凱旋の後、報謝の爲自ら本願開基となり庭園を寄附し百僧を供養したといふ。爾後勅願寺となつてゐた。

その後源範賴が吉見庄を領してゐた時、所領の半を割いてこの寺に寄附し、堂塔を建立したといふ。以後代々の守護が修理して來たが、天文十五年(1546)上杉憲政が北條氏康と川越に戰つて破れた時殘黨が火を放ち堂塔は灰燼に歸したが、後に果慶法印といふ人が再興して三重塔等を建てた。尙現存の大佛は寛永年間に出來た

といふ。

こゝから武州松山驛迄約四軒、吹上・鴻巣へは各々八軒の道程である。尙鴻巣には淨土宗關東十八檀林の一である天照山良忠院勝願寺がある。

〔費用 池袋・武州松山間一圓〕(古谷・増訂者中村元)

一四 國府臺附近

總寧寺 國府臺城址(下總國府址) 國分寺 弘法寺

京成電車市川國府臺停留場で下車し江戸川堤を北進する。

正面に展開する丘陵が即ち國府臺である。國府附近の臺地故その名を得たと思はれる。地形を概見するに、松戸方面から連互する洪積層臺地の端が幾つか分岐して、その間を真間川及びその支流が潤し、南方一帯は沖積層の平地で主として田や沼地である。實に下總形勝地の隨一といつてもよい。又古歌などによれば太古は沿海の要津たることがわかる。今平地に臨んだ丘の中腹等に貝塚が發掘され、石器土器が見出されるのは當然である。又従つて交通も便利なので國府・國分寺が置かれ、下總一國の中心ともなり、西に太日の水流を控へた稀有の要害は武門の活動と共に屢々城砦に利用された。

兵營と練兵場との間を通り、兵營について左し、衛戍病院前で右に折れて行くと左に總寧寺がある。

總寧寺 安國山 曹洞宗 千葉縣 東葛飾郡 市川町 國府臺

堂宇は頽廢してみじめな状態になつてゐるが、江戸時代を通じて、下野富田大中寺・武藏越生龍穩寺と共に關東三箇寺の一に數へられ、共に關東曹洞宗の僧録となつて同宗の諸寺を管してゐた。(關東僧録は慶長年中に定められ、初は大中寺の代りに、遠江大洞寺であつた。)寺領百二十石を給せられ、境内

は今の所謂國府臺の大部分を占めて堂々たるものであつた。

永徳三年即ち弘和三年(1383)佐々木氏頼によつて近江馬場に創建されたのがこの寺の初で、本尊は釋迦如來開山は通幻和尚。北條氏政により天正三年(1575)下總關宿に移されたが屢々洪水の患があるので、寛文三年(1663)この地に移されたといふ。その後江戸三百年太平の餘澤を受けて勢力隆々たるものがあつた。

總寧寺山門の西に當つて里見八景園の遊園地がある。その工事に當つて古墳を崩し、城壘を切り開いて切角の遺跡を形なしに打壞し、俗惡な遊樂機關を設けたことは近時頗々として起る史蹟破壊の一例として慨歎に堪へない。遊園地の境界をなす塀などのため城址や國府址の地を一巡する事の出來なくなつたのは、その破壊と共に遺憾の極みである。

この附近一帯は中世の國府臺城址であり、古戰場であるがその踏査に當つては先史時代以來の要地であつたことを當に忘れてはならない。例へば千疊敷南部切通しの通路で屢々埴輪の破片を拾得したことを聞いた。これは後に述べるやうに頗る興味ある結論を齎す。

國府臺城址(下總國府址) 市川町 國府臺 櫻陣

その起原は不明であるが、恐らく下總國府のあつた要地として夙に注目せられたに違ひない。しかし長く居城とされたことはなく、戰爭に際して陣地とせられたことは屢々であつたらしい。城址の一部は衛戍病院の構内になつてゐるので見られぬが、重要な部分は廻る事が出来る。所謂千疊敷は主要部

で西は江戸川に臨んで懸崖をなし（今は餘程崩れてゐる）。北・東・南の三方は今でも高い處は高さ數米もある土壘で圍まれてゐる。氏康・氏政床几塚といふのは今は崩れて城もわからぬが、南部の土壘の一部であつたのだらう。千疊敷は空堀で圍らされ、北から東に互つては土壘が更に之を圍つた様な觀をなしてゐるが、後世總寧寺境内になつたりして更に人工が加へられ、今も色々手を加へてゐるので原狀は知るべくもないが、北端は崖下の田に下りる所謂からめき坂の道路の處で限られてゐるとも見得る様である。その東の限界は漢たるもので、南も衛戍病院の後に土壘を圍らした一部が見當る。最南端は羅漢の井へ下りる路の崖と見られるし、なほ兵營までも含むものと見られるが、要するに時と場合によつて相異があつたのであらう。勢力威大な寺院の境内として近世を過し、眺望の美で江戸人を誘つた遺蹟であるから、血腥い戰國の餘韻を瑣細に味ふことは出來ぬ。殊に遊園地・兵營等のため普通には徹底的調査は行はれぬ。

この邊一帶には傳説地が多い。その由來は土地の古老等に聞いたら面白からう。即ち氏康氏政床几塚・ぬけ穴・鐘掛松・鐘ヶ淵・殿守臺址・羅漢の井・夜泣石等その主なものである。而して傳説の一要素たる千疊敷の古墳は最も注意せねばならぬ。

古墳は諸國にもある如く、戰國の事件と結合され、里見氏又は正木氏墓といはれた。御丁寧にも文政十二年に立てた里見廣次（弘次の誤）廟と鐫つた石塔までである。形は前方後圓墳で、二個の阿波式（箱式）石棺が相並んで露出してゐる。嘗て鐵鏝・金銀鈴・甲冑・刀劍・土偶等を發見したといふ。傍にある夜泣石は何かこれに關係あるものといはれる。「南留別志・江戸名所圖會等」

この外古墳が數多あつてそれが築城の際利用せられたに違ひない。現に先に記したこと——埴輪の破片の發見——によつて、二基の古墳の間を少しく土壘で續けて容易に城砦となし得た事が想像出來る。

先づ文明十年（1478）太田道灌が上杉定正の意を受けてかりの陣地をかまへて千葉孝胤に對した。後、天文七年（1538）小弓御所義明が里見義堯等の軍と共に、北條氏綱・古河公方晴氏の軍と合戦敗死したのは、世人周知のことで、その事情戦況は「小弓御所様御討死軍物語」「國府臺戦記」（一名鴻臺前記）其他諸軍記に委しく記されてゐる。また永祿七年（1564）太田資正が、北條氏康に叛いて里見義弘等一族に通じて連合軍をつくり、この臺地に陣地を構へた、これ實に里見氏にとつては雪辱戦であつたが、これに敗れて雄飛する機會を失つた。

〔房總里見軍記卷三十七〕

衛戍病院正面の通りを東し、練兵場を横ぎつて切開いた坂路を下りて田圃に出で、東に見える森の間の坂を上りしばらくにして小祠の前に出る。この西北方の畑中に昔堂と云ふ所がある。此處は嘗て古國分寺本堂と傳へられてゐたが、近時早大の平野・瀧口兩氏の發掘により尼寺と書いてある瓦器が二枚出でた。布目瓦も澤山出で、字の書いてあるのも多く掘出されたといふ。

小祠から東南に當つて見えるのが今の國分寺である。

こゝに附言したいのは堀之内具塚である。もし立寄るならば尊菜池畔に道をとつて國分村國分字堀之内に出

るのであるが、發掘しないのならば國分寺へすぐ行く方が順である。堀之内貝塚はもと出土品が多いので有名で、我が一高史談會でも二度發掘に行つて相當の結果を占め得た。從來の報告によれば、土器・土偶・石鏃・石斧・敲石・錘石・石皿・凹石・槌石・骨針・貝輪・人骨等が出てゐる。なほこの貝塚については人類學雜誌二二四に吉田文俊氏の論文がある。

國分寺

國分山 新義真言宗豐山派 國分村 國分平川

御影石の門を入ると山門の礎石があり、突當りが藥師堂。方六間、礎石には舊國分寺のと思はれるのが使つてある。堂の南に大きな古礎石を使つた鐘樓がある。鐘は銘によれば清和天皇の御代權小掾貞世新鑄、建長八年(1156)九月平氏(千葉氏ノ一族)再鑄、今のは寶曆三年(1753)三月の三鑄といふ。鐘樓脇の門を入り本堂に行く。

一體今は小規模であるが、延元年中の火災にあふまでは古國分山金光明寺の大規模なもので、今寺の西北昔堂の畑の邊まで境内であつた。今の位置に建てられた堂宇も幾度かの火災に漸次縮小されて今日見るが如くになつたのである。

近時本堂に向つて右脇の藪から礎石が發見せられ、又其處から延慶三年(1310)とある板碑が發掘された。骨壺と關係あるらしく思はれる、

國分寺の門を出て坂路を下つて來るとやがて田圃の間に出る。小丘の麓で右に折れてゆくと、右上りと左下

りと路の岐れる坂に出る。こゝが持國坂で、近年切開かれて坂も樂になつた。その工事中に彌生式土器を發見したといふ。

坂を左に下りると右手に日蓮宗の龜井院があり、この境内には遠い昔手兒奈がくんだといふ眞間の井がある。龜井院を出て、手兒奈祠に至る。之は傳説の手兒奈を祀つたもので、手兒奈は當時稀な美人で身をはかなんで眞間の入江に身を投げたといふのが傳説の骨子で、萬葉詩人高橋連蟲麻呂、山部赤人等により詩化せられてゐる。

手兒奈祠を出て右して高い石段を上げれば弘法寺である。

弘法寺

眞間山 日蓮宗 市川町 眞間 本寺際

開基は富木胤繼、開山は日頂上人、本尊釋迦如來は富木胤繼の作といひ、樓門の金剛力士は運慶の作と傳へられる。石段を登りつめると樓門があり、正面が祖師堂、左に日頂堂、右手には有名な雙葉楓が目につく。鐘樓は小高い丘——恐らく土壘に使つた古墳であらう——の上に見える。

本堂・方丈・庫裡等は、西方中門の内にある。方丈の傍の遍覽亭は眺望の絶佳で古來有名であつて徳川將軍の來遊した事があつた。境内で特に目につくのは古墳の多いことである。或部分を見ると中世戦亂に際して人工を加へて城砦に利用したかと思はれる疑もないではないが、なほ研究を要する。勿論戰場となつたのは確である。

恐らく祖師堂の脇や樓門横などの土壘、所々に見える空堀址らしいもの等は、この境内が城郭に使はれたことを示すものであらう。果して然らばこれが古史に見える市川城の遺址ではなからうか。姑く疑を存しておく。市川城は頗る古くから見える。後には國府臺合戦の舞臺の一部として知られる「眞間の幽林」などはこゝを指すのであらう。既に永享の亂の際上杉氏に屬した千葉氏の軍が市川に陣し、康正元年（1461）千葉康胤が、同胤直を殺したので上杉氏が胤直の甥實胤・自胤を擁立して市川城に據らしめた。翌年足利成氏が之を攻落した。この外市川の名が現はれることは鎌倉大草紙等を見てもわかる。

寺寶菊池武房の軍旗と菊池家系圖四冊とは、當寺が九州千葉氏と密接な關係があるのと關係するものであらうか。なほ又正和・建武・曆應・文和等の年號の板碑數基を藏する。中には立派なのが一二基あり、殊に日蓮宗のであるから珍らしく、成田參詣記等にも見えてゐる。寶藏中にも見事なものが一基あり、明應八年（1499）六月二十三日日隆上人のものである。

寺傳は弘法大師草創、天台眞言兩部の一大梵刹であつたが、後大檀那富木胤繼、日蓮の宗義を信じ、當時の座主了性法印は天台の教綱を張り、甚しく日蓮宗を誹謗した。胤繼は法印と宗義を論じたが、了性終に屈し、自ら山門を脱した。是に於て胤繼は改めて日蓮宗となし、日蓮に開祖たらんことを請ふた。そこで日蓮はその徒日頂をしてその任に當らしめたといふ。本寺の名稱については、嘉曆三年（1338）の文書には眞間寺、康曆三年即ち弘和元年（1381）のには眞間法華堂とあり、享徳年間（義政の頃）のには弘法寺となつてゐる。弘法寺の名が弘法大師から出たといふのは、附會の説にすぎぬ。

石段を下りて眞直ぐ行き、眞間・繼橋といふ小橋を渡る。手兒奈傳説に伴ふものである。やがて古の眞間の入江の名残たる眞間川を渡り、南進すれば京成電车市川眞間停留場及び市川驛方面に向ひ、流れに沿つて右すと江戸川堤の通りへ出て、市川國府臺停留場に達する。

〔費用 京成電車押上、市川國府臺間往復三十六錢〕（中村榮孝・迫水・増訂者澤木・新井）

一五 中山・船橋方面

葛飾八幡宮 法華經寺 葛飾宮 船橋大神宮

京成電車八幡停留場で降りると左に葛飾八幡宮がある。

葛飾八幡宮 縣社 千葉東葛飾郡 八幡町 八幡宮内

祭神 譽田別尊 息長帶姫尊 玉依姫命

隨身門を入れれば右手の鐘樓には享保三年(1718)十一月の銘ある鐘がかゝつて居て、轉た八幡山法漸寺の別當の頃を想はせる。社殿の建築などには見るべきものがない。社務所玄關向つて左に雨ざらしになつてゐる寛政年間出土といふ、元亨元年(1321)辛酉十二月十七日在銘、且龍頭の側に應永二十一年(1414)三月廿一日と刻んだ鐘がある。社の右に大銀杏の神木がある。昭和六年に千本公孫樹として史蹟名勝天然記念物に指定された。

社傳では、寛平中(889—917)勅あつて石清水八幡を觀請し、降つて建久中(1190—98)源頼朝が社殿を修築したといふ。

鳥居を出て街道を出ると右側に不知八幡森がある。八幡宮鎮座の舊地といはれ、今尙一小石祠があつて森様といふ。或は古墳の址かともいはれ、之に關する俗傳を擧げると限りがないが、こゝには略する。ともかく徳川光

圀などと結びつけられたほどで近世の名所であつた。

元へ戻つて再び京成電車に乗る。中山法華經寺の門前で降り、通稱黒門を通り、法華經寺の山門をくゞり、鐘樓を見ながら進み、龍淵橋を渡つて五重塔を仰ぐ。山門をくゞる直前左に法華經寺の末寺智泉院がある。

法華經寺 正中山本妙法華經寺 日蓮宗 中山町 中山 和泉

開山は日常上人、中興は日祐上人、大本山である。

五重塔は方三間、屋根は銅板葺、元和八年(1622)再修、近年大修繕を行つた。五重塔と並んで大佛がある。祖師堂には日法作といふ日蓮の像を安置し、その南方墓地にある納骨堂には日常の納骨函と石碑とが藏めてある。法華堂は祖師堂の後にあり、桁行五間、梁間四間、屋根は入母屋造銅板葺、太田乗明の建立、日蓮が始めて説法した堂であるといひ、法華堂前の四足門は、屋根切妻造柿葺、文永年中(1264—)の造營、鎌倉愛染院から移して法華堂正門としたものといふ。五重塔・法華堂・四足門は特別保護建造物である。親作と傳へる鬼子母神は本堂に藏して參詣者が毎日絶えない。寶殿門を潜つて行くと聖教殿に至る、こゝに觀心本尊鈔を始め立正安國論その他宗祖の御眞蹟を護持奉安する。なほ所藏中、趙橋筆絹本著色十六羅漢像八曲屏風一雙は國寶である。

當寺について注意すべきは境内の構へである。即ち武家時代初期の豪族の邸宅を以て寺院とした當時の面影を見るべき土壘の存することである。

當山は、建長五年(1253)若宮領主富木胤繼が宗祖に遇うて之に歸依し、文應元年(1300)日蓮は胤繼の爲に來り法を説き一尊四菩薩を刻んで法華堂に安置し、胤繼は日常と號し、居宅を妙蓮山法華寺とした。時に中山の豪族太田乘明亦日蓮に歸依し、居館を捐て寺とし、正中山本妙寺といひ、法華堂を建て、日蓮の説法をきき、その長子を出家させて日高と號した。太田・富木の兩人は、身延山を開いた波木井實長と共に三大檀越と稱せらるといふ。日蓮の後援者として頗る有力な者であつた。後兩寺を併せて、正中山本妙法華經寺と改稱したものであるといふ。日祐を中興としてゐるが彼は千葉胤貞の子、後父に従つて九州に下り、肥前松玉山光勝寺を建て始めて九州に日蓮宗を弘め、後復中山に歸任した。又胤貞が五堂塔を建てたといふ(鎌倉大草紙)。兎に角今は日蓮宗四大本山の二に數へられてゐる。

五重塔の脇の道を北進すれば奥の院に至る。法華寺の舊地で小堂と日常の墓石とがある。

奥の院の門を出て右に日常上人の御廟を見て道を左に進むと前面に見える松林が若宮八幡である。こゝを出で競馬場中程から右に見える森に向つて進み寺内(テラウチ)に至る、南して線路を越え街道に出て更に東すれば左手に葛飾宮が目につく。

葛飾宮 葛飾村 本郷 葛飾

華表の扁額に「一郡惣社葛飾宮」といふ。小丘上の社宇は、前方勝間田の池と共に一景をなしてゐる。江戸名所圖會は祭神不詳としてゐる。

途中特に注意すべき史蹟はないが、船橋大神宮本宮を南方田圃の中に望む頃になれば、街道は愈々船橋町に入る。町は上代大結馬牧の地、中世伊勢神領ともなり、船橋御厨(夏見御厨)といつた地の一部を成し、近世千葉街道の要驛となつた。

船橋大神宮

意富比(日)神社 縣社 船橋町 船橋 五日市 宮内大日山オホヒ

祭神 天照大神 相殿 萬幡豊秋津姫命 手力雄命

創立について色々の傳説があるが、景行天皇四十一年四月、日本武尊が今の船橋海神の地に祭つて戰を祈られ、後同五十三年夏見村に移り、天喜三年(1055)源賴義が社殿を今の地に造營したといふ様な傳もある。

延喜式下總葛飾郡小社。近世まで關東一ノ宮の稱があつた。明治元年(1868)閏四月兵燹の爲に社殿焼失、同四年再建したのが今の社殿で、よい建築ではないが、茅葺なものと、後に森を負つたのとで神社らしい感じは遺憾なく現はれてゐる。境内廣く、攝社常盤神社・豊受神社及び八雲神社以下の末社も數多並んでゐる。日蓮奉納の神息劍・古文書及び寫等を藏して居る。古文書は船橋御厨や千葉氏事蹟の研究上重要である。

維新の火災に古記神寶の殆ど全部失はれた。社傳としては、「寶曆五乙未年正月大吉祥日、富右近秀胤謹誌、坪内門人喜多知貴校正」の縁起がある。祭神に就いては特に研究を要する。貞觀五年(863)五月、十三年四月、十六年三月と漸次昇授あつて、從四位下まで上つたことは、三代實錄でわかる。

仁平元年(1151)に、源義朝が近衛天皇の宣旨(今寫あり)を奉じて、船橋以下六郷の地を寄せた。後頼朝が之を葛西清重に與へて神領は失はれたが、應永六年(1509)千葉満胤が再び船橋六郷の地を寄せ、天正十九年には社領五十石を附せられ、徳川家康から諸役免除の朱印狀を贈られた。本社(夏見御厨(船橋御厨))に對する關係、千葉氏・高城氏などとの關係は莊園研究上に殊に興味が深い。

さて元來た街道を引かへし數百米にして右に曲れば同じ通りに京成電車と總武線との船橋驛がある。

〔費用 押上・八幡間二十四錢、八幡・中山間六錢、船橋・押上間三十錢、船橋・兩國間三十二錢〕

(中村榮孝・増訂者新井)

一六 千葉生實附近

千葉神社 大日寺 來迎寺 千葉城址 千葉寺 大巖寺 北生實城址

南生實城址(小弓御所址)

總武線千葉驛で下車すれば驛前の通りを南進すること數百米で右側に千葉神社がある。而してその鳥居の横を入ると右側に大日寺がある。又京成電車千葉終點で下車すれば驛前の道を左に行くと大日寺の横に出る。東京より千葉迄はいつれによつても約一時間で達する。

千葉神社 縣社 千葉縣 千葉市 院内

祭神 天御中主神 相殿 經津主命 日本武尊

元千葉氏の守護神たる妙見社跡である。社宇壯麗規模も整つてゐるが、明治三十七年焼失し、今は隨神門のみ残つてゐる。社殿は大正三年の再建である。

高望王妃、北辰妙見尊星菩薩を祈り「月星を手取るからにこの家の久しきことは劫河沙の數」と詠歌のお告げがあつて懷妊されたのが良文で、良文は長じて月に星を家紋となし、一族皆九曜・十曜・七曜等を旗幕の紋に用ひたといひ、又傳説によれば良文が將門を討つた時、上野染屋川の戦に妙見加護の靈驗によつて勝ち上野郡馬縣府中花園村七星山息災寺妙見菩薩を弓箭神として愈々尊崇し、一族至る所に妙見祠を勧請し、元服は必

千葉生實附近

すその社前でつたといふ。扱、舊記によれば覺山和尚が長保二年(1000)平忠常の力を借り、一條天皇の勅願所として北斗山金剛授寺を千葉郡池田郷(千葉城の項参照)に創建し常重の時そこに妙見祠を祭つたといふ。家康は神田二百石を寄せ、金剛授寺は別當として妙見寺とよばれ、祭星の祠壇で破軍星淨瑠璃世界主薬師如来を本尊とし著名の大寺で、境内廣く、今神社北方の小刹寶幢院の邊まで及んでゐたが明治元年廢寺となつた。

大日寺

阿毘盧山密乘院 新義真言宗豊山派 千葉市通町

今は堂宇も廢頽して居るが、千葉市累代の菩提所であつた。境内で堂とは道を隔てた西方の墓地に、千葉常兼以下胤宣まで十六代の墳墓であるといはれる五輪の石塔がある。最も左の高さ二米四五許りのが常胤のであらう。

寺傳にいふ、天平寶字元年(767)藤原家郷の創建で、仁生法師を開山とすると。併し明治十四年寺寶・記録等が皆焼失したので確實ではない。常重が日處山滿願寺を建てたのがこの寺の始で、頼胤が小金にあつた馬橋に大日寺を建て、鎌倉極樂寺の良觀上人に請うて開山とし、代々の將軍並に家門の菩提を祈り、曾孫貞胤の時之を千葉滿願寺に移して大日寺といつたとも傳へる。

十六代幕中主要なるのは馬加康胤の千葉奪取によつて自刃した胤直以下の靈を弔ふ爲に原胤茂が建てた五輪塔である。

再び千葉神社島居前に出て、すぐ左にまがり千葉刑務所の方へ進むこと二三百米、三ツ角をすこし左に入つ

た處に來迎寺がある。

來迎寺

知東山松壽院 淨土宗 千葉市北道場

この寺も明治十四年の大火に什寶文書全部を失つてからは荒果て、再興本堂も見るべき程でない境内本堂の西に氏胤等の墓と稱せられる五輪が七基ある。氏胤の墓といふのは「平氏胤語阿彌陀佛應永卅二、二月十五。」その室圓勝禪尼の墓といふのは「圓勝禪尼。永享八年丙辰三月十五日。」他の一には「吉原見阿。應永卅二、二月十五。」とある。これらは墓石整頓の度毎に幾度かその位置が遷されたので、現在では最左氏胤、第二禪尼、第三見阿、第四、第五無刻字、第六梵字、第七無刻字の順に列んでゐる。

本尊は毘首羯摩ビシュカツマの作と傳へる阿彌陀佛で、寺には寫本の「鐫木本千葉大系圖(四冊)がある。

本寺は開創未詳。建治頃一遍上人の開いた時宗の寺であつたのを、天正十八年家康の命により萬里小路秀房の男滿譽上人が中興して淨土宗に改め、寺領五十石、相當に勢力を有し、且五代が尊空親王であつた爲、一時は非常に振つたが、明治以後頽勢に向つた時にあたり祝融の災にあひ、今の状態になつたのである。

なほ墓石に刻まれた「應永卅二」は何を意味するか。氏胤は之より六十一年前(北朝の貞治四年九月十三日)に死んだ筈なので疑ふ人もあるが、應永頃は千葉隆盛の時であるから、恐らく追福の爲に建てたのであらう、又本堂前の四箇の臺石にもみな應永卅二……云々と刻まれてゐる。

來迎寺の前の通りを南進して都川に架せられた龜井橋を渡つて右に折れて行けば、千葉城址猪鼻臺下所謂御茶の水の古井の所へ出る。

千葉城址 千葉市猪鼻臺

お茶の水の處から猪鼻臺へ登ると、神明社のある所へ出る。これが千葉城最高の一郭である。その南方には城の主部と見るべき土壘に圍まれた部分があり、土壘は西高さ約五米五、漸次低くなつて東が一米位、北西に入口がある。東と北には空堀址が纔に存して居り、その他城の址らしい部分を求めれば東南の宅地の一郭西南の空地の一郭、これと前記宅地の南に接する千葉師範及附屬小學校の構内を得る。土壘の上から、又は神明社の前での眺望は捨て難いものがある。東京灣を前に臨み遠く北は佐倉の城山、南は房總の連山、近くは縣廳をはじめ諸名勝舊蹟は一眸の中に納まる。

この城に據つた千葉氏に關しては所傳が多岐で、俗傳も少からず、眞を得るのは難事であるが源平時代以來の名家で近世初期迄下總に雄飛して居た氏族であるから「千葉家盛衰記」・「千學集」・諸「千葉系圖」等によつて、その來歴の概要を知つておければ、千葉附近から下總一帯の史蹟を探るのには不便である。「房總叢書一輯」はこれらの諸書の重要なものを網羅してあつて便利である。

平忠常の子常將下總介となり、千葉郷に據つて始めて千葉氏を稱し、孫常兼は上總大椎城に居り、その子重常復大治元年(1138)千葉に移り、九月妙見祠を金剛授寺に建て、又千葉寺觀音堂を營んだ。

常重の子、常胤は治承四年(1180)九月、賴朝の招に應じて鎌倉に據ることを勧められ、賴朝、範賴に従て軍し而して常に全力を傾けて之を助けた。賴朝も亦功を賞する事厚く、多くの地を與へ補判をも賜つた程で、下總守護に補し、常胤の諸子は各地に散在して千葉氏の勢力は愈々振つた。即ち長子胤正家を承け、次子胤常は相馬師國の養子となり相馬小次郎師常と號したが、次の胤盛は千葉郡武石城に、次の胤信は香取郡大須賀城・松子城に、次の胤通は葛飾郡國分城に、次の胤頼は海上郡東庄前掛城・須賀山城・森山城に據つてそれ々々武石、大須賀・國分・東を氏とした。

後南北朝時代に、時胤の孫宗胤は勤王の兵を擧げ尊氏の黨と戦つて死んだが、その子胤貞は千葉に據つて宮方として立ち、やがて吉野へ參向し西征將軍懷良親王に供奉して九州に赴き大隈守に任じ肥前に住んで、肥前千葉の祖となり、下總千葉氏は數度の曲折の後代々足利氏に従つた。

千葉介滿胤は、應永六年(1399)關東管領滿兼が公方と稱した時、小山・結城等諸氏と共に關東八館と稱せられたといふ。後、持氏、上杉家の争を經、成氏、文安六年(寶徳元年)(1449)關東の主となるや初め滿胤の孫胤直之に従ひ、後に家宰圓城寺尙任の勧めにより上杉氏に與して成氏に對したが、一族小弓城主原胤房及びその子胤茂は尙任と權を争つて家政の紊亂して居た折柄故、胤氏は成氏の力を借りて千葉城を政め、胤直は島(志摩)城(香取郡多古町字塙臺)に、子胤宣は多古城(多古町多古臺)に走り據つた。時に康正元年(1465)である。この時、馬加城にゐた胤直の叔父康胤も成氏に應じて兵を動かしたが、胤房と力を併せて胤宣・胤直、胤直の弟賢胤等を滅して千葉城に入り、宗家を繼ぎ胤房は小金城を守つた。(小弓の條參照)

賢胤の子實胤・自胤あり、上杉氏は之を擁して市川城に據らせたが、成氏に攻め落され兄は武藏石濱城に、弟

珍しい建築で、境内廣く樹木繁茂し、櫻も多く、堂前には和銅二年(709)に植ゑたと傳へる大銀杏が立つてゐる。

堂の東南に太子堂あり、又裏の方堂の東北には殆んど鎮守社の觀ある龍藏神社がある。龍藏權現と稱し大治以來千葉の守護神とせられ、祭神は海津見神、小社だが社殿の精巧細美は人目を引く。

寺傳によれば和銅二年行基菩薩が靈夢により之を開き櫻樹で十一面觀世音を刻んだといふ。聖武天皇の勅願所で中世千葉氏歴代の祈願所であつた。後に家康は寺領百石を寄せた。古來、本宗の常法檀林所として知られてゐる。なほこの觀音堂は千葉常重の造營したものであるといふ。

なほ前に來た道を南進する事四軒弱、標柱に従つてゆけば大巖寺裏の森に出られる。

大巖寺

瀧澤山玄忠院 淨土宗 千葉郡蘇我町生實郷寺屋敷

この寺は約三六十年前の創建で、關東十八檀林の一、開山は道譽貞把上人。本尊阿彌陀佛坐像は慈覺大師作といふ。開基は小弓城主原式部大輔。背後にこんもりと森林を負つて高い山門・本堂等の諸堂宇がある。

もと東西十三間(三十三米六)、南北十一間(二十米)であつた本堂は明治三十五年の暴風に破損してからは切り詰めて修築されたが、寺内閑靜にして今も古檀林の面影を目のあたり見る様である。

附近にこの寺の所有林があるが、禁獵地なので頂の枯れた樹木に無數の鶉・五位鷺等がむらがり、そのため大

地は糞で白くなつてゐるといふ奇觀を呈してゐる。

大巖寺の山門を出て南し、房總線の踏切を越すと、左の森にひときわ抜出た巨松が見える、それが江戸時代生實城主であつた森川氏の菩提寺重俊院である。

その東が北生實城址で、沼澤の縁を傳つて行ける。

北生實城址

生實濱野村北生實

戰國時代と江戸時代と二度の利用で構造が頗る複雑になつてゐて判然とはいへないが、平野に突出した丘陵の全部を城郭と見てよからう。しかしこれは江戸時代のこと、當時の中心は今生實神社の西に接する部分であることは、空堀跡と口碑によつて想像できよう。

而して土俗「大手の松」と稱する、出戸東端にある巨松はこの頃の城に因んだ名であらう。なほ戰國時代の城は、恐らく土地の人が出丸址といひ、倉庫址といふ、字本城の地とこれを圍む東南の數郭を以てこれに充てよからう。しかし土壘を崩し、空堀を埋めて開墾してあるから現在精確に指示することは出来ない。

本城は天文八年(1569)原胤貞が南生實から移つたのに始る。後、弘治三年(1557)胤貞は己が後見してゐた白井久胤を逐つて白井城に移り子胤清(式部大輔)に本城を守らせた。永祿年中、正木大膳に奪はれ、同五年には胤貞が恢復し、その後はず、胤榮が此處に居たが彼も亦、元龜元年(一説天正三年)胤貞、小西城に退去

するに及んで白井に移り子胤家が守つてゐた。天正十八年(1590)千葉・白井その他と共に陥つた。かくて徳川氏治下となり、西郷家員が封ぜられ、後寛永二年森川重俊が封ぜられ、一萬石の陣屋として明治維新に及んだ。

北生實町並の通りを西に行き突當つて左し、しばらく行きて指標に従つて右し、南進すれば南生實城址の下へ出る。

南生實城址

小弓御所址 生實濱野村 南生實

南生實の字古城・東堀・松原・中原にまたがりて、高さ六米内外の臺地あり。これを南小弓城址といふ。

字古城俗に(要害の臺は、今畑と墓地とになつてゐて城の主部とも見られる。地形最も高く、東・西・北、それ〴〵二三百米位、東方と東北方の一部には高さ數米の土壘が残つてゐる。その西部は年々崩壊してゆくから原状はわからぬ。東から北へかけて圍らされた空堀は、竹林となつて址を存し、東北の入口はもとのものであらう。この一郭の東小郭を隔て、八劍神社がある。社の西を通ずる坂路は宮堀と稱せられて、ここに枿形と覺しい地形がある。この路は北の方所謂北門の坂に至り、路の東西の臺地一帯は城の主部と考へられる。その北端は所謂中鼻で、空堀を隔て、北の一郭と對し、東は絶壁をなして、宇野邊の田と大百池との谷合に臨み南は急坂、(恐らく斷崖を切り崩したらしい)を下

つて東堀に接してゐる。

字本郷臺は頗る複雑で泉田氏宅地及びその西の畑は注目に價する。

その南は大抵宅地となつてゐるが、これは古城の北の空堀につゞくものであらう。

本城は應永の末頃、千葉胤貞の子、原胤高(一説には満胤の子、又千學集・千葉家盛衰記・房總名家傳では胤の子)が據つたのに始まるらしい。子胤親・孫光胤・胤房・胤平世々千葉氏の老臣。康正元年(1455)三年胤房は足利成氏(後の古河公方)の兵を借りて一族、原胤茂と共に上杉方なる主胤直を攻め胤直の叔父康胤も胤房に應じ、胤直は子胤將と共に戦死し、康胤宗家を繼いで千葉に居るや、胤房は小金城に移り(千葉の條參照)胤房の従兄弟胤繼が代つて本城に居た。

是より先新田義重の後なる里見義實は文安二年(1445)房州を従へ、又之と前後して上總に武田信長が入つて勢を張り、(康正二年上總に入るとする説もあるが、恐らくそれ以前であらう。)共に成氏と屬してゐた。後に武藏千葉家の胤房が上杉氏の助力によつて武田氏を従へ、孝胤を破つて勢を得、原氏と衝突したが、胤繼の子友幸(一説に行朝)勝ち、武田氏は大永五年(1525)義明を戴いて本城を奪ひ、義明ここに在つて里見義堯等の力で勢を張つた、よつて義明大永五年より天文七年に至るまで十四年間「小弓御所」の稱は起る(千葉の條參照)

友幸時に小金に走つたが戦死し、義明は天文七年(1538)十月、北條氏綱と國府臺に戦つて敗死したので(國府臺の條參照)胤平の子胤貞(定)が上總小西城(山武郡大和村小西字城山、胤繼の所築)から之に移つたが、

翌八年更に北生實に城を築いて本城を去り、それ以後これに據つたものはないやうである。
 字古城の下から西へ田圃の道を進み、百龜喜^{ドウミキ}を経て行けば生實濱野の宿へ出る。
 踏切を越して南へ行くと右側に日蓮宗妙満寺派の如來山本行寺がある。頽廢はしてゐるが一顧に償する。
 歸りは北條線濱野で乗車して兩國へ着くのであるが、南生實を見てから再び北生實に戻り蘇我驛へ出た方が、房總線の列車も通るから便利であらう。
 又本章の順の逆に、初め濱野で下車し、本章記述の逆に廻つて千葉から京成電車なり、汽車なりで歸ればなほよからう。

附記

本章の記述の通りに一巡すれば、優に八軒以上あり可成の行程であるから時間を充分にとられたい。
 なほ北生實、南生實城址は、別個にこれのみを見學するのも一策であらう。

〔費用 京成電車、千葉往復一圓十二錢（片道五六錢）省線（兩國より往復）濱野千葉間、省線、同上自動車（乗合）二十錢、合計一圓三十錢位〕（中村榮孝・増訂者土方）

參考 千葉縣史蹟名勝天然記念物調査（第二輯）

大東京史蹟案内終

參照地圖表

- 一、本表には昭和七年九月現在の陸地測量部發行二萬五千分一及び五萬分一地形圖の内、郊外篇各章所要のものを記しました。
- 二、市内篇には必ずしも陸地測量部の地圖でなくても、市電、省私線等の記入してあるものならば大低間に合います。
- 三、『迄が一組で、便利な組を先に挙げてあります。不適當と思ふものは發賣中のものでも載せてありません。
- 四、本表には便宜上左の記號を用ひました。

△ 二萬五千分一 × 五萬分一
 地圖名に括弧を附してゐるのは必ずしも必要としません。

- 一 川崎・鶴見と生麥・小机
 △川崎 △横濱東部 △荏田
 ×東京西南部（×横濱）
- 二 柵形・高津方面
 △溝口 ×東京西南部
- 三 相模國分寺と鶴ヶ峯古戰場方面
 △座間 △横濱西部 ×藤澤 ×横濱
- 四 百草・立川方面
 △豊田 △府中 ×八王子 ×青梅
- 五 井ノ頭と深大寺

參照地圖表

参照地圖表

- △吉祥寺 △溝口 ×東京西北部 ×東京西南部
- 六 國分寺と府中
- △府中 △豊田 ×青梅 ×八王子
- 七 二宮、瀧山方面
- △拜島 (△八王子) ×青梅 (×八王子)
- 八 八王子附近
- △八王子 △拜島 (×上野原)
- ×八王子 (×上野原) ×青梅
- 九 東村山・山口方面
- △所澤 ×青梅
- 一〇 野火止附近
- △志木 ×東京西北部
- 一一 川越
- △川越
- 一二 大宮と岩槻
- (△浦和) ×大宮 (×粕壁)
- 一三 松山附近
- ×熊谷
- 一四 國府臺附近
- △船橋 ×東京東北部
- 一五 中山・船橋方面
- △船橋 ×東京東北部
- 一六 千葉生實附近
- (△千葉西部) △千葉東部 △曾我野
- ×千葉 (長澤・秋山)

江戸地誌解説略

我々が直接會に關係してゐた頃、「史蹟を探る人々に」といふ案内書の編纂を企て、東京郊外篇を公にした。次いで同書の改訂に方り、我々の用ひる参考書の解題を當時の委員から委ねられ、近郊地誌關係書目を編纂して改訂版に附載した。今回の増訂出版に際しては、更に多少の更訂をなして附載することを委員から依頼せられた。然るに本文の紙数が豫定より頗る増加し、一方予自らが記念の爲に江戸地誌解説稿を本書と前後して印行することになつたので、寫本は殆ど省いて、刊本も可成除き、下の如く簡單にしたのである。

一、書名等を檢べるものとして、

地誌目録 内務省地理局編 明治十八年活字印

半一冊本、大西林五郎編實用帝國地名辭典附刊本

河田巖氏の編纂で、全國の地誌の書名、冊數、刊寫の別を記し、極めて簡單な解説が附いてゐる。其中で、總國・武藏・下總の三項に注意すべきである。

古版地誌解題 和田萬吉撰 大正五年活字印半

一冊本

江戸地誌解説略

和田雲村舊藏の古版地誌(今大部分岩崎文庫所藏)を中心とし、古版地誌を解説したもの。コロタイプ摺の書影が挿入せられ、紙數、畫數などの統計も加へられてゐる。

江戸地誌解説稿 長澤規矩也撰 昭和七年東京

松雲堂活字印第一冊本

本會編纂の「東京近郊史蹟案内」附録の解題の基となつた草稿に今回増訂を加へたもので、本書記載の

範囲内に於て、地誌及び年中行事、花暦、寺鑑等の解説を試みたもの。刊本を主とし、主な寫本をも加へてあるから、本稿の不備は此書で補はれたい。

其他佐村八郎撰の國書解題(明治三十三年原刻本、明治三十七年増訂本、大正十五年縮印附叢書目錄本)は、全國の地名や社寺の記事を國郡別に編纂せる吉田東伍撰の大日本地名辭書(明治四十年完成原刻本、大正十二年縮印本)と共に一應参考すべきである。其他の辭書類はあまり参考にならぬ。

二、叢書としては

江戸叢書 一二卷 足立四郎吉(栗園)編 大正

六年活字印菊十二册本

江戸關係の珍籍刊行が主眼で、就中地誌類が其大部分を占め、風俗や天災に關するものも参考すべきである。此中に收められてゐる主なる参考書は嘉陵紀

書が活字本の第一冊に、葛飾記二卷(青山某)、駿河臺志等が第二冊に、江戸塵拾五卷・望海每談・江戸往古圖説(大橋方長)・慶長年間江戸圖考(中神守節)が第三冊に收められてゐる。

本書の外、刊行會本中には往々關係書籍が収録せられ、刊行會本以外では、温知叢書・百萬塔・未刊隨筆百種等は特に注意する必要がある。

三、江戸時代の地誌類で、我々が最も参考するものは次の三書である。

新篇武藏風土記稿 一二六五卷 昌平覺地誌局

撰 明治十七年内務省地理局刊活字半八十册本、大

日本地誌大系本

大學頭林銜の建議に基き、文化七年から文政九年まで費して編纂したもの。卷八までが總國部で、武藏一國の沿革・現状・藝文を擧げ、以下は各郡に分けて、郡毎に、首に正保・元祿の郡圖を掲げ、總説を置

行、墨水遊覽誌(卷一)、江戸名所記(卷二)、遊歴雜記(卷三—卷七)、増補江戸惣鹿子名所大全(卷三、四)、江戸雀(卷五、六)、江戸風俗總まくり(卷八)、砂子の殘月(卷九)、異本武江披砂(卷十一)、武江年表、武江年表補正略(卷十二)等で、外に文政十二年の火災記事の春の紅葉、安政震災記事の安政乙卯武江地動之記・時雨廻袖、之に沿革誌等として見るべきものを收め、地圖や繪圖を附刊してゐる。本書の缺點としては所收書の採擇に宜しきを缺き、且誤植の尠くないことで、是がやがて續刊の中止となつた理由であらう。

燕石十種 六輯 岩本佐七(活東子)編 寫本、

國書刊行會活字印菊三册本

前者の如く地誌のみを輯めた叢書ではないが、江戸の地理的沿革を調べるによい瀨田問答(大田覃編)、事蹟合考(柏崎具元)・南向茶話(酒井忠昌)や、隅田川兩岸を記述した墨水銷夏錄三卷(傳伊東某)の各

き、各地は之を領別にし、更に之を町村別にして、各地の有司に命じて調査せしめた材料に基いて、各村の沿革・現状を説き、小名・水利・官衙・社寺・名所舊蹟は固より、舊家・善行者に至るまで、細大漏さず述べてゐる。擔任者によつて多少體裁に差異あるとはいへ、民間の事業でないだけに、詳しいといふ點では第一の参考書といへよう。卷中に風景や寶物などの挿繪がある。卷首にも册別の目錄がないから、便宜上煩を厭はず、内容を册別にして左に掲げる。

- 總國(一一三)、豊島(四一七)、葛飾(七一—一二)、
- 荏原(一一—一七)、橋樹(一七—二一)、久良岐
- (二二—二四)、都筑(二五—二六)、多磨(二七—
- 四二)、新座(四三—四四)、足立(四五—五三)、入
- 間(五四—五八)、高麗(五九—六一)、比企(六一
- 六四)、横見(六五)、埼玉(六六—七〇)、大里
- (七一)、男妾(七二)、幡羅(七三)、榛澤(七四)、
- 那賀・兒玉(七五)、賀美(七六)、秩父(七七—八〇)。

明治二十二年に根岸武香氏の手によつて、郡別に販賣せられたが、此分では合計八十七冊になる。兩本に誤植が多いのは遺憾である。又本書中の考古學の参考となるものは別に考古學會から拔萃刊行せられた。

御府内備考 正編一四五卷續編一四七卷附一卷

三島政行等撰 大日本地誌大系本(正編のみ)

前書編纂中、御府内の事項は後に譲ることゝなつたが、後更に御府内風土記編纂の計畫起り、其参考に供するため文政九年から十二年にかけて幕命を奉じて編纂せられたのが本書の正編で、首に江戸總説があり、次に御城、以下曲輪の内外を方面別に沿革・現状を審に記してゐる。固より現在の東京市内の記事が大部分を占めてはゐるが、巢鴨(卷三九、四〇)日黒(卷一〇五)、龜戸(卷一四四、一四五)などの記載もある。續編は、江戸志等の誤を傳へたのを遺憾として、新篇武藏風土記稿にない社寺の書上や諸

杉田・金澤、西は狭山の丘陵、北は大宮、東は中山・船橋まで、此範圍内では大いに取捨が行はれてゐる。本書の價値は、記事といひ挿繪といひ、實地の見聞に基いた點にあつて、此點では多くの名所圖會中で一頭抜んでゐる。殊に繪は最も緻密で、古くから本書の功は繪が六分とまで評せられてゐる。神佛混淆時代の神社の境内と、現状とを比較してみるには最もよく、祭の狀態もよく描かれてゐる。幸成には本書の拾遺の著もあるといふが、未刊で、又余は未だに見ない。

四、次に市内を中心とする地誌類を掲げる。此類の最初はしきなんらん(徳永種久撰、寛永二十年原刻一冊本、後印改題「あづまめぐり」本、燕石十種本、我自刊我本)ではあるが地誌としての價値は殆どない。

紫の一本 戸田茂睡撰 寫本(二卷本、三卷本、四卷本、六卷本、十卷本)、百萬塔二卷本、國書刊行會戸

書に基いて其沿革・縁起を考へ、現状・寶物等を述べ、境内圖や寶物等の模寫圖を挿入し、全書を二分して、神社部は神明・八幡等同じ社を集め、寺院部は宗旨別に於て、位置によつてはわけてゐない。禪宗の庵室と陰陽師とを附録としてゐる。續編の編纂に携つた中心人物は神谷信順である。

江戸名所圖會(東都名所圖會) 七卷 齋藤幸

雄(長秋)撰、同幸孝(縣麻呂)・同幸成(月岑)校、長谷川雪且畫 天保七年原刻大二十冊本、有朋堂文庫本、大日本名所圖會本、日本圖會全集本 父祖三代かゝつて、實地見聞に基いて江戸の内外的名所舊蹟を當時流行の名所圖會として編んだもの、江戸を中心として、行政區劃には依らずに、放射狀に近きより遠きへと、社寺・古蹟・名勝の主なるものを項目的に擧げ、各項毎に沿革・現状を要領よく述べ、證するに足る文獻の大意を説き、之に雪且の精細な寫生畫や想像畫を加へてゐる。記載範圍は南は

田茂睡全集二卷本、隨筆文學選集二卷本 城・山・坂・谷……などと分類して編んだ江戸地誌では最初のものであらう。陶々齋・遺佚の兩人に假託して江戸の古跡を巡り乍ら問答をするといふ體裁。異本甚だ多く、中で柳亭種彦の跋ある本が最もよいといはれてゐる、此は正徳本といふ。

江戸名所記(江戸名所物語) 七卷 淺井了意

撰 寛文二年原刻大七冊本、國書刊行會續々群書類 従本、江戸叢書本 首に武藏國及び江戸御城の二條があり、江戸の内外に八十條の名所を擇び、面白く現状や由來を述べ、自作の和歌を以て結んでゐる。以下各書と同じく近郊にも少し言及してゐるが、概していへば、地誌としてよりも、繪入本でもあるし、よく當時の遊覽地の實狀を描き出してゐる點から風俗史上の重要な参考書の一であらう。次の三種は略々此系統を引いたもので、此本は其濫觴として京都刊行である。

江戸雀 一二巻 菱川師宣撰 延寶五年原刻大

十二冊本、國書刊行會近世文藝叢書本、江戸叢書本、日本隨筆大成本

大名屋敷や社寺町橋の總數などを末に記し、本文も總説といふべきものから方角別の名所に及び、凡そ項目を擧げて道順に現狀を紹介してゐるなど、前書よりも餘程地誌らしくなつてはゐるが、名所についての記述は前書と出入する部分が多く、彼の評論を闕いてゐる。挿繪や説明に努めて案内記の無味乾燥を避けた作者の苦心が窺はれる。且畫工が師宣といふので繪入本としての生命が大いに存する。

古郷歸乃江戸噺 六巻 撰者未詳 貞享四年

原刻大八冊本

傳本至つて稀であるが、その割に價値は少い。巻一が總説といふべき八條、以下九十餘條の名所を擧げて案内記としてゐる。王子・品川・池上・向島などの外郊外はなく、而も全體として、記事も挿繪も多く

前二書を踏襲してゐる。

江戸噺(江戸名所ばなし) 六巻 撰者未詳

元祿七年原刻大八冊本、國書刊行會近世文藝叢書本 前者の板木を用ひて數條ばかり増訂せられてゐる。故に刊行會本は江戸雀からとつた繪を省いてゐる。

江戸鹿子 六巻 藤田理兵衛撰 貞享四年原刻 横七冊本

江戸惣鹿子名所大全 六巻 藤田理兵衛撰

元祿三年原刻横八冊本、江戸叢書本

江戸惣鹿子 七巻 立羽不角(松月堂)?撰

元祿二年原刻横七冊本

六巻本は巻一が紫の一本流の坂・堀・池・風の編次で、巻二が年中行事及び諸大名名物記・札所等、巻三が内外の神社、巻四が佛寺、巻五・六は藝人や買物案内などといふ調子、七巻本は首に諸大名屋敷付がある。餘程流行したものと見え、此外に元祿四年、六年、正徳三年の序跋のある本もあり、遂に板木が

全く磨滅して次の改訂本が出来るに至つた位である。従つて現存の本は原裝の本が至つて少く、入本が多くて、其上一箇所に多くて二三部しかないので諸本の關係を調べるにはなかく困難である。元祿三年本には師宣の挿繪がある。

再訂 江戸惣鹿子新增大全 七巻 奥村玉華子

撰 寛延四年原刻横十三冊本

元祿三年本の板木磨滅によつて大修正を加へて出版せられたもの、書冊も文字も多少大きくし、順序も神社類聚(巻一)・佛閣類聚(巻二上至巻四上)・江戸府諸所靈佛類聚(巻四下)・名所古蹟類聚(巻五)・名所舊蹟雜集(巻六)・江都年中行事(巻七)と改め、内容も全く面目一新の感がある。

江戸砂子温故名跡誌 六巻 菊岡沾涼撰

享保十七年原刻半六冊本

武藏國大意に始まつて、巻一に廓内・廓外、巻二に淺草・下谷、巻三に本郷・谷中・駒込・王子・小石川・葉

鴨、巻四に牛込・小日向・雜司谷・大久保・四谷・中野・赤坂・世田谷、巻五に芝・麻布・品川・池上・矢口・目黒・碑文谷、巻六に深川・本所・向島・市川・中山などを、合計二十二方面に大別し、更に之を小別して、山川・神社・名所を詳しく考へて、佛刹は各方面別の末に一括して述べてゐる。

本書は實に江戸地誌編纂事業に於て、一時期を劃した書で、此後に成つた地誌は、多く範を本書に採つてゐて、又論駁は常に本書が標的となつてゐる。前後を通じて最も弘く行はれたのは本書及び次の明和増訂本で、流布の諸本の奥附が一様でないことも此事實を物語つてゐる。

再訂 江戸砂子温故名跡誌 六巻 丹治庶智(岩田

恒足軒)撰、牧冬涉校 明和九年原刻半八冊本

前書の補訂本で、寶曆までの屋敷や社寺の變遷を改め、増補部分は多く上層に「補」の字を加へてある。沾涼及び其門下の俳句や歴代住持の名などは省かれ

てゐる。前書より一層流布が弘い。岩崎文庫本には齋藤月岑の精しい訂補書入がある。

續江戸砂子温故名跡志 五卷 菊岡沾涼撰

享保二十年原刻半五册本

江戸砂子の撰者自らの補遺であるが、體裁は全く異つて、年中行事・名産・町名目・社寺拾遺・札所・名木・名薬・遊覽地などを述べてゐる。凡て記載は近郊にも及んでゐる。

江戸砂子補正 一卷 加賀美遠懷撰 寫本、國

書刊行會新燕石十種本

江戸砂子の脱漏・誤謬を卷次を逐つて増訂したものである。

砂子の殘月 二卷 撰者未詳 江戸叢書本

天保九年の撰、原書は高師藏稿本。書名からいへば

江戸砂子の補遺であるが、實は前書とは異つて、砂子以外の諸書をも引用して、武藏國に筆を起し、多くは方面を擧げて、其下に地名・社寺・名所・古蹟・雜

に十二日行程の道順を記し、他の卷には社寺（近郊も）を略述し、其他數項があり、江戸砂子等の謬を附録として正してゐる。砂子の拔書といふ世評があるが、懷中用として當時の人には便利であつたらう。今では少し物足りない。増補本は天正十八年以降の江戸事始年表を寛保二年まで補つてゐる。

江戸内めぐり 一卷 本多月樂（安勝子）撰

享保十三年原刻中一册本、延享三年刊中一册本

簡略過ぎて今は殆ど役立つ。延享本は諸大名屋敷付の項に補訂がある。無年號本は原刻本の後摺。

五、次には郊外及び武藏全國の地誌類について略説を試みる。

武藏野話 初編一卷附一卷二編三卷 齋藤敬天

（鶴城）撰 初編文化十二年（？）原刻大三册本、二

編文政十年原刻大三册本、大正十五年武藏野會刊附索引活字中一册本

事の由来を考へてゐる。

新編江戸志 一一卷 近藤義休撰 寫本

正改 新編江戸志 一〇卷 近藤義休撰、瀨名貞雄

補 寫本、江戸趣味文庫本（卷二迄）

江戸砂子に倣つて方面別に同様な體裁で記されてゐて、出藍の譽ありといふ評がある位。平塚・巢鴨・品川・矢口・世田谷・目黒・中野・龜戸等の郊外が含まれてゐる。十卷本は十一卷本の訂正本で、其一本巻首によれば山田半右衛門といふ飯田町の町人の校正をも經てゐるといふ。南葵文庫に綠一堂主人の新編江戸志再増補といふ寫本一册がある。

江府名勝志（江戸名勝志） 三卷附一卷 藤原之

廉（南陽子）撰 享保十八年原刻中三册本、延享三

年刊増補中三册本、明和元年刊中三册本

上卷に總説といふべきものがあり、次に名所を方角別にして遠近道印や兒玉壽昌の部分圖を補入し、未

見聞を主として、諸書の説を考へ、郊外の名所舊蹟を述べしもの、其名の如く西郊の記載が主で、殊に初編では入間・多摩・新座・秩父、二編でも入間・多摩各郡の記載が多い。古文書・板碑・石器などの模寫を本書が企てゝゐるのは確に一特色である。初編の奥に五編まで近刻と附記してあるが、二編まで刊行、而も二編は傳本殊に稀であるが、幸ひ帝國圖書館にあるから容易に原本も見られる。

四神地名録 一〇卷 古川辰（古松軒）撰 寫

本、昭和二年八王子小林氏刊謄寫版半四册本、近世社會經濟叢書本

寛政六年自序、幕命を奉じて近郊を巡檢し、其見聞を輯めたもの、豊島・多摩・荏原・葛飾・足立諸郡に分ち、郡毎に先づ總國風土記・和名抄を拔萃し、村別に風土物産・社寺舊蹟・風俗習慣・墳墓傳説・古器文書等の大概を述べ、地味水利など詳論してゐる。地誌として、又農業經濟の参考書として、最も貴重な

書であるから、本書の記載が各郡の全部に互らないのに弘く引用せられ、流布の寫本甚だ多く、内閣文庫の如き現に六部を藏する。此等の寫本には互に文字の異同あり、挿繪の精疎多少の差があるが、余の睹る所では凡そ二種、史料刊行會本（大國魂神社藏本）の如く、世田谷豪徳寺などに補遺ある本の流布は稍く少い。叢書本はテキストが悪い。

六、江戸名所圖會を除いた名所圖會と題するものに

東海道名所圖會 六卷 秋里舜福（籬島）撰

寛政九年原刻大六册本、明治四十三年葵文會刊活字本、大日本名所圖會本、日本圖會全集本

卷六に江島・鎌倉から日本橋までの記事がある。

木曾路名所圖會 六卷 秋里舜福撰 文化二

年原刻大七册本、大日本名所圖會本

卷四で大宮から日本橋まで、卷五で行徳・八幡、卷

六で武蔵野の大略の記事を少し注意すればよい。

七、次に郊外の紀行文の主なるものを挙げる。文を味

ふべき一小地方の紀行文は枚擧に堪へない。

遊歴雜記 五編一五卷 津田大淨（十方庵）撰

寫本、江戸叢書本

文化九年隱居してから、郊外に花鳥を侶として日を過した著者が、其折の見聞にかゝるものを主とし、之に追憶を加へて、現状や沿革を述べたものを順序もなく編纂したもの、遠く駿遠三尾まで及んでゐるが、之を地方別にもしない所が不便、併し近郊の記述が最も多く、當時の實狀を窺ふのによい。内閣文庫に二部あり、其一が廓然寺藏本、併し内四冊は缺けて別本を以て補つてゐる。帝國圖書館本は初編だけ。江戸叢書本には尾に主なる記事の分類索引があつて便利である。

四方の道草（嘉陵紀行） 不分卷 村尾正靖（嘉

陵）撰 帝國圖書館「江戸近郊道しるべ」本、帝國圖書館「四方の道くさ」本、江戸叢書「嘉陵紀行」本

武藏名所圖會 一二卷 植田孟縉撰 寫本

大正十五年史料刊行會刊謄寫版半十五册本

著者は新篇武藏風土記稿の材料蒐集の任に當つた人で、最初武藏全國の記述を企てたが、江戸名所圖會の編を聞き、多摩一郡に止めた。首に郡名・郡界を考へ、以下領別にして、實査に基いて主なる地名や社寺・舊蹟の由來を考證してゐる。挿繪が甚だ詳密である。文政三年の凡例がある。

成田參詣記（成田名所圖會） 五卷 中路定俊撰

同定得校 安政五年原刻大五册本

江戸から成田までの神社佛閣・名所舊蹟の來由を詳しく考へたもの。名所圖會とはいへ、考證適確、古器や古碑は固より、散佚の恐ある古文書などは之を模寫し、江戸名所圖會記載範圍の部分は努めて重複を避けてゐる。極通俗的な名所圖會流行の時代に於一寸歩調が變つてゐる。以上畫工の名は今略する。

著者の近郊の紀行文を輯めたもの、一編毎には大部分自ら命けたらしい題があるが、全體の書名は固より、編次もなかつたらしい。故に種々の名でよばれるに至つたものであらう。帝國圖書館本二種の内、前者が自筆本で、後者は後人が更に一部分歩いて前者所載の拓本をも得ようと努めたもの、江戸叢書が據つた内閣文庫本は單なる寫本に過ぎない。自筆本が最も内容が多いが、蠹害が甚しく、他の二本で補ふべきである。四方の道くさは第一冊を缺いてゐるが内閣文庫本は尙内容が少い。

調布日記 二卷^併一卷 大田覃（南畝）撰 寫本、

新百家説林蜀山人全集本

文化五六兩年に亙つた公用巡視の折の紀行文、川崎から府中・拜島・八王子・關戸・鶴木・深大寺などの記事があり、金石文や舊記などをうつしてゐる。蜀山人全集中には此外に多摩川方面の多少参考になるものがあるが今は略しておく。

相馬日記 四卷 高田與清撰、北條時鄰注

文政元年原刻大四册本

文化十四年の紀行。和文の紀行ではあるが、奥清の撰だけに考證の見るべきものがある。往路の石神井・野火留、歸路の千葉・中山・市川など注意すべきである。

八、以下純粹の地誌とはいへぬものから抜出すと、

武江年表 一二卷 齋藤幸成撰 嘉永二年原刻

前帙四卷大四册本、嘉永三年原刻後帙四卷大四册本、續四卷我自刊我本、江戸叢書合刻十二卷本、

江戸關係事項の天正十八年から明治六年までの年表で、特に風俗史に参考となるであらう。後人が之を補正したもの余の知る所で三種、中に喜多村信節の武江年表補正略一卷（國書刊行會續燕石十種本、江戸叢書本）が最も有名で、此外に朝倉龜三（無聲）編の増訂武江年表十一卷（國書刊行會本、同單行本）

は流石に朝倉氏だけに諸書によつて増訂し、索引を附けてあつて便利である。唯書名に相應しいやうにとて明治初年の項が削除せられてゐる。

江戸歳事記（東都歳時記） 四卷附一卷 齋藤幸

成撰、長谷川雪旦畫 天保九年原刻半五册本、風俗畫報本

江戸年中行事を記したものゝ中で白眉といふべきものの、四時の遊覽に具へる爲の著で、附録として札所を列擧してゐるのも便利である。類書には、増補江戸年中行事一卷（撰者未詳、享和三年？原刻中一册本、國書刊行會民間風俗年中行事本、春陽堂江戸年中行事本）・東都遊覽年中行事一卷（久松祐之撰、嘉永四年原刻本、春陽堂江戸年中行事本）・東都歳時記一卷（石井蠡撰、國書刊行會民間風俗年中行事本）・武江遊覽志略一卷（龍尾園尊香撰、安政六年序原刻横一册本、春陽堂江戸年中行事本）等がある。

江戸名所花暦 四卷 岡山鳥撰、長谷川雪旦

畫 文政十年原刻大三册本、有朋堂文庫江戸名所圖

會附刊本

四時に分ち、景物の名を項目として、江戸及び近郊の名所の現状・由來を列記し、時に名家の和歌・俳諧などを加へてゐる。花暦は他にも多く、草木花暦・江都順覽四時遊觀錄（安永五年原刻一枚摺、春陽堂江戸年中行事本）以來小さいものが多いが、此本が最も詳しく、最も流行し、明治になつて博文館では江戸名所圖會・江戸歳事記と共に摺つたが、何れも特に此種の本では元摺本より品がない感がある。此外に四神相應奇觀（江戸勝景華曆道之葉、爲永春水撰、天保中原刻小二册本）など有名である。三田村玄龍（鳶魚）編江戸年中行事（昭和二年春陽堂刊四六列一冊）は此等をまとめて、更に地誌などから年中行事を抜萃して來て、著者の見解を加へ、便利であるが、時に序跋挿畫を略し、挿畫の順を變へたりしてゐる。特殊の年中行事を収めた本については茲には一切觸

れないことにする。

東都本化道場記 一卷 不染堂蓮翁撰 天保

中原刻中一册本

御府内の法華宗の寺々の現状・由來を巡拜者の爲に凡そ方面を分けて説明し、詩歌や挿繪を加へたもの。末に近郊は近刻とあるが、本書中に已に堀之内・品川・池上・眞間・中山の邊まで含まれてゐるので、そのまま未刻に了つたものらしい。此外札所の案内記は多く小さいもの故、略しておき、一箇所の縁起や寫本類も煩を厭うて除くことにする。此類は圖書分類からいへば地誌ではなく寧ろ宗教に屬する。

九、江戸期以前の参考書は至つて少い、中で釋道興の回國雜記一卷（寫本、群書類従本、文政八年刊標注大二册本、帝國文庫續紀行文集本、有朋堂文庫日記紀行集本、國文東方佛教叢書本等）の武總の部分の記事は文明の頃の狀態を知り得る唯一の文獻ともいつてよい

位、非常に貴重な参考書といひたい。

一〇、次に明治大正の参考書の主なるものを挙げる。當代のはよく人に知られてゐるからごく簡単にし、枚舉に勝への興味本位の著書や、風俗の變遷などを敘したやうな著作物は悉く省くことにする。

東京府史蹟勝地調査報告書 東京府編刊

四六倍

第一冊 武蔵國分寺址の調査 大正一二刊

東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書

第二冊 天然紀念物老樹大木の調査 大正一三刊

第三冊 府下に於ける重要な史蹟 大正一四刊

立川・谷保・赤羽等及び淺草寺の傳法院、品川海晏寺の應永の雲板、下沼部の古墳等。

第四冊 同 大正一五刊

八王子、府中、深大寺、碑文谷圓融寺等。

第五冊 同 昭和二刊

四六倍

上記各書と共に圖版が多く入つてゐる。

埼玉縣からも、埼玉縣史蹟名勝天然紀念物報告が刊行中で、城址等の記述に面白い材料がある。

東京市史稿 東京市編刊 菊判

皇城編・御墓地編・市街編などと分類して目下刊行中
東京市に關する主要参考書である。

東京市史外篇 東京市編刊 四六判

東京市史の補助篇、編者の私見も加へられ、平易簡明各冊讀切を標榜してゐる。昭和七年九月先づ公刊せられた日本橋の一冊を見るに、古圖も加へられてゐるが、大分興味本位に傾いてゐる。

東京の史蹟 東京市編 大正十四年厚生閣刊

四六判

江戸地誌解説略

八王子の子安社、中野成願寺、赤塚大堂及び、圓融寺本堂、國分寺瓦等。

東京府史蹟保存物調査報告書

第六冊 同 昭和四刊

東村山正福寺・徳藏寺・西ヶ原・志村一里塚等。

第九冊 佛塔建築概説

府下に於ける佛塔建築 昭和七刊

本門寺・寛永寺・寶仙寺・淺草寺・天王寺・増上寺・原邸の五重塔、藤田邸の三重塔。

東京府史蹟調査報告

第七冊 名家墓所 昭和五刊

東京府名勝天然紀念物調査報告

第八冊 荒川堤の櫻 昭和六刊

以上は目下編刊中の東京府の報告で、内容によつてか、各書多少書名を異にしてゐる。

東京府史蹟 東京府編 大正八年洪洋社刊

史蹟名勝天然紀念物概観 東京市公園課編

大正十五年東京市刊 四六判

神奈川縣誌 神奈川縣編 大正二年同刊 菊判

本誌並に以下に掲げる郡縣誌は、沿革・名勝・舊蹟等の記載は簡單であるが、近時の狀況を知るには参考となるものが少くない。

埼玉縣誌 埼玉縣編 大正元年同刊 菊二冊

上卷六百六十餘頁は明治維新の歴史である。

千葉縣誌 千葉縣編 大正八年同刊 菊二冊

東京府管內善行録 東京府編 大正元年同府刊 四六倍判

寫真がよい。

東京府豊多摩郡誌 同郡編 大正五年同刊 菊判

東京府北豊島郡誌 同郡編 大正七年同郡農會刊 菊判

名所・舊蹟の記述はあるが、特に取立て、いふ程でない。

北多摩郡誌 同郡編 大正元年同刊 四六判

附録として主な名所・古蹟の記事がある。

南足立郡誌 同郡教育會編 大正十五年同刊

菊判

南葛飾郡誌 同郡編 大正十二年同刊 菊判

諸家の分擔執筆で、参考すべき記事がある。

入間郡誌 安部立郎編 大正元年川越謙受堂刊

菊判

参考すべきもの。

深川・神田・本所等の區史や其他町村誌は割愛する。

特説に於て西郊の人文地理學的考察を試みてゐる。

地圖・寫眞・統計表等が巧に本文の説明を助け、其の

地圖や寫眞がなかくよい。

武藏野歴史地理 高橋源一郎 同學會刊 四

六判

撰者の實查報告である所が貴重である。第一冊は總

論と北郊、第二冊は西郊と西南郊、第三冊は西南郊

と北多摩、第四冊は南多摩に及んでゐる。以下も續

刊せられる筈。

武藏野及其周圍 大正十三年刊

武藏野及其有史以前 大正十四年刊

上代の東京と其周圍 昭和二年刊

何れも磯部甲陽堂刊の四六判本。鳥居龍藏氏の考古

學上の論文や講演筆記を輯めたもの。

武相の古代文化 石野瑛 大正十三年泰文社

刊 菊判

武相郷土史論 日本歴史地理學會編 大正六

年仁友社刊 菊判

講習會の筆記で、喜田貞吉氏の上代の武相、八代國

治氏の鎌倉武士、田中義成氏の後北條氏の武相經營、

大類伸氏の城郭の變遷と武相、藤井甚太郎氏の江戸

灣の海防史、渡邊世祐氏の鎌倉公方と室町幕府、福

井利吉郎氏の武相の古美術、黑板勝美氏の武相の古

文書等参考となる。

東京近郊名所圖會 山下重民編 明治四十三

年東陽堂刊 四六倍二一冊

風俗畫報増刊大日本名所圖會の内、第七十六號より

第九十二號まで。過渡期の郊外の狀況を知るのによ

い。

都市及村落の研究 帝都と近郊 小田内通敏 大正七年 大

倉研究所刊 菊判

緒説に於て東京の都市的發達と郊外の發展とを説き

武藏と相模の考古學的研究を纏めたものである。

日本國誌 武藏 太田亮編 大正十四年磯部甲陽堂

刊 四六判

氏が年來氏族制度其他の調査上蒐集された資料を地

名・沿革・氏族・神社・佛閣・雜載等に類別し、若干意

見を加へられたものである。

房總叢書 同刊行會編并刊 大正元年以降

菊二冊

第一輯には史傳二十三篇系譜十二篇を、第二輯には

地誌及紀行二十六篇を収めてある。中に下總西部方

面に關して参考となるものがある。

以上の新舊書の外に、名家の墓所を列記し、又は實

査した書も少くない。其中では江戸諸名家墓所一覽

といふ古書が最も有名であるが、此外未刊のものや

近年出版のものが尠くない。専門の雜誌まで印行せ

られてゐる。然し乍ら、近來、殊に震災以後は墓所

同(同・大一二、三) 太刀

銘備州長船住長光 一口 附 明治天皇御寄附御沙汰書一通、御太刀目錄一通

同(同) 太刀

銘國綱 拵絲卷太刀(德川綱吉寄進) 一口 附 太刀目錄一通

同(同) 太刀

銘師光 拵絲卷太刀(德川家治寄進) 一口 附 太刀目錄一通

同(同) 太刀

銘重久 拵絲卷太刀(德川家宣寄進) 一口

建(昭六、一二)日枝神社社殿

本殿 桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅瓦葺

幣殿

桁行三間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅瓦葺

拜殿

桁行七間、梁間三間、向拜三間、單層、屋根入母屋造、千鳥破風及軒唐破風附、銅瓦葺

中門

一間平唐門、屋根銅瓦葺

透塀

延長一四七、二八米(四百八十六尺一分)、屋根銅瓦葺

權現造

(江戸)

日本徴兵保險株式會社 東京市麴町區山下町

建(昭六、一二)表門

(舊薩摩裝束屋敷門) 兩番所附表門、屋根入母屋造、兩番所各正面唐破風、總本瓦葺

増上寺 東京市芝區芝公園二號地

建(大四、三)三解脱門 五間三戶樓門、屋根入母屋造、本瓦葺(寛永元)

同(同) 東照宮本殿 桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、銅板葺(寛永十八)

繪(甲三・明三二、八)法然上人傳二卷 紙本著色

書(丙・同) 大藏經(元版) 五千三百八十六冊 五千九百三十一卷

(高麗版) 千二百五十九冊 六千五百三十一卷

台徳院靈廟 東京市芝區芝公園一號地

本殿 桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、銅板葺

相之間 桁行四間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺

拜殿 桁行五間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺

渡廊 桁行六間、梁間一間、單層、屋根切妻造、銅板葺

中門 四脚唐門、屋根銅板葺

透塀 延長九十四間、屋根銅板葺(今鐵板假葺)

水盤舍 二棟、各桁行三間、梁間二間、單層、屋根切妻造、銅板葺

勅額門 四脚門、屋根切妻造、銅板葺

權現造 (江戸)

建(昭五、五)台徳院(徳川秀忠)靈廟

惣門 八脚門、屋根入母屋造、銅板葺
 丁字門 一戸平唐門、屋根銅板葺
 奥院寶塔 木造寶塔
 同覆屋 八角堂、重層、屋根寶形造、銅板葺(下層今鐵板假葺)
 同中門 一戸向唐門、屋根銅板葺(今鐵板假葺)
 同玉垣 金剛石柵、延長二百九十三尺五寸
 同拜殿 桁行五間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
 同御成門 桁行二間、梁間一間、單層、門屋根切妻造、銅板葺(今鐵板假葺)

崇源院殿靈牌所 東京市芝區芝公園一號地及三號地

建(昭五、五)崇源院(德川秀忠夫人)靈牌所
 本殿 桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、銅板葺
 相之間 桁行三間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
 拜殿 桁行五間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
 渡廊 桁行三間、梁間一間、單層
 權現造(江戸)

附崇源院寶塔
 寶塔 石造八角圓堂形
 唐門 四脚唐門、屋根切妻造、銅板葺(今鐵板假葺)

天英院(德川家宣夫人)寶塔 石造八角圓堂形(江戸)
 廣大院(德川家齊夫人)寶塔 石造八角圓堂形(江戸)
 桂昌院(德川綱吉)寶塔 銅寶塔(江戸)
 月光院(德川家繼母)寶塔 石寶塔(江戸)

文昭院靈廟 東京市芝區芝公園三號地

本殿 桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
 相之間 桁行四間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
 拜殿 桁行七間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
 前廊 桁行三間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
 中門 桁行二間、梁間一間、向唐門、屋根銅板葺
 權現造(江戸)

建(昭五、五)文昭院(德川家宣)靈廟

左右廊 各桁行七間、梁間二間、單層、屋檐入母屋造、銅板葺
 渡廊 桁行九間、梁間一間、單層、屋檐切妻造、銅板葺
 內透塀 延長六十七間、屋檐銅板葺
 仕切門 一戶向唐門
 鐘樓 桁行三間、梁間二間、重層、袴腰付、屋檐入母屋造、銅板葺
 井戶屋形 桁行一間、梁間一間、單層、屋檐切妻造、銅板葺
 水盤舍 桁行一間、梁間一間、單層、屋檐入母屋造、銅板葺
 勅額門 四脚平唐門、屋檐銅板葺
 外透塀 延長二十三間、屋檐銅板葺
 二天門 八脚門、屋檐切妻造、銅板葺
 奧院寶塔 銅寶塔
 同中門 銅製一戶平唐門
 同波板塀 延長四十二間、屋檐銅板葺
 同拜殿 桁行五間、梁間二間、單層、屋檐入母屋造、銅板葺
 同前廊 桁行二間、梁間一間、屋檐兩下造、銅板葺

附 慎德院(德川家慶)靈廟

同唐門 一戶向唐門、屋檐銅板葺
 同透塀 延長四十六間、屋檐銅板葺
 寶塔 石寶塔
 中門 一戶平唐門、屋檐銅板葺
 波板塀 延長四十二間、屋檐銅板葺
 拜殿 桁行五間、梁間二間、單層、屋檐入母屋造、銅板葺
 前廊 桁行二間、梁間一間、單層、屋檐兩下造、銅板葺
 唐門 一戶向唐門、屋檐銅板葺
 透塀 延長二十七間、屋檐銅板葺
 昭德院寶塔 石寶塔
 靜寬院宮寶塔 銅寶塔
 中門 一戶平唐門、屋檐銅板葺
 波板塀 延長三十九間、屋檐銅板葺
 拜殿 桁行五間、梁間二間、單層、屋檐入母屋造、銅板葺
 前廊 桁行二間、梁間一間、單層、屋檐兩下造、銅板葺

昭德院(德川家茂)寶塔
靜寬院宮(德川家茂夫人)寶塔

唐門 一戶向唐門、屋根銅板葺
透塀 延長二十六間、屋根銅板葺

有章院靈廟

東京市芝區芝公園三號地

本殿 桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
相之間 桁行四間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
拜殿 桁行七間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
前廊 桁行三間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
中門 桁行二間、梁間一間、向唐門、屋根銅板葺
左右廊 各桁行七間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
渡廊 桁行九間、梁間一間、單層、屋根切妻造、銅板葺
內透塀 延長七十九間、屋根銅板葺(今鐵板及棧瓦假葺)
仕切門 一戶向唐門
鐘樓 桁行三間、梁間二間、重層、袴腰付、屋根入母屋造、銅板葺
井戶屋形 桁行一間、梁間一間、單層、屋根切妻造、銅板葺

建(昭五、五)有章院(徳川家繼)靈廟

權現造
(江戸)

水盤舍 桁行一間、梁間一間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
勅額門 四脚平唐門、屋根銅板葺
外透塀 延長百七間、屋根銅板葺(今鐵板假葺)
二天門 八脚門、屋根切妻造、銅板葺
奥院寶塔 石寶塔
同中門 一戶平唐門、屋根銅板葺
同波板塀 延長四十五間、屋根銅板葺(今鐵板假葺)
同拜殿 桁行五間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
同前廊 桁行二間、梁間一間、屋根兩下造、銅板葺
同唐門 一戶向唐門、屋根銅板葺
同透塀 延長四十七間、塀根屋板銅(今鐵板假葺)
寶塔 石寶塔
中門 一戶平唐門、屋根銅板葺
波板塀 延長四十五間、屋根銅板葺(今本瓦假葺)

附 惇信院(德川家重) 寶塔

拜殿 桁行五間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
 前廊 桁行二板、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
 唐門 一戶向唐門、屋根銅板葺
 透塀 延長三十一間、屋根銅板葺(今鐵板假葺)

天 眞 寺 東京市麻布區本村町

繪 (甲四・明四三、八) 十六羅漢像十六幅 絹本著色

乃 木 神 社 東京市赤坂區新坂町

刀 (丙・大一五、四) 刀 銘備前國住長船次郎左衛門尉勝光子次郎 一口 附毛利元雄寄進狀一通
兵衛治光一期一腰作之佐々木伊豫守

護 國 寺 東京市小石川區大塚坂下町

繪 (甲四・明四二、四) 尊勝曼荼羅圖一幅 絹本著色

工 (甲二・同) 金銅五鈺鈴一口

建 (昭六、一) 護國寺本堂 桁行七間、梁間七間、單層、屋根入母屋造、銅板本葺(江戸)

同 (同) 護國寺月光殿 桁行七間、梁間六間、單層、屋根入母屋造、棧瓦葺(江戸)

靈 雲 寺 東京市本郷區湯島新花町

繪 (甲三・明三二、八) 諸尊集會圖一幅 絹本著色

同 (甲四・同) 吉野曼荼羅圖 傳土佐吉光筆 一幅 絹本著色

同 (同) 十六羅漢圖十六幅 絹本著色

同 (同・大一五、四) 彌勒曼荼羅圖一幅 絹本著色

同 (同) 天帝圖一幅 絹本著色

東京帝國大學 東京市本郷區東京帝國大學構内

門 三間藥醫門、屋根切妻造、本瓦葺

番 所 左右各桁行三間、梁間二間、單層、屋根前後唐破風造、本瓦葺

建(昭六、一二)赤門(舊加賀屋敷御守殿門) 繫 塀 左右各三、六四米(十二尺)海鼠塀、屋根本瓦葺

附 袖 塀 左二七、三〇米(九十尺一寸)、右二九、二二米(九十六尺四寸)海鼠塀、屋根本瓦葺

根 津 神 社 東京市本郷區根津須賀町

刀 (丙・大三、四) 太 刀 銘長光 拵絲卷太刀(傳德川家宣寄進) 一口

同(同)

太刀

銘備州長船秀光康曆二年二月日
拵絲卷太刀(傳德川家宣寄進)

一口

建(昭六、一二)根津神社殿

本殿 桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅瓦葺
幣殿 桁行四間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅瓦葺
拜殿 桁行前面七間、後面九間、梁間三間、向拜三間、單層、
屋根入母屋造、千鳥破風及軒唐破風附、銅瓦葺
唐門 一間平戶門、屋根銅瓦葺

權現造
(江戸)

護國院

東京市下谷區上野櫻木町

繪(明三二、八)愛染明王像一幅 絹本着色

嚴有院靈廟

東京市下谷區上野櫻木町九番地

本殿 桁行五間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
相之間 桁行四間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
拜殿 桁行七間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
前廊 桁行三間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
中門 桁行二間、梁間一間、單層、屋根入母屋造、銅板葺

權現造
(江戸)

建(昭五、五)嚴有院(德川家繼)靈廟

左右廊 各桁行七間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
渡廊 延長七十九間、梁間一間、單層、屋根切妻造、銅板葺
透塀 延長八十二間、屋根銅瓦葺(今鐵板假葺)
仕切門 一戶平唐門、屋根銅板葺(今鐵板假葺)
鐘樓 桁行三間、梁間二間、重層、袴腰付、屋根入母屋造、銅板葺
水盤舍 桁行一間、梁間一間、單層、屋根切妻造、銅板葺
勅額門 四脚門、屋根切妻造、銅板葺
奥院寶塔 銅寶塔
同唐門 銅製一戶平唐門

附 凌明院(德川家治)寶塔

石寶塔

文恭院(德川家齊)寶塔

石寶塔

常憲院靈廟

東京市下谷區上野櫻木町九番地

本殿 桁行五間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅瓦葺
相之間 桁行四間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺

權現造
(江戸)

拜殿 桁行七間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
 前廊 桁行三間、梁間一間、單層、屋根兩下造、銅板葺
 中門 桁行二間、梁間一間、單層、屋根銅板葺
 左右廊 各桁行七間、梁間二間、單層、屋根入母屋造、銅板葺
 渡廊 桁行延長十四間、梁間一間、單層、屋根切妻造、銅板葺
 透塀 延長八十二間、屋根銅瓦葺(今鐵板假葺)
 仕切門 一戸平唐門、屋根銅板葺(今鐵板假葺)
 鐘樓 桁行三間、梁間二間、重層、袴腰付、屋根入母屋造、銅板葺
 水盤舍 桁行一間、梁間一間、單層、屋根切妻造、銅板葺
 勅額門 四脚門、屋根切妻造、銅板葺
 奥院寶塔 銅寶塔
 同唐門 銅製一戸平唐門

建(昭五、五)常憲院(德川綱吉)靈廟

附 有德院(德川吉宗)寶塔 石寶塔 石壇附
 孝恭院(德川家基)寶塔 石寶塔 石壇附

溫恭院(德川家定)寶塔 石寶塔
 天璋院(德川家定夫人)寶塔 石寶塔

寬永寺 東京市下谷區上野公園地

建(明四四、四)五重塔 三間五層塔婆、屋根第五層銅板葺、他本瓦葺(寬永一六)
 繪(甲四·大五、五)兩界曼荼羅圖二幅 絹本着色

淺草寺 東京市淺草區淺草公園地

建(明四四、四)本堂(觀音堂) 桁行七間、梁間七間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺(慶安二)
 同(同) 五重塔 三間五層塔婆、屋根銅板葺(慶安二)
 筆(丙·明三二、八)法華經(開結共) 十卷 紙本墨書
 書(同) 大藏經(元版) 五千四百二十八卷

德本寺 東京市淺草區松清町

繪(丙·明三八、四)本多正信像一幅 絹本着色 附同夫人像一幅

本門寺 東京市大森區池上町

建 (明四四、四) 五重塔 三間五層塔婆、屋根第一層第二層本瓦葺、他銅板葺(慶長一三)

同 (同) 仁王門 五間三戶樓門、屋根入母屋造、銅板葺(慶長一三)

彫 (昭三、八) 木造日蓮聖人坐像(祖師堂安置) 一軀 膝裏ニ正應元年六月八日大願主日持日淨ノ銘アリ

圓融寺 東京市日黑區碑文谷二丁目

建 (明四四、四) 本堂 (釋迦堂) 桁行三間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、茅葺(室町初?)

室泉寺 東京市澁谷區上智町

繪 (甲四・明四五、二) 興正菩薩像一幅 絹本着色 正安二年ノ裏書アリ

御嶽神社 東京府西多摩郡三田村

工 (丙・明三二、八) 赤絲威甲冑 (傳島山重忠奉納) 一領

同 (同) 紫裾濃甲冑一領

同 (同) 鍍金長覆輪太刀一口

同 (同・大七、四) 螺鈿鏡鞍 鏡、鏡付 一脊

刀 (同・明四四、四) 黒漆太刀 銘寶壽 一口

金剛寺 東京府西多摩郡青梅町

繪 (甲四・大四五、四) 如意輪觀音像一幅 絹本着色 軸ニ乾元元年七月廿日祐範之本尊トアリ 附 修理書付三通 版本兩界曼荼羅一通

大悲願寺 東京府西多摩郡増戸村

彫 (甲四・昭三、八) 木造傳阿彌陀如來及脇持 千手觀音菩薩 勢至菩薩 坐像三軀

八幡神社 東京府西多摩郡七生村

彫 (甲四・大三、四) 阿彌陀如來坐像一軀 銅造 建長二年ノ銘アリ

善明寺 東京府北多摩郡府中町

彫 (大二、四) 阿彌陀如來坐像一軀 鐵造(金佛殿安置) 建長五年二月ノ銘アリ 附 胎内佛阿彌陀如來立像一軀(鐵造)

國分寺 東京府北多摩郡國分寺村

彫 (大三、四) 藥師如來坐像一軀 木造

德藏寺 東京府北多摩郡東村山村

金 (丙・大三、八) 板碑一基 元弘三年齋藤盛貞等戰死供養碑

深大寺 東京府北多摩郡神代村

彫 (甲二・大二、四) 釋迦如來倚像一軀 銅造

普濟寺 東京府北多摩郡立川村

彫 (甲四・大二、四) 石幢一基 延文六年七月ノ銘アリ

同 (丙・同) 物外和尚坐像一軀 木造 胎内ニ應安三年十一月ノ銘アリ

八幡神社 東京府北多摩郡多摩村上染屋

彫 (甲四・昭三、八) 木造阿彌陀如來立像一軀 背面ニ弘長元年十二月日ノ銘アリ

總持寺 神奈川縣橋樹郡生見尾村

繪 (甲四・明三三、四) 提婆達多像一幅 紙本著色

同 (丙・明三八、四) 前田利家夫人像一幅 絹本著色 僧象山ノ賛アリ

工 (甲四・明三三、四) 刺繡大法被一枚

國分寺 神奈川縣高座郡海老名村

金 (丙・大一二、八) 銅鐘一口 正應五年十月六日ノ銘アリ

水堂觀世音 神奈川縣高座郡海老名村國分

彫 (大・一四、四) 千手觀音立像一軀 木造

東照宮 川越市

繪 (丙・明三九、四) 三十六歌仙額 (岩佐勝以筆) 三十六面

喜多院 川越市

繪 (甲四・大三、四) 職人盡繪六曲屏一雙 紙本著色 吉信ノ印アリ、二十四枚貼付

工 (同・大二、八) 銅鐘一口 正安二年三月ノ銘アリ

刀 (丙・明四三、四) 太刀 銘友成 拵絲卷太刀 一口

萬滿寺 千葉縣東葛飾郡馬橋村